

茨城県麻生町

二本木城跡 調査報告書

平成3年3月

茨城県行方郡麻生町二本木城跡調査会

正 面 図

F	H	西	東
7	32	第29層 空ノ部	第29層 Xノ部
6		第 3層 地盤	被 断
1.4		第 6層 地盤	地盤
15.8	1	1行 壁面は	壁面は
20	1	断行が2回で裏側は1回	断行が1回で裏側は2回
	5	30cm × 1回で	20cm × 1回で
16.7		F4	P6
32		F4 0.37 0.34	0.28 0.24
		F6 0. 26	0. 38
31.8		空ノ部	空ノ部
52.1		内壁側が	外壁側より
55		第29層 空ノ部	第29層 Xノ部
65		第 39層 実測値	出土遺物
70		第40層 出土遺物	実測値
76		カマド 3 / 20	カマド 1 / 25
125.2		總數 点 28点	總數 7点 ± 27点
11		更型土壌と	更型土壌とか
120.6		時間は1.5世紀標準	時間はおろし盤から1.5倍
9		16世紀中葉後半代に	16世紀中葉後半代までに

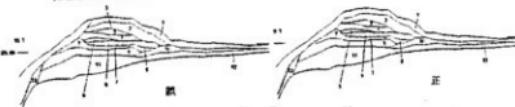


図7-2 生野郡(1/400)土壌断面

序

茨城県の東南に位置し、霞ヶ浦と北浦の間にはさまれた由緒ある歴史と景勝の地——麻生町。この地が人間生活を営むのに極めて良好な自然環境のもとで古くから文化が栄えました。このことは先人の遺した貝塚、城跡等数多くの遺跡が物語っております。

麻生町では、これらの埋蔵文化財の保護と貴重な文化財を後世に伝えていくことの重要性を踏まえ、その対応に努力しているところですが、遺跡の現状維持保存は年々難しい状況となつてきております。

この度、麻生町大字麻生字二本木 2485 番地を中心として土砂採取工事が計画されました。文化財保護の立場から遺跡を保存することを前提として協議を重ねましたが、現状維持保存が困難であるとの理由により、やむなく発掘調査をして記録保存することとなりました。

本調査を実施するにあたり、茨城県教育委員会、鹿行教育事務所の諸先生方の御指導のもとに、日本考古学研究所・藤原均氏を調査主任、内野健造氏、市村義和氏を調査員として「二本木城跡発掘調査会」を発足させ、地元の方々の御協力を得、無事発掘調査を完了することができました。これひとえに調査主任の藤原先生をはじめ関係各位の御指導、御協力の賜と深く感謝申し上げます。

さらに文化財保護に対する深い御理解のもと、発掘調査に係る一切の経費を御負担いただきました有限会社幸新取材代表取締役金山貢大氏に対して、深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

最後に、本書が行政のみにとどまらず、町民各位、学校など幅広く活用され、文化財の愛護精神と郷土を理解し、郷土愛を育てる貴重な文化資料となりますことを期待するものであります。

平成 3 年 3 月 31 日

二本木城跡発掘調査会

会長 根本宗一

(麻生町教育長)

例 言

1. 本報告書は、茨城県行方郡麻生町麻生字二本木に所在する二本木城跡の調査報告書である。
1. 本遺跡は、山砂採取工事に際し新たに発見された遺跡のため、字名を用い遺跡名とした。
1. 本遺跡の調査は、山砂採取工事に先行する埋蔵文化財の発掘調査である。
1. 本遺跡の調査は、平成2年10月4日～12月27日まで現地調査を行い、平成3年1月～3月末日まで行った。
1. 本遺跡の調査に当り、二本木城跡調査会及調査団を編成し調査を行い、藤原 均（日本考古学協会員、日本考古学研究所）が担当し、内野健造（県文化財保護指導員）、市村義和（日本考古学研究所）の3名で調査を行った。組織は、別項に記す。
1. 本報告書中の縮尺は、その都度表わしスケールは用いていない。また、水系レベルは各々表示した。また、遺物も同様である。
1. 本報告書中のスクリーラーは、以下の通りである。



1. 本報告書の執筆は、藤原 均、小川和博、道沢 明（以上日本考古学研究所）、内野健造の4名で行い、文末に氏名を記した。
1. 本報告書の増刷分は、調査会の了承を得て藤原が行った。
1. 調査に際し、下記の関係各位の協力と指導があったため、記して謝意を表する。

茨城県教育庁文化課、鹿行教育事務所、麻生町教育委員会、麻生町文化財保護審議会、(傍)幸新取材、根本宗一（麻生町教育長）、茂木雅博（茨城大学教授）、平輪一郎（町文化財保護審議会長）、貝塚俊洋、小林秀美、高野 裕、鶴田和夫（以上町教育委員会）、小沢芳男、永作栄吉（以上幸新取材）、地元作業員の方々

調査会

役職名	氏 名	備 考
会 長	根本宗一	麻生町教育委員会教育長
副会長	平輪一郎	麻生町文化財保護審議会会长
理 事	藤崎謙一	麻生町文化財保護審議会副会長
理 事	植田敏雄	麻生町文化財保護審議会専門調査員
理 事	茂木雅博	麻生町文化財保護審議会専門調査員
理 事	藤原 均	日本考古学研究所
理 事	内野健造	茨城県文化財保護指導員
理 事	金山貴大	(㈲幸新取材代表取締役)
理 事	小沢芳男	(㈲幸新取材所長)
理 事	貝塚俊洋	麻生町教育委員会事務局長
監 事	永作栄吉	(㈲幸新取材社員)
監 事	糸賀洋一	麻生町出納室長
幹 事	小林秀美	麻生町教育委員会社会教育係長
幹 事	高野 裕	麻生町教育委員会社会教育主事
(指導機関) 茨城県教育庁文化課、鹿行教育事務所		

調査団

役職名	氏 名	備 考
団 長	根本宗一	麻生町教育委員会教育長
副団長	貝塚俊洋	麻生町教育委員会事務局長
調査主任	藤原 均	日本考古学研究所
調査員	内野健造	茨城県文化財保護指導員
調査員	市村義和	日本考古学研究所
協 力 員	約20名	地元協力者
事 務 員	高野 裕	麻生町教育委員会社会教育主事
事 務 員	茂木洋子	地元協力者

作業員

青木清二 今泉清衛 上原和男 男庭留吉 鈴木一美
 鈴木八重子 関次郎 関義平 高橋直一郎
 千ヶ崎進 手賀善之 永作晴希 羽生喜八郎
 浜田広子 原喜代子 平野春男 藤崎利男 本沢信
 前島久 宮内俊雄
 石井千枝子 加藤美智子 新海静子 鈴木紀子
 白石恵子

目 次

序 文	V. 遺構と遺物
例 言	1. 城跡の遺構と遺物
調査会組織	1). 主郭部（Iノ郭）の遺構
日 次	2). IIノ郭の調査結果
挿 図 目 次	3). IIノ郭堀
挿 表 目 次	4). IIノ郭斜面構築
図 版 目 次	5). 虎 口
I. 調査に到るまでの経過	6). IIノ郭土壤（第9号土壤）
II. 調査の経過	7). 城跡出土遺物
III. 位置と環境	2. 中世以前の遺構と遺物
1. 地理的環境	1). 住居址
2. 歴史的環境	2). 土 壤
IV. 二本木城跡の構造	3). 溝
1. 二本木城跡の構造	4). 土壤、溝その他の遺物
2. 調査結果の概要	3. 古代、中世以外の遺構と遺物
	4. その他の遺物
	まとめ

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	第14図 主郭部（Iノ郭）第1.2号地下式倉庫実測図
第2図 遺跡付近地形図	第15図 主郭部（Iノ郭）第1号堅穴実測図
第3図 麻生町中近世城跡位置図	第16図 ピット群実測図
第4図 二本木城跡地形図	第17図 1T（IIノ郭）実測図
第5図 二本木城跡全測図	第18図 2T（IIノ郭）実測図
第6図 IIノ郭堀実測図	第19図 3T（IIノ郭）実測図
第7図 主郭部（Iノ郭）中央土塁土層図	第20図 4T、5T（IIノ郭）実測図
第8図 主郭部（Iノ郭）第1号掘立柱建物址実測図	第21図 6T（IIノ郭）実測図
第9図 主郭部（Iノ郭）第2号掘立柱建物址実測図	第22図 7T・8T（IIノ郭）実測図
第10図 主郭部（Iノ郭）第3号掘立柱建物址実測図	第23図 9T（IIノ郭）実測図
第11図 主郭部（Iノ郭）第1号柵列実測図	第24図 10T・11T（IIノ郭）実測図
第12図 主郭部（Iノ郭）井戸実測図	第25図 12T（IIノ郭）実測図
第13図 主郭部（Iノ郭）第1号溝実測図	第26図 13T・14T（IIノ郭）実測図
	第27図 15T・16T（IIノ郭）実測図
	第28図 17T・18T（IIノ郭）実測図

- | | | | |
|--------|------------------|--------|-------------------|
| 第 29 図 | Ⅱノ郭遺構実測図 | 第 54 図 | 第 11 号住居址実測図 |
| 第 30 図 | 虎口(Ⅱノ郭)実測図 1 | 第 55 図 | 第 11 号住居址出土遺物 |
| 第 31 図 | 虎口(Ⅱノ郭)実測図 2 | 第 56 図 | 第 12 号住居址実測図 |
| 第 32 図 | 土壤(第 9 号土壤)実測図 1 | 第 57 図 | 第 12 号住居址出土遺物 |
| 第 33 図 | 中世出土遺物 1 | 第 58 図 | 第 13 号住居址実測図 |
| 第 34 図 | 中世出土遺物 2 | 第 59 図 | 第 13 号住居址出土遺物 |
| 第 35 図 | 中世出土遺物 3 | 第 60 図 | 第 14 号住居址実測図 |
| 第 36 図 | 中世出土遺物 4 | 第 61 図 | 第 15 号住居址実測図 |
| 第 37 図 | 主郭部(Ⅰノ郭)井戸出土遺物 | 第 62 図 | 第 15 号住居址出土遺物 |
| 第 38 図 | 城址出土遺物 | 第 63 図 | 第 16 号住居址実測図 |
| 第 39 図 | 第 1 号住居址出土遺物 | 第 64 図 | 第 16 号住居址出土遺物 |
| 第 40 図 | 第 1 号住居址実測図 | 第 65 図 | 土壤実測図 2 |
| 第 41 図 | 第 2 号住居址実測図 | 第 66 図 | 土壤実測図 3 |
| 第 42 図 | 第 3 号住居址実測図 | 第 67 図 | 土壤実測図 4 |
| 第 43 図 | 第 3 号住居址カマド実測図 | 第 68 図 | 土壤実測図 5 |
| 第 44 図 | 第 3 号住居址出土遺物 | 第 69 図 | 第 2 号溝実測図 |
| 第 45 図 | 第 4 号住居址実測図 | 第 70 図 | 土壤、溝、その他出土遺物 |
| 第 46 図 | 第 4 号住居址出土遺物 | 第 71 図 | Ⅱノ郭西側貝層実測図 |
| 第 47 図 | 第 5 号住居址実測図 | 第 72 図 | 第Ⅳ郭実測図 |
| 第 48 図 | 第 6 号住居址実測図 | 第 73 図 | 井戸 2 実測図 |
| 第 49 図 | 第 7 号、8 号住居址実測図 | 第 74 図 | 第Ⅹ郭(トレンチ実測図) |
| 第 50 図 | 第 9 号住居址実測図 | 第 75 図 | 道路状遺構実測図 |
| 第 51 図 | 第 9 号住居址出土遺物 | 第 76 図 | ナイフ実測図 |
| 第 52 図 | 第 10 号住居址実測図 | 第 77 図 | 縄文土器拓影図 |
| 第 53 図 | 第 10 号住居址出土遺物 | 第 78 図 | 弥生土器拓影図 |
| | | 第 79 図 | 主郭部 30 T・25 T 土層図 |

挿 表 目 次

- | | |
|-------|-----------------|
| 第 1 表 | 遺構一覧表 1(中世) |
| 第 2 表 | 遺構一覧表 2(住居址、土壤) |
| 第 3 表 | 第 1 号建物址柱穴一覧表 |
| 第 4 表 | 第 2 号建物址柱穴一覧表 |
| 第 5 表 | 第 3 号建物址柱穴一覧表 |
| 第 6 表 | 第 1 号柵列柱穴一覧表 |
| 第 7 表 | 柱穴一覧表 |
| 第 8 表 | 柵計測値一覧表 |
| 第 9 表 | 城跡出土遺物一覧表 1 |

- | | |
|--------|------------------|
| 第 10 表 | 城跡出土遺物一覧表 2 |
| 第 11 表 | 第 1 号住居址出土遺物一覧表 |
| 第 12 表 | 第 3 号住居址出土遺物一覧表 |
| 第 13 表 | 第 4 号住居址出土遺物一覧表 |
| 第 14 表 | 第 8 号住居址出土遺物一覧表 |
| 第 15 表 | 第 9 号住居址出土遺物一覧表 |
| 第 16 表 | 第 10 号住居址出土遺物一覧表 |
| 第 17 表 | 第 11 号住居址出土遺物一覧表 |
| 第 18 表 | 第 12 号住居址出土遺物一覧表 |

第19表 第13号住居址出土遺物一覧表

第20表 第15号住居址出土遺物一覧表

第21表 第16号住居址出土遺物一覧表

第22表 土壌、溝その他出土遺物一覧表

図 版 目 次

- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| 図版 1 現況 | 図版 15 住居址1 (第1.2.3.4号住居址) |
| 図版 2 遺構全景 | 図版 16 住居址2 (第4.5.6.7.8.9号住居址) |
| 図版 3 遺跡全景 | 図版 17 住居址3 (第10.11.12.13号住居址) |
| 図版 4 遺跡現況 | 図版 18 住居址4 (第13.14.15.16号住居址) |
| 図版 5 遺跡現況 | 図版 19 土壌、その他の遺構 |
| 図版 6 遺跡現況 | 図版 20 井戸、溝及遺物出土状況1 |
| 図版 7 主郭部(1ノ郭)遺構 | 図版 21 遺物出土状況2 |
| 図版 8 1ノ郭遺構1 (1.2.3T) | 図版 22 出土遺物1 (中世) |
| 図版 9 1ノ郭遺構2 (4.5.6.7.8.9T) | 図版 23 出土遺物2 (井戸、T) |
| 図版 10 1ノ郭遺構3 (9.10.11.12T) | 図版 24 出土遺物3 (住居址) |
| 図版 11 1ノ郭遺構4 (13.14.15T) | 図版 25 出土遺物4 (住居址) |
| 図版 12 1ノ郭遺構5 (16.17.28T、虎口) | 図版 26 出土遺物5 (住居址) |
| 図版 13 土壠、西側斜面盛土 | 図版 27 出土遺物6 (住居址、土壌、溝) |
| 図版 14 土壌 (第1.2.3.9号) | 図版 28 出土遺物7 (石器、龜文、弥生) |

I 調査に至る経過

今回調査の行われた二本木城跡は、麻生町大字麻生字二本木 2458 番地を中心に現存する保存状況良好な遺跡の一つである。

平成 2 年 4 月隣接地の土砂採取を行っていた稻敷群桜川村大字神宮寺 2490 、有限会社幸新取材より、土塁跡らしきものの発見の届出を受ける。早速、遺跡台帳と照合したが台帳には記載されておらず、新発見の遺跡（城館跡）として、県文化財保護指導員内野健造先生に現地の確認調査を依頼。その結果、明らかに中世の城跡であることを確認する。

同年 8 月 1 日御幸新取材より、町教育委員会に対し土砂採取計画について概略説明があった。当初の計画では、平成 5 、 6 年頃の採取計画を考えていたが、城下川改修工事に伴い七砂が緊急に必要になり、早急に採取したいとの申し入れを受けた。

教育委員会としては、文化財保護の立場から現状での保存を要請したが今回発見された遺跡は、土砂採取場として緊急の開発計画により現状のままの保存が極めて困難であり、発掘調査による遺跡の記録保存を図りたい旨の申し入れを受ける。

翌 8 月 2 日次城大学教授（麻生町文化財保護審議会専門調査員）茂木雅博先生を通して、日本考古学研究所へ調査を依頼。

8 月 6 日 日本考古学研究所小川和博・藤原均両名來庁、現地を確認。（御幸新取材の現場責任者と事前協議をする。）

8 月 8 日 日本考古学研究所藤原均氏と教育委員会で遺跡の名称について協議「二本木城跡」とすることにする。

10 月 4 日 町文化財保護審議会を開催。教育委員会により、これまでの経緯を説明するとともに、開発に伴う遺跡の取扱いについて協議。最終答申として、遺跡のもつ意義や重要性を踏まえ、慎重な調査により記録保存を図ることで合意を得る。

この旨を御幸新取材側に連絡、調査に対する協力を依頼。調査方法、経費等について協議を申し入れた。

10 月 11 日 麻生町教育委員会教育長根本宗一を会長とする「二本木城跡発掘調査会」が発足。

調査予定期間　自平成 2 年 10 月 11 日～至平成 2 年 12 月 25 日　調査担当者調査主任日本考古学研究所藤原均　調査員次城県文化財保護指導員内野健造　日本考古学研究所市村義和とする発掘調査團が結成され調査実施の運びとなった。

II 調査の経過

当ニ二本木城跡の調査経過は、9 月に麻生町教育委員会より調査依頼を受け、9 月末に現地視察等を行い、10 月上旬より発掘調査を行うこととした。これにより、10 月 4 日より現地調査を開始することとなった。現地調査は、当初地形測量、杭打ち、現況写真撮影、トレーンチ（以下「T」と略称）設定等を行い、10 月 13 日に終了した。10 月 15 日より、T 内発掘調査を開始し主郭、土塁、堀、建物址、溝等を確認した。この T 調査により、主郭内は全面表土除去することとしたが、表土層は 10cm 程度

であるため 10 月 22 日に終了した。排土の関係上、主郭から斜面下の堀と曲輪群へと調査を行うこととした。なお、主郭内で中世以外に奈良、平安時代の住居址が数基確認されたが、調査は中世終了後とした。調査は、T 主体である。

主郭部の調査は、建物址、溝、井戸、土壤等が中世の遺構であることから、この調査を 10 月 23 日より開始し 10 月 30 日に終了したため、堀の調査等に移行した。堀は、東側が明治以降の開墾により消失している以外全周していることを確認した。堀の一部は、住居址調査時の排土部として残した。この後、各曲輪部分の調査に移行し、11 月 17 日に終了した。

奈良、平安時代の遺構調査は、11 月 19 日より開始し主郭部分で 15 基、北東部尾根で 1 基の合計 16 基確認した。主郭部の住居址は、北側と東側に集中する傾向を示していた。住居址の調査は、12 月 26 日で終了した。また、一部調査用諸機材の移動を行う。

12 月 27 日は、航空写真、全測等を行い現地調査を終了した。整理作業は、12 月 28 日より平成 3 年 3 月 30 日まで行い、全作業を終了した。

II 位置と環境

1. 地理的環境（第 1～3 図）

当二本木城跡の所在する麻生町は、茨城県南部で行方台地の東部に位置しており、東側は牛堀町と潮来町に接し、北側は北浦に南側は西浦（霞ヶ浦）に接しており、西側では北浦村と玉造町に接している。麻生町が所在する行方台地は、茨城県の南部より南東方向に細長く突出した舌状台地で、北浦と西浦（霞ヶ浦）に挟まれている。行方台地は、北浦と西浦（霞ヶ浦）に流入する大小河川により開折された谷が、台地内陸部まで入り込み複雑な地形を形成し、台地は舌状台地となっており先端部分は狭く、台地内陸部は広い台地となっている。

行方台地が、以上のように複雑な地形を呈しているため、麻生町も同様の状況を有している。麻生町は、東側で北浦に流入する蔵川と雁通川に合流する小河川と、西側では西浦（霞ヶ浦）に流入する城下川や夜起川など中河川と共に合流する小河川、などの中小河川が台地内陸部まで樹枝状に入り込み、複雑な舌状台地を形成している。舌状台地の先端は、狭くなっているのに対し内陸部に入るほど広い台地となっている。また、舌状台地先端の下端は狭いが細長い沖積地を形成している。

当二本木城址は、麻生町の南西部で中央部より南西方向に細長く伸びた舌状台地より、南西方向に小さく突出する舌状台地上に位置し、東側、西側、北側の 3 方向には城下川に流入する小河川による広く深い開折谷が入り込んでいる。当城跡は、この小舌状台地北側で最高所（標高 36 m 程度）の所に位置している。

城下川を狭んで、南西方向約 1 km の所には舌状台地先端部分を利用した麻生城跡が所在しているが、立地条件は当城跡とは異なった立地条件を有している。

以上のような地理的条件下では、開折谷は水田に、沖積地は宅地、畠地、水田等に、台地上は畠地宅地等に広く利用されている。



- | | | | |
|----------|----------|---------|------------|
| 1) 二本木城跡 | 4) 麻生城跡 | 7) 鴨山城跡 | 10) 八幡城跡 |
| 2) 島並城跡 | 5) 小屋下城跡 | 8) 大宮城跡 | 11) 富田城堆定地 |
| 3) 小高城跡 | 6) 登城城跡 | 9) 須城城跡 | 12) 麻生陣屋跡 |

第1図 遺跡位置図 (1/5万)

2. 歴史的環境

行方郡の地形は、その中央部を、標高 30 m 前後の小丘が細長く南北に走っており、東側は北浦の湖南側は鶴川を隔てて、鹿島郡と相対しており、西側は霞ヶ浦と常陸利根川とに接し、三方を水に囲まれた地形は「行方半島」の別名によく現われている。麻生町は此の行方郡の中央部に位置しているのである。現在はその風光明美なことで、水郷固定公園に指定されている水郷地帯も、古代には鹿島灘より入る内海であった。東の北浦方向と、西の霞ヶ浦方向より入る支谷は、各所に複雑な地形を形成した。奈良時代に記されたといわれている「常陸風土記」には、この出入の多い地形から「行細」の地名が生まれたといっている。

古代の人びとは、意外とどのかな生活が出来たのでないだろうか、台地には動物や、植物などの山の幸が、海岸へ下りると魚貝類、海草などの海の幸が豊富に手に入り、縄文人の良き生活環境であったと考えられる。縄文時代の遺跡は、町内のいたる所に遺されているが、その主なものを上げると、小牧第一貝塚（麻生町小牧）井久保貝塚（麻生町小牧）岡平貝塚（麻生町岡）熊野神社貝塚（麻生町石神）大麻貝塚（麻生町田町）於下貝塚（麻生町於下）井貝貝塚（麻生町井貝）大門貝塚（麻生町富田）矢津貝塚（麻生町於下）などがある。

弥生時代になると、支谷を利用して谷津田（水田）が拓かれていった。支谷の上方に池を築き、その下方に谷津田が次第に開拓されていったのである。「常陸風土記」にも、谷津田開発の苦労の様子が「夜刀神」「椎井池」の伝説として記されている。弥生時代の主な遺跡としては、熊野神社貝塚（麻生町石神）島並貝塚（麻生町島並）大門貝塚（麻生町富田）などがある。

古墳時代の行方郡は、金銅製冠の出土で有名な三昧塚古墳（玉造町沖洲）や、大小 200 基にも及ぶ大生古墳群（潮来町大生）が出現しているが、東に北浦西に霞ヶ浦をひかえている麻生町も、これら丘上の縁辺部には、無数の古墳が築かれたと思われる。現在麻生町に残されている主な古墳は、権現山古墳（麻生町藏川）於山古墳（麻生町白浜）瓢箪塚古墳（麻生町矢幡）根小屋古墳群（麻生町根小屋）富田古墳群（麻生町富田）皇徳寺古墳群（麻生町小高）などがある。

奈良時代頃の常陸國府は、今の石岡市にあった。國府からは、役人達が鹿島神宮参拝のための重要な道路が、行方郡の台地中央を北から南へ通じていた。これを「行方の駅路」と称した。駅路には曾尾駅（玉造町）と板來駅（潮来町）が置かれ、板來の駅からは、海路鹿島の大舟津に通じていた。当時の行方郡の中心は、現在の麻生町行方におかれていたが「行方郡家」の跡はまだ確認されていない。「常陸風土記」などから判断すると、行方の国神神社の周辺ではないだろうか、といわれている。また「行方駅路」は、水戸街道とも、開拓道路ともいわれ、その一部は現在でも利用されているのである。

平安時代になると、平安の都（京都）を造った桓武天皇の子孫が、常陸國へ移住して来て、平氏を姓として常陸、下総（主に現在の県西地域）あたりに住んでいたが、次第に武士団として勢力を強めていった。平将門は下総国豊田（現在の茨城県結城郡石下町）に住んでいたが、領地問題や女姓問題から争いとなり、伯父であり、平氏の頭領である平國春を攻め殺し、その上國府を襲って金品を強奪し、民家 300 戸余りを焼くなどの乱暴を働いた。その頃鹿島の藤原玄明なる者が、行方の不動倉（国の保管米倉庫）を襲って食糧を強奪している。玄明は同時に河内郡（現在の稻敷郡の一部）の不動倉も襲っているところから、霞ヶ浦を利用して、海賊的な行動をしていたものであろう。玄明は役人の



第2図 遺跡付近地形図 (1/5,000)
 () は小字名



- | | | | |
|---------|----------|----------|----------|
| 1 二本木城跡 | 6 小屋ノ内城跡 | 11 船子城跡 | 16 富田城跡 |
| 2 島並城跡 | 7 鴨山城跡 | 12 洞台城跡 | 17 根古屋城跡 |
| 3 小高城跡 | 8 石神城跡 | 13 笠松台城跡 | 18 合頬城跡 |
| 4 麻生城跡 | 9 古屋城跡 | 14 笠松城跡 | 19 新宮城跡 |
| 5 小屋下城跡 | 10 中城跡 | 15 麻生陣屋 | |

第3図 麻生町中近世地跡位置図

追撃を怖れて、将門に助けを求めた。日に余る将門の所業に、朝廷も將門追討の命令を下し、平貞盛や藤原秀郷らを追捕囚賊使に任命した。貞盛は将門に殺された平國家の長男で、これ迄将門との戦には利はなかったが、天慶3年（940）2月14日藤原秀郷と連合して敵の手薄に乗り、猿島郡の北山の地で遂に将門を倒すことが出来たのであるが、貞盛はこれによって一躍英雄にのし上り、軍功により伊勢守に任せられ、伊勢平氏の祖となったのである。貞盛はまた、常陸大掾職を弟の子維幹に譲り、その子孫が常陸大掾氏を称して各地に勢力を伸ばし、中世武士団の頭領となっていくのである。

行方郡における常陸大掾氏の進出は、平安時代の末頃であった。現在の水戸市あたりに勢力を持っていた吉田大掾清幹は、その次男忠幹を行方郡に、三男成幹と鹿島郡に遣わした。おそらく両郡ともに清幹の勢力圏内にあり、郡司職となって派遣されて来たものと考えられている。忠幹は行方（麻生町行方）に館を構えて行方氏を名乗ったが、その子宗幹の時源平の戦いが起きた。行方鹿島の大掾支族は、源軍に属して戦い、行方宗幹は討死したといわれている。

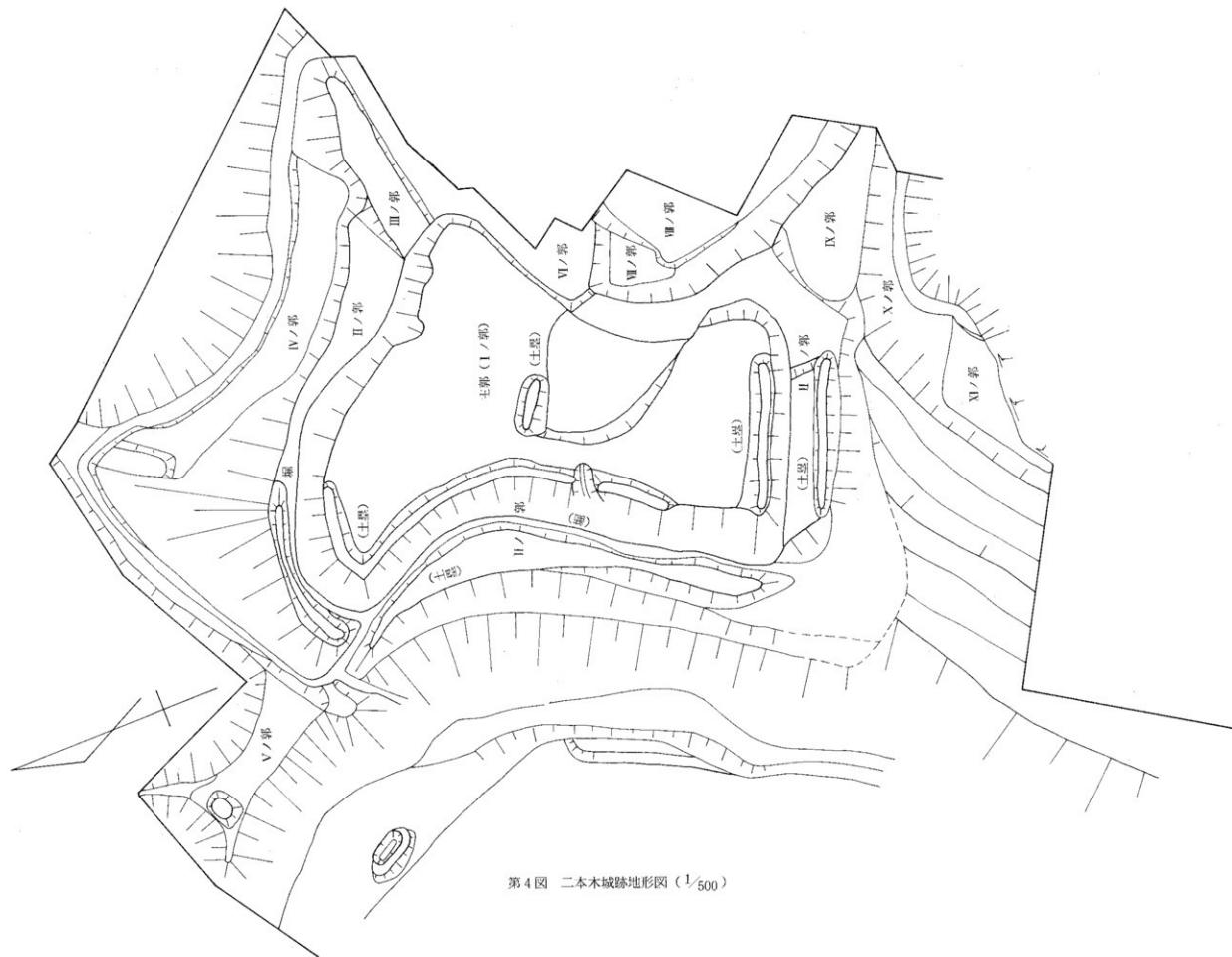
宗幹には四人の子があり、長男為幹は小高（麻生町小高）に、次男高幹は鳴崎（牛堀町島須）に、三男家幹は麻生（麻生町麻生）に、四男幹政は玉造（玉造町玉造）に館を構え、行方四頭と称され、それぞれの支族も郡内各所に配置され、互いに勢力の争いはあったが、中世末期頃迄続いたのである。

中世の常陸國を支配した豪族を大別すると、小田氏（筑波市小田）大掾氏（石岡市）佐竹氏（太田市）などが上げられるが、秀吉が天下統一を目指す頃となると、常陸國の様相も大きく変っていった。鎌倉時代以来の名門だった小田氏が滅び、変って太田の佐竹氏の勢力が拡大されていった。行方郡内でも同族間の争いが激しく、互いに攻防がくり返されていたが、天文12年（1544）麻生城の麻生之幹は、同族の嶋崎定安（牛堀町島須）の攻撃をうけて滅亡した。

天文18年（1590）秀吉は、関東の雄小田原の北條氏を攻略してこれを滅したが、鹿行の武士達も、佐竹氏と共に参加している。秀吉の信頼を得ている佐竹氏は、その年の12月水戸城の江戸重道を滅し続いて府中の大掾清幹を攻め滅し、そして翌天文19年（1591）2月には、行方鹿島の諸城主らを甘言をもって太田へ呼び寄せて殺し、その所領を没収したのである。世に言う「鹿行三十三館主生害」事件である。行方郡内でこの事件に巻きこまれた武士達は、玉造氏（玉造町）手賀氏（玉造町）小高氏（麻生町）相賀氏（麻生町）武田氏（北浦村）鳴崎氏（牛堀町）などが上げられる。

鎌倉時代以来の郡内の各族「大掾支族」の400年に亘る中世領主の時代は終りを遂げたのであるがその後、関ヶ原の戦いに不参加の佐竹氏は、徳川家康の激怒をかって、久保田城（秋田）へ国替されてしまった。

近世の行方郡は、水戸領、天領、旗本領に配分されるが麻生には、新庄駿河守直頼が三万石（後に一万石に減封）で移封された。江戸時代における鹿行唯一の藩庁のおかれた所である。麻生町はその城下町として発展、郡の中心となって近代を迎えるのである。



第4図 二本木城跡地形図 (1/500)



IV 二本木城跡の概要

1. 二本木城跡の構造（第4図、図版1・4～6）

当二本木城跡は、前項で述べたように城下川へ流入する小河川等により開折された舌状台地上に位置しているため、台地の東側、西側、北側には広く深い開折谷が入り込んでいる。台地は、南西方向に細長く突出しており、城跡は台地の北東部最高所（標高36m程度）に位置している。調査区は、最高所より北側である。調査区の南側は、南側掘跡付近まで山砂採取工事が進んでいたため、南側の大部分は消失しており西側斜面部に、その痕跡を残す程度である。

城跡は、最高所を主郭（Iノ郭）とし、これの東側、北東部、北側、西側、南側、南東部に郭等を同心円的に配置している。主郭東側は、主郭より2～3m下位となり北東部（IIノ郭）より主郭東側中央部付近まで平坦な部分（VIノ郭）と、ここ2m程度下位に2段の平場（VII、VIIIノ郭）が配置されている。北東部（IIノ郭）は、主郭より北東方向に細長く伸びた台地上で主郭より1.50m程度下位になる。北側は、2段の平場（I、IVノ郭）がある。IIノ郭は、主郭より2.00m程度の下位でIIノ郭西側より始まり、主郭の西、南側に続き主郭南東部（VIIノ郭上面）で終了している。VIIノ郭は、IIノ郭より4.00m程度の下位に位置し、IIノ郭西側より主郭北西部尾根東側まで設けられている。IIノ郭北西部で、台地の北西部尾根には細長い郭（Vノ郭）と、先端部に物見台の用途の高台がある。IIノ郭は、南東部に突出している部分で、IIノ郭より西側で1m、東側先端部で2m程度下がっている。IIノ郭南側には、一段の狭い平場（Xノ郭）がIIノ郭に沿って配置されており、IIノ郭より3m程度下位に配置している。IIノ郭の南西部には、一段の平場（Xノ郭）がIIノ郭より1m程度上面に配置されている。西側斜面部では、IIノ郭西側下位面に2～3段の平場が現存しているものの、当城跡と関連は無いようである。

これら諸郭は、主郭とIIノ郭に土壘と堀を認めることが出来るものの、他郭には土壘と堀の痕跡は認められなかった。主郭は、土塁で防護されているものの、北西部、西側、南側、中央部に現存するのみで北側と東側には現存していない。土塁は、南側と北西部がしっかりした土塁であるものの西側は、その痕跡を残す程度である。土塁の規模は、北西部で基底部幅2.90m、高さ0.70m程度を計測する。西側では、基底部幅2.50m、高さ0.05～0.10m程度である。南側では、基底部幅2.50m、中央部高さ1.0m程度で、長さは21.50mを計測する。また、主郭中央部には基底部幅4.0m、高さ0.60m、長さ8.0m程度の土塁が、内部を区切るように築かれている。主郭の内部は、ほぼ平坦面となっているが中央土塁南側は、東側にかけての緩斜面となっている。西側には、虎口と推定される部分がある。

IIノ郭は、北側で幅2.0m～7.0mを計測し西側へ回るかけて狭くなっている。IIノ郭西側から、北西部までは、土壘と堀の痕跡は認められない。土壘と堀は、北西部、西側、南側にかけて認められる。北西部では、堀幅が1m程度で土壘は、基底部幅2.50m～4.00m、高さ0.20～0.40m程度である。西側では、堀幅が1m程度で土壘は、基底部幅2.0～6.0mで中央部が5.50m程度と最も広くなっているが高さは0.20～0.50m程度である。南側は、堀幅が3.00m程度で土壘は、基底部幅2.0m程度で高さは、0.10～0.20m程度である。

当城跡の規模は、全長（南北で、Ⅳノ郭からⅧノ郭まで）110m、幅（Ⅶノ郭からⅡノ郭西側中央部まで）60mで、面積としては $6,600\text{ m}^2$ 程度を計測する。主郭部は、長さ65.0m、南側での幅33.0m、北側では47.0mを計測する。Ⅱノ郭は、北側が全長60.0m、幅は2.50m～7.00mを計測し、西側では全長59.0m、幅4.00～8.50m程度を計測する。南側では、全長35.0m、幅6.00～9.00m程度を計測し、南西部では全長27.0m、幅4.00～6.00m程度を計測する。Ⅲノ郭は、長さ26.0m、幅5.50m程度を計測する。Ⅳノ郭は、全長49.0m、幅6.00～7.00m程度を計測する。また、西側端部には浅い壠状の部分が認められるが、堀であるかは確定出来ない。幅4.00m、深さ0.20m程度を計測する。Vノ郭は、全長約20.0m、幅5.00～9.00m程度で、先端の高台は $5.00\text{ m} \times 3.50\text{ m} \times 1.00\text{ m}$ 程度を計測する。VIノ郭は、長さ45.0m、幅10.0m以上で東側は調査区域外のため不明である。VIIノ郭は、長さ9.00m幅6.50m程度を計測する。VIIIノ郭は、長さ14.0m以上、幅8.00m以上となるが、東側は調査区域外のため不明である。IXノ郭は、長さ22.0m以上、幅3.00～11.0m程度を計測する。Xノ郭は、全長21.0m、幅2.00m程度を計測する。XIノ郭は、長さ20.0m、幅10.0m程度を計測する。

なお、主郭北西部斜面下には、井戸と推定される部分が確認されている。規模は、 $9.00 \times 4.50\text{ m}$ で深さは1.50m程度を計測する。

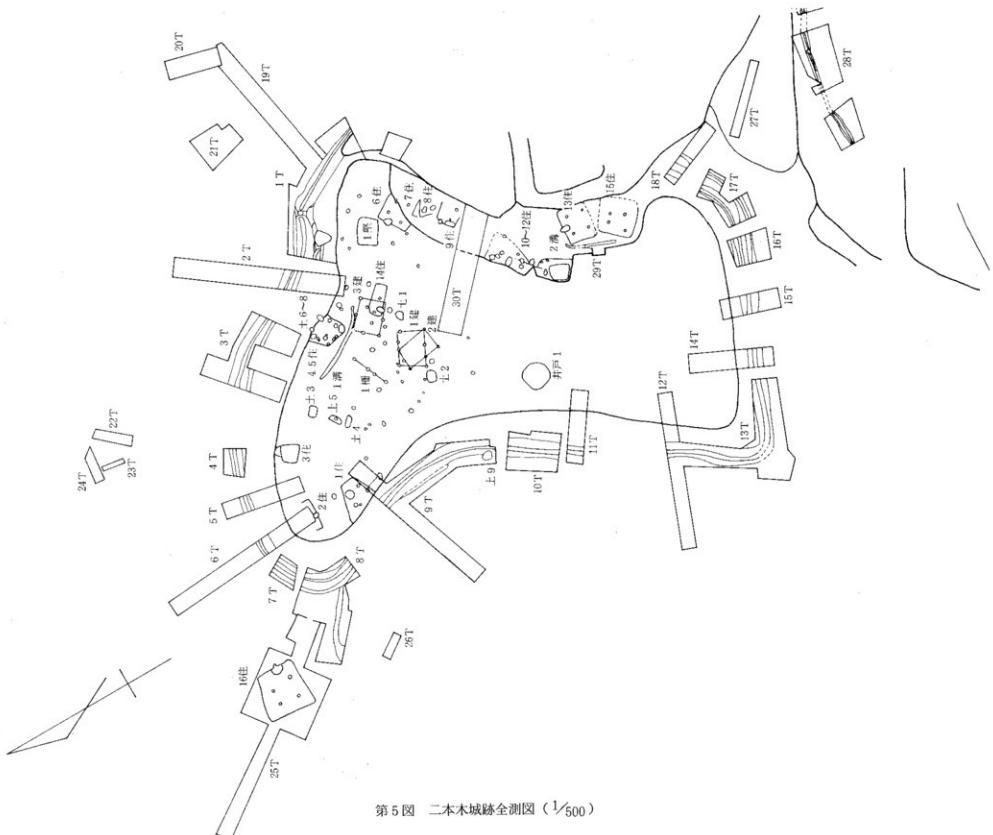
以上が、当二本木城跡の現状である。主郭の東側は、調査区域外であり立人調査も出来なかったため子略は不明である。規模に対して、多数の郭が配置されることとなるが、戰後の開墾もあり調査結果と合せ、検討せねばならない。

2. 調査結果の概要（第5図、第1・2表、図版2・3）

当二本木城跡の構造については、前項で述べた通りである。これを調査した結果、当城跡に結び付く遺構と、中世以前の遺構（奈良、平安時代の住居址）、中世以降近世の遺構、などの諸遺構が確認されている。以下に、各郭の状況を述べる。

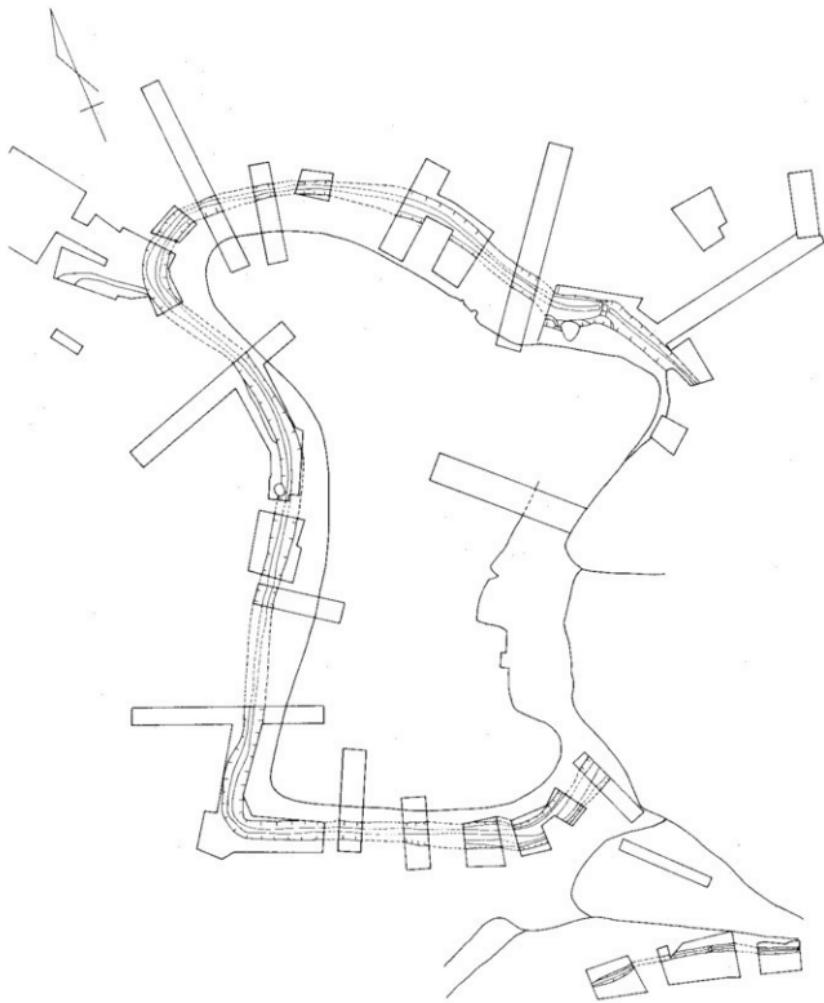
当城跡に結び付く遺構としては、土塁、堀、掘立柱建物址、土壙、溝、井戸、pit郡が確認されている。これらの諸遺構は、主郭（Iノ郭）とⅩノ郭に集中している。主郭（Iノ郭）では、土塁で防護、区画されているが、土塁としては北西部と南側で確認されているものの、西側中央部では土塁の痕跡を認めることは出来なかった。東側でも、西側中央部と同様の状況である。よって、土塁としては北西部、中央部、南側に現存していることとなる。主郭（Iノ郭）内部は、中央の上塁を境として区画されている。掘立柱建物址、溝、pit郡は、上塁の北側に集中しており、土塁の南側には少数の遺構が確認されたのみであることから、中央部土塁を境として北側と南側は使用目的を異にしていたことが判明する。掘立柱建物址は、北側中央部で2棟（建物址1、2）とこれの北東部に1棟（建物3）及び、北側北西部に1棟（柵列1）の合計4棟が確認されている。この4棟中で、東西向きの建物址1が主殿（本来の主殿とは異なる）の用途の建物址と判断される。溝は、北側端部に掘り込まれている。pit郡は、北側のほぼ全域に掘り込まれている。土塁の南側では、中央西側に井戸と東側で倉庫があり、他は少数のpitが掘り込まれている。また、北側北東部で主郭（Iノ郭）とⅩノ郭間に掘り残しによる土橋が所在することから、虎口と判断される。土塁南側で、西側にあった虎口状の部分は近世以降の道路のようである。また、北東部で堅穴遺構も1基確認されている。

Ⅹノ郭は、主郭（Iノ郭）の地形に沿って、堀と土塁が確認されている。堀は、Ⅹノ郭東側（主郭



第5図 二本木城跡全測図 ($1/500$)





第6図 IIノ郭掘実測図 (1/500)

第1表 遺構一覧表1(中世)

名 称	方 位	規 模 (m)		形 状	柱 穴 数	備 考
		桁 行	深 行			
第1号掘立柱建物址	N-57°-W	(北) 4.20 (南) 4.50	(東) 3.06 (西) 3.42	長方形	3×2=6	桁行は、南面がやや広く、深行は西面が広い。建物2と重複。
第2号掘立柱建物址	N-4°-W	4.05	2.70	長方形	3×2-1=5	桁行の東面中央に、柱穴がない。建物1と重複。
第3号掘立柱建物址	N-47°-W	4.08	3.45	長方形	3×2-1=5	桁行南面東側に柱穴がない。第1号住と重複。
第1号柵列	N-65°-W	(全長) 5.25	(尺) 17.5		4	北西部で、4本の柱穴による柵列である。
井 戸	N-62°-W	東西径 4.50	南北径 4.29	円 形		深さ 2.01 m で、中央に 1.97 × 0.60 × 0.14 m の溝を有する。
溝	北東～北西	全長 10.28	幅 (広 0.37 狭 0.20) 深 0.06～ 0.09 (m)			東西端が狭く、中央部が広い。深さはほぼ一定。
第1号地下式倉庫	N-38°-W	東西 2.07	南北 2.07	正方形		深さ 1.01 m で、第2号地下式倉庫を掘り切っている。
第2号地下式倉庫	N-40°-W	東西 4.00	南北 2.65	長方形		第1号地下式倉庫に切られ、北側中央部に溝を有し、0.61 m の深さである。
第1号堅穴	N-55°-W	東西 3.40	南北 2.46	長方形		深さ 0.11 m 、東西向き、粘土層を床面としている。
第9号土壤	N-23°-W	東西 1.25	南北 1.34	隅丸 方形		深さ 0.74 m で堀を掘り切り、南側が一段高くなっている。

北東部) より南東部(主郭南東部)まで掘り込まれている。堀の形状は、Ⅱノ郭北側から南側までがほぼ同様の形状をなしているが、南東部では堀底が広くなり浅くなっている。北側から南東部までは狭く平坦な堀底から壁中央部までは重直な壁となり、この部分から堀上面にかけては斜めに掘り込まれている。堀の土層は、表土から堀上面までと、上面から中央部までと、中央部から底面までとに分けられるが、土質からは堀底面から上面までと、上面から表土までとに分類される。これは、堀の埋没状況と時間的な差異を示していることである。Ⅱノ郭の土壘は、Ⅱノ郭北側(Ⅱノ郭西側)より築かれ始めてる。盛土の状況は、主郭部(Ⅰノ郭)土壘のような盛土ではなく、北側及び西側斜面に斜面構築時に盛土した状況であり、版築の状況は認められなかった。土壘及盛土の状況は、北側、西側では異なっている。南側では、土壘と斜面構築の状況は認められず、南東コーナー部まで斜面構築されている。また、西側中央部から土壤が1基確認されている。

Ⅲノ郭は、表土下が白色粘土層(自然層)であり遺構は確認されなかった。Ⅳノ郭は、Ⅱノ郭同様表土下が自然層の粘土層と砂層であり、遺構は確認されなかった。また、Ⅳノ郭北西部の溝状部分は自然地形が近世以降の開墾と判断される。Vノ郭は、表土下が自然層の砂層で遺構としては住居址が1基確認されたのみである。Vノ郭北西端の高台は、自然地形である。VIノ郭は、現表土より1 m 以

第2表 遺構一覧表2(住居址、土壤)

名 称	方 位	規 模 (m)			形 状	カマド	貯蔵穴 (m)	柱 穴	備 考
		東西	南北	深度					
第1号住居址	N-81°-E	3.00	3.00	0.08	長 方 形	東壁中央	0.42×0.38×0.56	2	土壙下で、新旧の住居址と推定
第2号住居址	E-87°-S	5.00	3.55	0.20	長 方 形	南壁中央		6	
第3号住居址	N-25°-E	2.47	2.46	0.44	不整 方 形	北壁中央		2	新旧のカマド有
第4号住居址	E-67°-E	2.90	3.47	0.14	長 方 形	北壁中央東		4	
第5号住居址	E-65°-E	2.88	3.27	0.14	長 方 形	北壁中央		3	
第6号住居址	N-30°-W	4.20	4.00	0.15	隅丸長方形	北壁中央東		5	
第7号住居址	N-40°-W	0.80	1.88	0.41					
第8号住居址	N-25°-W	1.60	2.45	0.13				5	方型か長方形を呈す
第9号住居址	N-28°-E	1.34	1.40	0.15	長 方 形	北壁中央	E)0.34×0.34×0.33 W)0.26×0.36×0.41	2	2個の貯蔵穴有す
第10号住居址	N-47°-W	3.25	2.43	0.18	長 方 形	北壁中央		5	
第11号住居址	N-39°-W	4.08	3.57	0.21	長 方 形	北壁中央		5	
第12号住居址	N-11°-W	5.40	4.50	0.20	長 方 形	(北壁中央)		5	北側垣溝の一部残
第13号住居址	N-0°-E	2.35	2.10	0.57	長 方 形	北壁中央		4	
第14号住居址	N-46°-E	3.94	0.84	0.10	長 方 形	南壁東側		2	
第15号住居址	N-34°-E	4.00	4.50	0.58	長 方 形	北壁中央部		4	カマドは燃焼部のみ
第16号住居址	N-90°-E	5.90	5.58	0.50	隅丸長方形	東壁中央南		4	東西壁では、壁長が異なる。砂礫中 北壁がやや広くなっている
第1号 土 壤	N-53°-W	0.82	1.08	0.29	隅丸長方形				
第2号 土 壹	N-55°-W	0.92	1.42	0.30	梢円形				
第3号 土 壹	N-44°-W	1.06	1.39	0.49	隅丸長方形				
第4号 土 壹	N-43°-W	0.88	1.22	0.11	隅丸長方形				
第5号 土 壹	N-50°-W	1.26	0.86	0.08	不整梢円形				西に 0.40×0.40× 0.18 m のpit有
第6号 土 壠	N-36°-W	0.68	0.66	0.91	梢円形				
第7号 土 壈	N-80°-W	0.98	0.77	0.32	梢円形				
第8号 土 壈	N-83°-E	0.47	0.55	0.19	梢円形				
第2号 溝	北東～南西	16.00	0.44	0.75					第13, 15住を囲むよう な位置を占る

上黒色土や黒褐色土が堆積しており、遺構と遺物は認められなかった。旧地主によると、開墾とのことである。この状況は、Ⅶ、Ⅷノ郭も同様である。Ⅸノ郭は、中央部より北側に向かって落ち込む部分を確認したが、城跡に関連する遺構であるかは断定出来ない。Xノ郭は、東側から西側(Ⅺノ郭)に向って浅い溝が確認されているが、Ⅺノ郭で遺構を確認することは出来なかった。

中世以前の遺構としては、奈良平安期の住居址等がある。住居址は、主郭の辺縁部に集中しており主郭内部には1基のみである。これは、主郭部の辺縁部にのみロームが所在するためであろう。また、東側では1m程度下がった所にも掘り込まれている。住居址の位置は、北側に2基(1基は重複)、北東部に4基、北西部に3基、東側に5基各々位置しており、東側全域では9基となる。またVノ郭東側で、1基確認されている。

住居址以外では、主郭（Ⅰノ郭）の北側に土壙が5基、東側に溝が1条等が確認されている。土壙は、全て1m程度の小土壙であり、溝は東側住居址の西側上面から東側下面に掘り込まれており、埋められている。

出土遺物としては、中心となるものとして中世城跡関連遺物と、住居址、土壙関連遺物とに大別される。中世品としては、数量も少なく完型品はごく少量であり、おろし皿、内耳土器、五輪塔、古錢カワラケが出土している。古錢は、土壙（第6号土壙）より出土している。住居址、土壙よりは、土師壺、高台付壺、甕、櫃、須恵器壺、高台付壺、甕、土玉などが住居址内より出土し、土壙内からは試焼き遺物、磁石、土師器などが出土している。また溝内からは、土師器壺、甕、円板などが出土しており、堀内からもこれらの遺物が出土している。

これらの出土遺物は、主として遺構に関連した遺物であり、遺構を供なわない遺物もある。遺構を供なわない遺物としては、ナイフ型石器、繩文式土器片、石器などが出土しており、堀の埋土中より貝層も出土している。貝層は、当城跡廃城後の流入（投捨）であり、当城跡の廃城期を検討する一資料となるものである。

以上が、調査結果の概要であり、次項より各遺構と遺物の記述に移行する。

V 遺構と遺物

1. 城跡の遺構と遺物

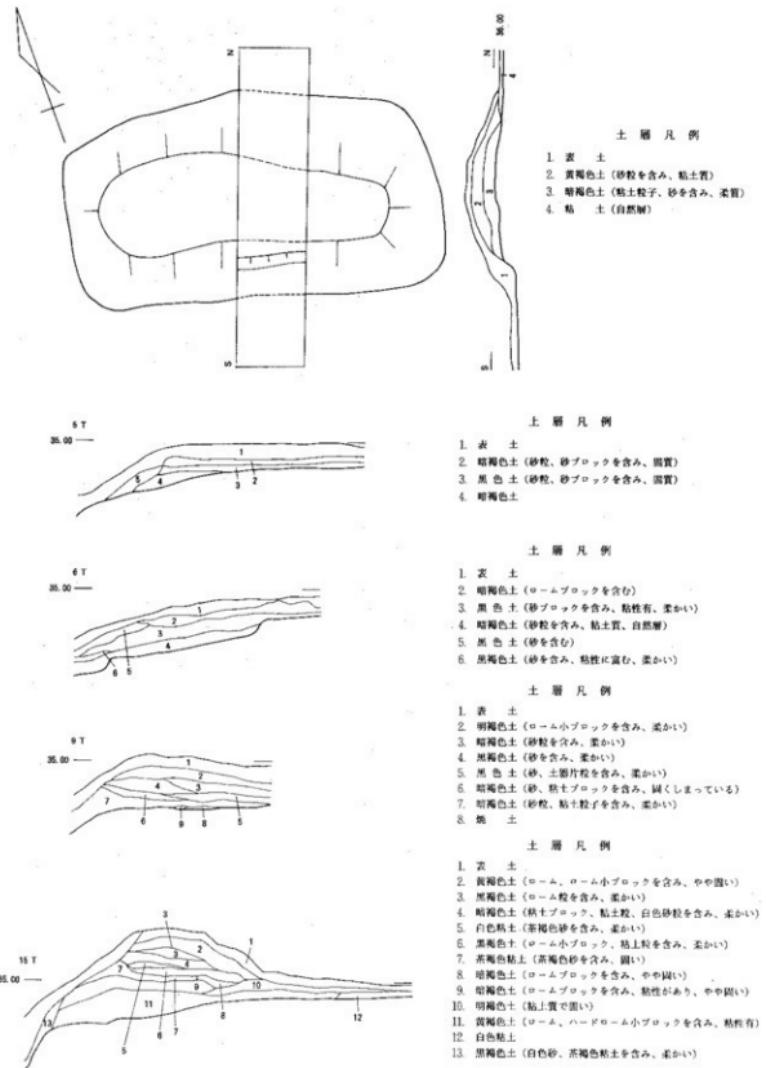
城跡関係の遺構と遺物では、前項で述べたように主郭部（Ⅰノ郭）とⅡノ郭で確認されている。主郭部（Ⅰノ郭）では、建立柱建物址、柵列、溝、井戸、pit、土壙、堅穴遺構、倉庫であり、Ⅱノ郭では堀、土壙、土壘、土橋（虎口）が確認されている。以下に、主郭部（Ⅰノ郭）の各遺構より記述していくが、Ⅱノ郭はT主体であるためT内遺構として記述する。なお、出土遺物はまとめて記述する。

1) 主郭（Ⅰノ郭）の遺構

土 壊 (第7図、図版1、3)

土壙としては、主郭部で東側を除く他の辺縁部と、主郭部の中央部に配置されている。辺縁部の土壙は、北西部、西側北部、南側の3部分で確認されたが、北側と西側中央部でその痕跡を認めること出来なかった。北西部の土壙は、基底部幅3.00m、高さ0.30mを計測するが、Ⅱノ郭方向へ流れている。西側北部の土壙は、基底部幅2.90m、上面幅2.00m、高さ0.70mを計測する。南側の土壙は、基底部幅3.10m、上面幅1.10m、高さ1.00mを計測する。中央部土壙は、基底部幅3.40m、上面幅0.70m、高さ0.58mを計測する。この結果から、中央部土壙以外は基底部幅が3.00m（10.0尺）、上面幅2.00m（6.0尺）、高さ1.00m（3.0尺）程度の規模で築かれていたものと判断される。

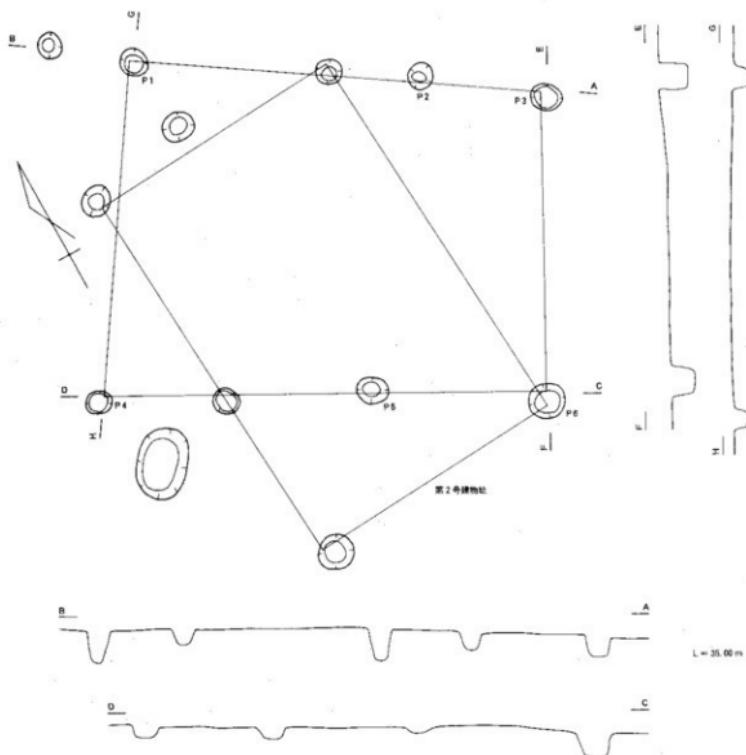
土壙の盛土状況は、北西部では黒色土上に暗褐色土を盛土しているが、Ⅱノ郭の方へ流れている。



第7図 主郭部(Iノ郭)土壌土層図 (中央土壌 $1/100$ ・土壌 $1/80$)

西側北部の土壘は、暗褐色土上に明褐色土、暗褐色土、黒褐色土、黒色土、暗褐色土を、下位より交互に盛土した後に明褐色土を用いて土壘表面としている。南側の土壘は、自然層である明褐色土を削平してから暗褐色土、茶褐色粘土、黒褐色土、白色粘土、暗褐色土、黒褐色土、黄褐色土を下位より順次盛土している。中央部の土壘は、暗褐色土と黄褐色土を盛土している。これらの盛土状況は、各土層が砂や粘土粒等を含んでいるものの系質であり、版築や踏固めといった状況は見られないが、下方より順次盛土しながら土壘前（Ⅱノ郭側）が高くなるように盛土しており、南側土壘では前（Ⅱノ郭側）が直線的な盛土線を示している。これは、パネルを用いた結果と判断される。中央部の土壘は盛土した程度の土壘である。

第1号掘立柱建物址（第8図、第3表、図版7）



第8図 主郭部（Ⅰノ郭）第1号掘立柱建物址実測図（1/50）

本建物址は、北側中央部に位置し第2号掘立柱建物址と重複し、桁行が2間で梁行は1間の建物址である。大きさは、各面ともその計測値に差異を有している。桁行は、北面が4.20m(14.0尺)で南面は4.50m(15.0尺)を計測し、梁行は東面が3.06m(10.2尺)で西面が3.42m(11.4尺)を各々計測する。建物址の方位は、N-57°-Wで長方形状をなしている。各面の計測値の差は、桁行南面東側の柱穴(P4)が、東方に突出しているためである。建物としては、3間×1間で長方形の建物址である。また、このP4は第2号建物址の柱穴にも使用されている。柱穴は、円形状をなす柱穴であり、P4以外はその大きさがほぼ同程度の大きさである。柱穴の深さは、P3が0.21mの計測するのみで、他の柱穴は0.10m前後の深さを有するものの、遺跡覆土である明褐色土(粘土質で、厚さ約10cm程度)の厚さを加えると、柱穴の深さは0.20～0.30m程度となる。柱穴は、粘土層内に掘り込まれており、遺跡覆土と同様に粘土質の明褐色土が柱穴内に堆積している。なお、個々の柱穴径は第3表に示した。

出土遺物としては、各柱穴内及び建物址付近から何ら出土しなかった。

第3表 第1号建物址柱穴一覧表

PNO	規 模 (m)			形 状	備 考
	長径	短径	深度		
P 1	0.30	0.28	0.14	不整形状	
P 2	0.30	0.24	0.15	楕円形	
P 3	0.32	0.27	0.19	楕円形	

PNO	規 模 (m)			形 状	備 考
	長径	短径	深度		
P 4	0.37	0.34	0.22	円形	第2号建物址と共有
P 5	0.32	0.26	0.06	楕円形	
P 6	0.26	0.22	0.12	円形	

第2号掘立柱建物址 (第9図、第4表、図版7)

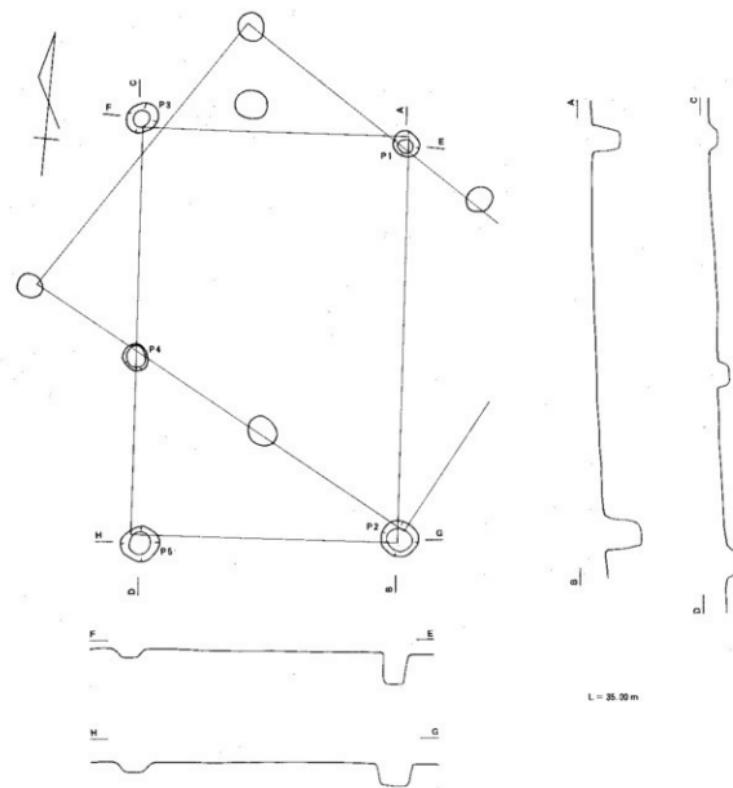
本建物址は、北側中央部で第1号建物址と重複した状況で確認され、桁行2間梁行1間で長方形をなす建物址であり、南北方向を向いている。大きさは、桁行が2間で4.05m(13.5尺)あり、梁行は1間で2.70m(9.0尺)を各々計測する。桁行は、2間となるが東面は1間となっておりP4に対応する柱穴は、認められなかった。柱穴は、南側のP2、3がやや大きい以外小さな柱穴である。深さはP1が0.31mでP2が0.21mを計測するものの、残り3柱穴は0.10m前後と浅い柱穴となっている。また、遺跡覆土の厚さを加えると柱穴の深さは0.20～0.40m程度となる。柱穴内の土層は、遺跡覆土と同様明褐色土(粘土質)が堆積している。個々の柱穴径は、第4表に示した。なお、本建物址の方位としては、N-4°-Wである。

出土遺物としては、第1号建物址同様皆無である。

第4表 第2号建物址柱穴一覧表

PNO	規 模 (m)			形 状	備 考
	長径	短径	深度		
P 1	0.26	0.26	0.29	円形	
P 2	0.37	0.34	0.22	円形	
P 3	0.35	0.35	0.09	円形	

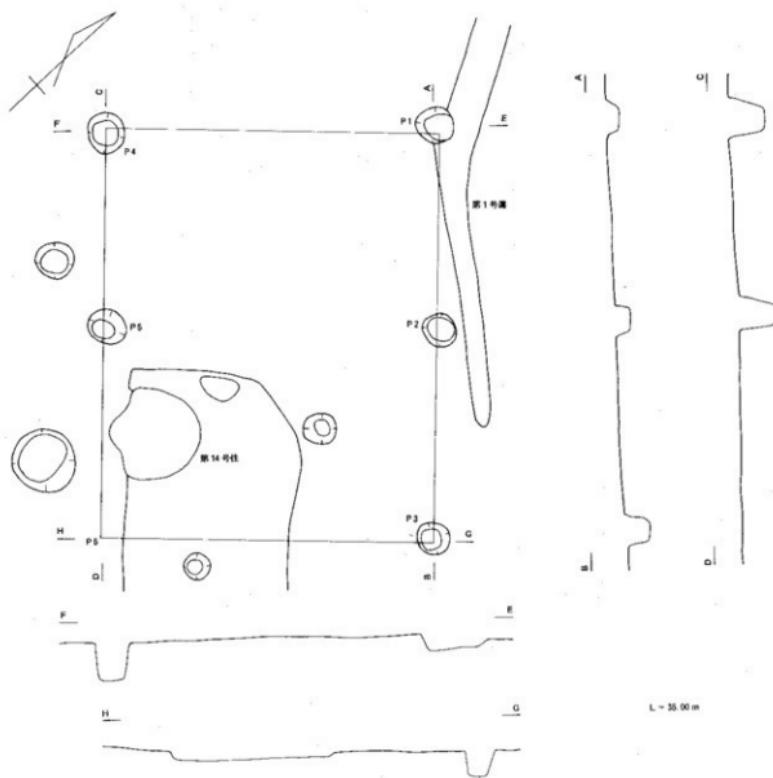
PNO	規 模 (m)			形 状	備 考
	長径	短径	深度		
P 4	0.28	0.26	0.10	円形	第1号建物址と共有
P 5	0.33	0.29	0.08	円形	



第9図 主郭部（Iノ郭）第2号掘立柱建物址実測図（1/50）

第3号掘立柱建物址（第10図、第5表、図版7）

本建物址は、北側中央部で第1号掘立柱建物址の北東部で確認され、桁行2間梁行1間で長方形をなしている。方位としては、N - 47° - Wである。大きさは、桁行が2間で4.08 m (13.6尺)、梁行は1間で3.45 m (11.5尺)を各々計測する。桁行のP2とP5は、桁行北面と南面の中央部に位置している。位置としては、桁行の2.04 m (6.8尺)の所に位置している。P6は、確認出来なかつたが柱穴配置から見ると、第1号掘立柱建物址よりしっかりした建物址と判断される。柱穴は、全てほぼ同程度の大きさを有しているが、P1のみが第1号溝と重複している。柱穴の深さは、P1が0.15 mと深い柱穴である以外は全て0.25 ~ 0.40 mまでと、第1、2号建物址の柱穴より深くなっている。特に南面のP4、P5は北面より0.10 m以上深く掘り込まれている。これに、遺跡覆土の厚さを加える

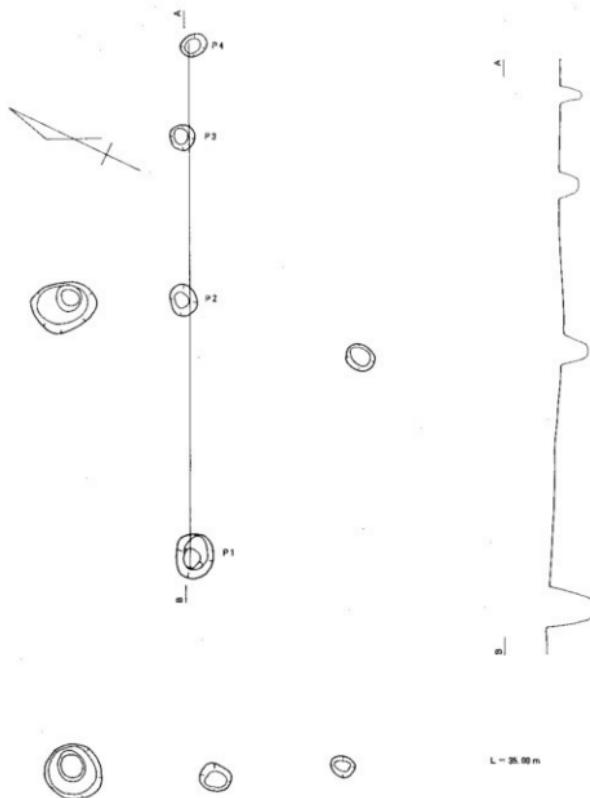


第10図 主郭部（Iノ郭）第3号掘立柱建物址実測図（1/50）

と柱穴の深さは、0.20～0.50m程度の深い柱穴となる。柱穴内の土層は、遺跡覆土と同様に粘土質の明褐色土が堆積している。個々の柱穴径は、第5表に示した。

第5表 第3号建物址柱穴一覧表

PNO	規 模 (m)			形 状	備 考
	長径	短径	深度		
P 1	0.40	0.35	0.15	楕円形	
P 2	0.34	0.34	0.24	不整円形	
P 3	0.36	0.33	0.27	不整円形	
P 4	0.42	0.35	0.43	楕円形	
P 5	0.41	0.35	0.37	楕円形	
P 6					不明

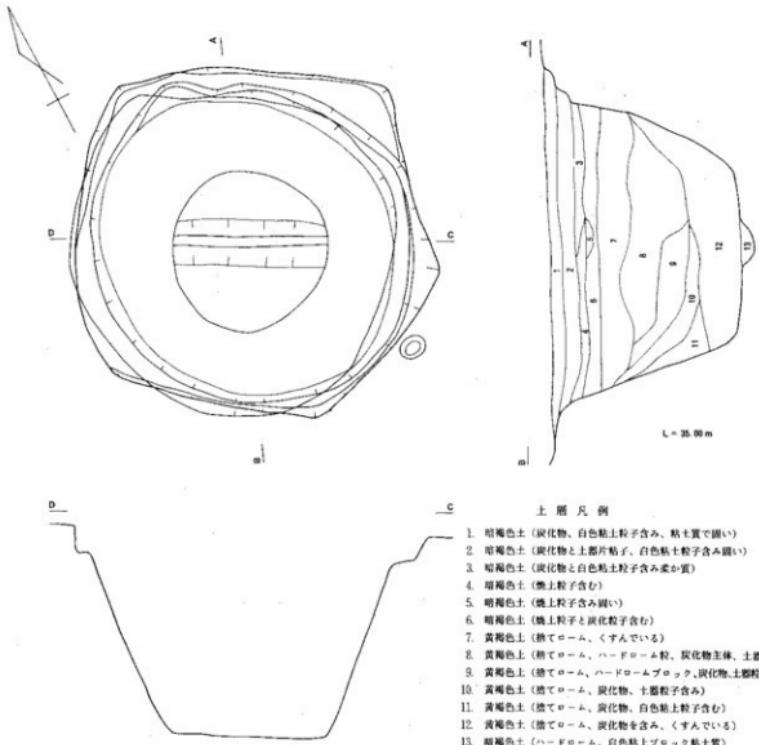


第11図 主郭部（Iノ郭）第1号柵列実測図（ $1/50$ ）

出土遺物としては、ごく少量であるがP1、P2、P3より土師器壊小片と甕小片が、各柱穴内より2～3点出土しているが、中世品の出土は皆無である。

第1号柵列（第11図、第6表、図版7）

本柵列は、北西部で第1、2号建物址の北西部で第3号建物址の西側に位置している。全長5.25mの17.5尺で、4本の柱穴（P1～4）から出来ている。本址が、柵列であるか板塀であるかは断定出来ないため、柵列として記述する。柱穴配置は、P1とP2間が最も広く2.61m（8.7尺）を計測し、東側にかけて次第に狭くなっている。P2とP3間は、1.71mで5.7尺あり、P3とP4は0.93mで9.1尺を、各々計測する。柱穴は、P1が橢円形で大きい柱穴となっているが、P2～P4までは小型の



第12図 主郭部（Iノ郭）井戸実測図（1/50）

柱穴である。深さは、0.20～0.30 m程度の深さであるが、遺跡覆土の厚さを加味すると各柱穴の深さは、0.30 m～0.40 m程度の深さとなる。柱穴内には、遺跡覆土と同じ粘土質の明褐色土が堆積している。なお、本柵列の周囲にも柱穴が掘り込まれているものの、本址とは結び付かないようである。

出土遺物としては、何ら出土しなかった。

第6表 第1号柵列柱穴一覧表

PNO	規 模 (m)			形 状	備 考	PNO	規 模 (m)			形 状	備 考
	長径	短径	深度				長径	短径	深度		
P 1	0.46	0.38	0.27	椭 圆 形		P 3	0.27	0.26	0.18	圆 形	
P 2	0.33	0.27	0.27	椭 圆 形		P 4	0.28	0.22	0.26	椭 圆 形	

井戸（第12、37図、第10表、図版7）

本井戸は、中央土壘南側の西側に位置している。大きさは、東西径4.50m（15.0尺）、南北径4.29m（14.3尺）、深さ2.01m（6.7尺）を計測し、不整円形状を呈しているが、円形を意識したようである。方位としては、N-62°-Wである。井戸の底面は、中央の溝に向い緩やかに下降する平坦面となっており、壁は斜めになっている。全体では、擂鉢状の井戸である。底面中央部の溝は、全長1.97m、幅0.60m、深さ0.14m（井戸底面より）を計測する。この溝は、雨水や自然湧水のための浄化設備的な溝と判断される。井戸内の土層は、上面に明褐色土が堆積しているがこれ以下は黄褐色土（ローム=ブロック）、粘土などが堆積している。これらの土層は、自然堆積ではなく人為的に埋められた状況を示している。

出土遺物としては、土師器壺と甕、須恵器短頸甕、砥石などが出土している。これらの多くは、第2～3層中からの出土で、東側から西側にかけて流入した状況を示している。

溝（第13図、図版7）

溝としては、北側中央部に一条確認されている。溝中央部より東側は、北東方向にやや折れながら次第に狭くなっている。第3号建物址の中央東側付近で終止している。西側は、やや南西に折れてから西北方向に延びている。溝の全長は、10.28mを計測し幅は中央部で0.37m、東側で0.20m、西側で0.28mと、東端と西端にかけて狭くなっている。深さは、0.06m～0.09mを計測するためほぼ一定と判断される。溝の底面は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。溝内には、遺跡の覆土と同様粘土質の明褐色土が堆積している。したがって、深さとしては0.20m程度であったと判断される。

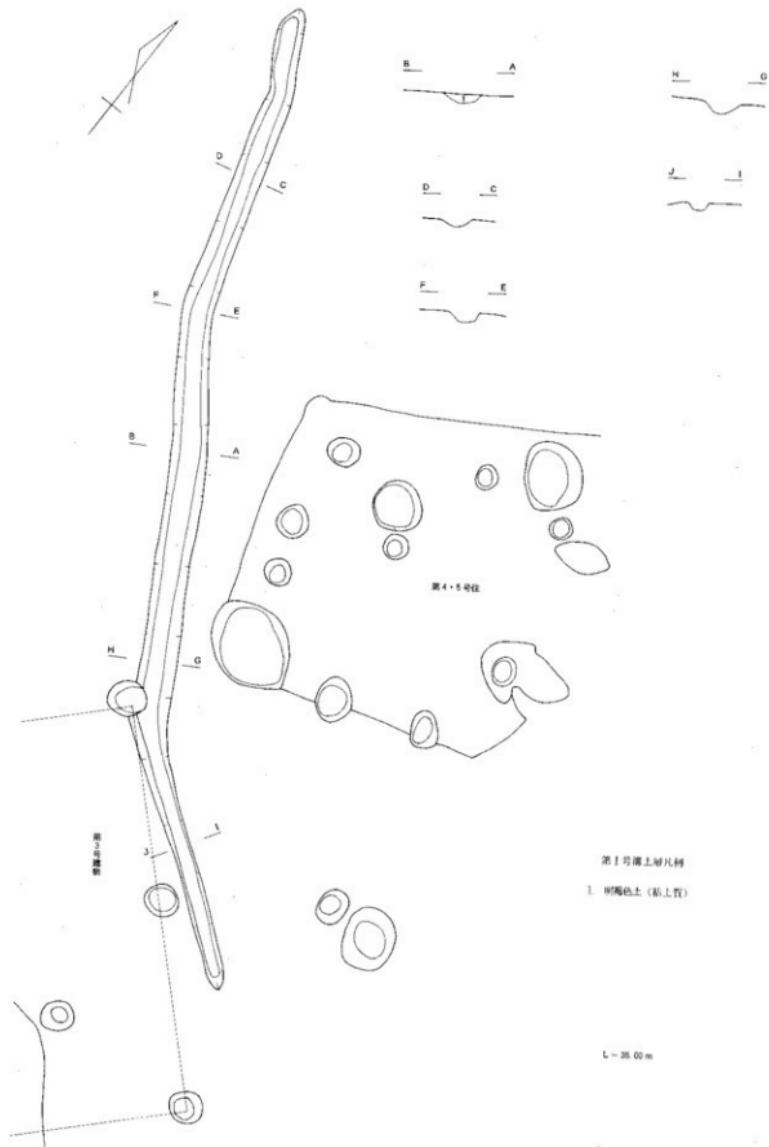
出土遺物としては、土師器壺小片と土師器甕小片が合計5点出土したのみで、中世品や実測可能な遺物は出土しなかった。また、東側で第3号建物址P1と重複し、前後関係は確認出来なかった。なお、本溝は主郭（Iノ郭）北側に位置しているのみで、斜面までは掘り込まれていない。

第1号地下式倉庫（第14図、図版7）

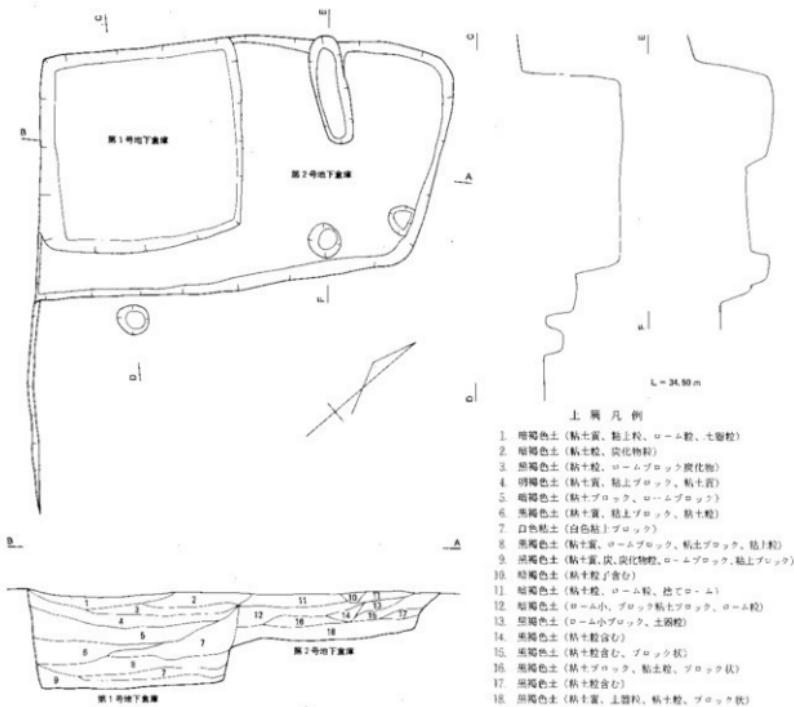
本倉庫は、中央土壘南側の中央東側（主郭南東部）に位置し、第2号地下式倉庫を掘り切っている。大きさは、東西径2.07m、南北径2.07m、深さは1.01m（中央部）を計測し、正方形をなしている。底面は、西壁と南壁部分が中央部よりやや低くなっているが、ほぼ平坦面をなしている。壁は、各壁とも垂直に掘り込まれている。また底面は、倉庫上面と異なり7°北側を向いている。

土層は、暗褐色土、黒褐色土、明褐色土、白色粘土の各土層が堆積しており、細分すると暗褐色土が3層に、黒褐色土が4層に各々細分される。これらの各土層は、粘土ブロック、粘土粒子、ローム粒子、炭化物等を含むため粘性に富んでおり、人為的に埋められた状況を呈している。また、底面上の黒褐色土には、多量の炭と炭化物粒子を含んでいるものの、焼土や焼土粒子を含んでおらず底面や壁も焼けていない。なお、本倉庫の方位はN-38°-Eである。

出土遺物としては、土師器壺・甕片が13点とカワラケ部片が3点の合計16点出土したのみで、実測可能な遺物は出土しなかった。



第13図 主郭部（Iノ郭）第1号溝実測図（1/50）



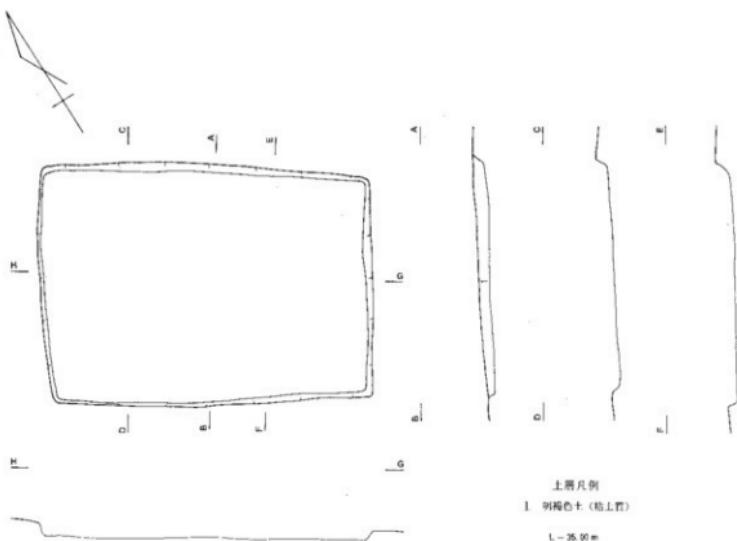
第14図 主郭部（Iノ郭）第1・2号地下式倉庫実測図（1/50）

なお、本倉庫の南側に柱穴が1本掘り込まれているが、この柱穴は第13号住居址に伴う柱穴である。本倉庫の周囲には、本倉庫に関連する柱穴等は確認出来なかった。

第2号地下式倉庫（第14図、図版7）

本倉庫は、第1号地下式倉庫に掘り切られており、北壁は一部崩落している。大きさは、東西径が4.00 m、南北径は2.65 mで、深さ0.61 mを計測し長方形形状を呈している。方位としては、N=40°-Eで、第1号地下式倉庫より2度東を向いている。底面は、平坦面であるが北壁部分より南壁部分が0.10 m程度下がっている。これは、第1号地下式倉庫と同様である。壁は、北壁が崩落したため東側と西側で段差を有するようになっているものの、全体的には垂直に掘り込まれている。

底面北側中央部付近には、長さ1.14 m、幅0.25 m、深さ0.35 m程度の溝が1条掘り込まれている。溝の底面は、鍋底状であり壁は斜めに掘り込まれている。また、深さでは北側から南側にかけて次第



第15図 主郭部（Iの郭）第1号堅穴実測図（1/50）

に浅くなり、南壁部分では 0.04 m となっている。底面に、2 本の柱穴が掘り込まれているものの、本址の柱穴ではなく、住居址（第11、12号住居址）の柱穴である。

土層は、暗褐色土と黒褐色土が粘土粒子、粘土ブロック、捨てローム、ローム＝ブロック等を含みながら堆積しており、細分すると暗褐色土が 3 層に黒褐色土が 6 層に、各々細分される。これらの土層は、自然堆積ではなく人為的に埋められた状況を呈している。また溝内には、粘土ブロックと粘土粒子を含む黒色土が堆積している。

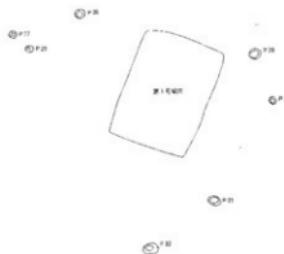
出土遺物としては、第1号地下式倉庫と同様土師器壊片、甕が 12 点出土したのみで、中世品の出土は皆無であり、図示可能な遺物は出土しなかった。

本倉庫の周囲には、住居址の柱穴以外本址に結び付くような柱穴等は、何ら確認出来なかった。

第1号堅穴（第15図、図版7）

本遺構は、北東部に位置し炉址、カマド、柱穴等を併なっていないため、住居址とするには問題がある。したがって、堅穴遺構として報告する。大きさは、東西径 3.40 m、南北径 2.46 m、深さ 0.11 m を計測し長方形をなしている。方位は、N - 55° - W で東西方向に長軸を有している。底面は、軟弱な直床で粘土面である。壁は、垂直に掘り込まれており、壁溝、炉址、カマド、柱穴は、確認出来なかった。また、床面には焼土や焼けた部分も認められない。

土層は、粘土質の明褐色土が堆積しているのみで、7 点の土師器小破片が遺物として出土した程度



第16図 ピット郡実測図 (1/150)

で、中世品は皆無である。

また、本址の北東部と北西部に各2本で計4本の柱穴が掘り込まれているが、本址に結び付くかは確定出来ない。

出土遺物としては、土師器坏片と甕片が合計7点出土しているものの、全て小破片で実測可能な遺物は、出土しなかった。

pit 郡 (第16図、第7表、図版2・3)

pit 郡としては、中央土壘北側のはば全域で確認されているが、遺構となったのは第1～3号掘立柱建物址、第1号柵列のみである。他のpitは、遺構としての平面プランは確認出来なかった。また北東部で、第1号堅穴の北東部と北西部に位置するpit（合計4本）は、木戸等の可能性も考えられるが、具体的な確証を欠いている。

これらのpitは、円形又は橢円形をなすものがほとんどであり、大きさ等は各pitにより一様ではないが、浅いpitは粘土質の明褐色土が堆積しており、深いpitには粘土質の明褐色土以外に粘土質の黒色

第7表 柱 穴 一 覧 表

PNO	法 量 (m)			方 位	形 状	備 考
	長径	短径	深 度			
1	0.26	0.24	0.11	南北	円 形	
2	0.34	0.30	0.38	南北	橢 圓 形	
3-A	0.34	0.32	0.16	南北	橢 圓 形	
3-B	0.42	0.42	0.13	南北	円 形	
4	0.58	0.56	0.52	東西	円 形	小ピット $\times 0.27 \times 0.25$
5	0.34	0.30	0.30	南北	橢 圓 形	
6	0.26	0.20	0.08	南北	橢 圓 形	
7	0.48	0.44	0.41	東西	円 形	
8	0.36	0.30	0.28	東西	橢 圓 形	
9	0.48	0.38	0.34	東西	橢 圓 形	
10	0.28	0.24	0.32	南北	橢 圓 形	
11	0.68	0.50	0.33	南北	橢 圓 形	小ピット $\times 0.26 \times 0.11$
12	0.32	0.30	0.20	東西	橢 圓 形	
13	0.26	0.24	0.31	南北	不整円形	
14	0.72	0.52	0.11	東西	橢 圓 形	
15	0.24	0.24	0.28	東西	円 形	
16	0.54	0.50	0.37	東西	橢 圓 形	
17	0.45	0.32	0.40	南北	橢 圓 形	

PNO	法 量 (m)			方 位	形 状	備 考
	長径	短径	深 度			
18	0.34	0.28	0.21	東西	橢 圓 形	
19	0.34	0.30	0.27	東西	隅丸方形	
20	0.65	0.65	0.37	南北	不整円形	
21	0.49	0.30	0.38	南北	橢 圓 形	土師片2点出土
22	0.62	0.52	0.42	南北	橢 圓 形	
23	0.46	0.40	0.44	東西	隅丸方形	土師甕出土
24	0.64	0.50	0.28	南北	橢 圓 形	
25	0.30	0.26	0.42	東西	橢 圓 形	
26	0.32	0.30	0.41	南北	橢 圓 形	
27	0.22	0.22	0.80	南北	円 形	
28	0.24	0.22	0.82	南北	橢 圓 形	
29	0.36	0.32	0.09	南北	不整円形	
30	0.22	0.18	0.06	東西	橢 圓 形	土師甕片1点出土
31	0.40	0.28	0.06	南北	橢 圓 形	土師片7点出土
32	0.44	0.30	0.66	南北	橢 圓 形	
33	0.36	0.32	0.41	南北	不整円形	
34	0.40	0.38	0.29	南北	不整円形	
35	0.34	0.30	0.25	東西	不整円形	
36	0.34	0.30	0.43	東西	橢 圓 形	

土が堆積している。各pitの計測値は、第7表に示した。

出土遺物としては、北東部のP23(第6号住居址西側)より土師器壺が出土している以外に、土師器壺、壺の小破片が、P30、31より出土した程度である。P23は、第6号住居址外に位置し土師器壺が出土しているものの、同住居址に関連するか確定出来ない。

2) IIノ郭の調査結果

IIノ郭での遺構としては、主郭(1ノ郭)の地形に沿うように掘り込まれた堀と、堀内で掘り残しによる土橋(主郭とIIノ郭間堀内)、IIノ郭西側で堀埋没後に掘り込まれた土壤(第9号土壤)、堀外側に盛られた土塁、IIノ郭で溝等が中世遺構として確認された。IIノ郭は、T調査中心であるため各Tの調査結果を記述してから、堀、土塁、虎口、土壤等の順で記述する。

1 Tの調査結果 (第17図、図版8)

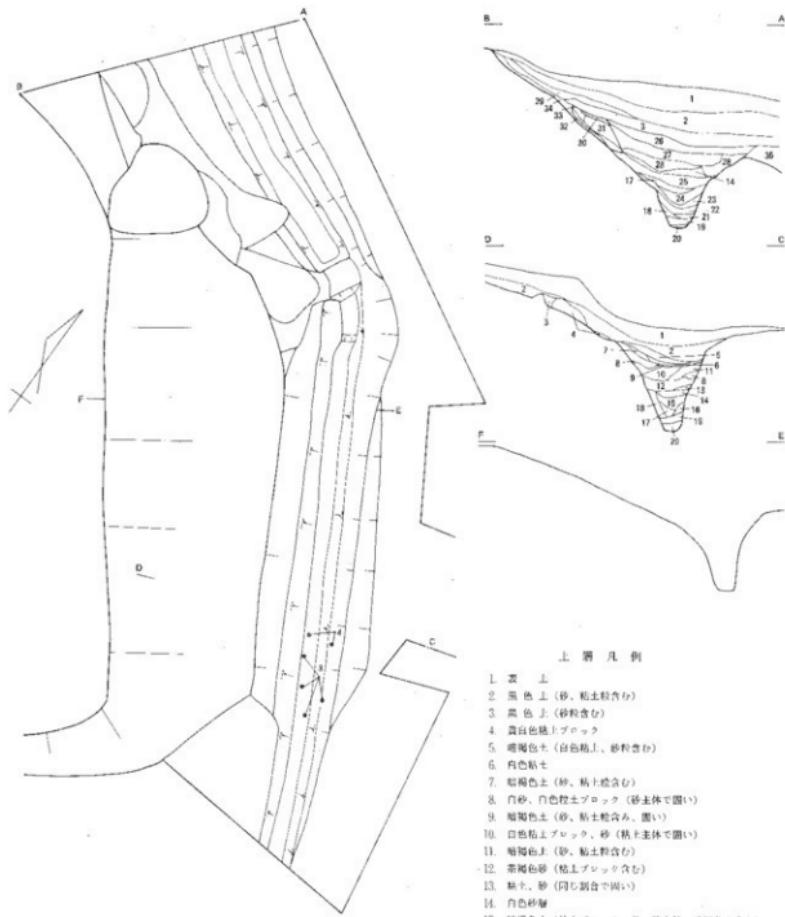
1Tは、調査区の北東部で主郭部(1ノ郭)とIIノ郭間に設定したTで、全長(東西)16.0mである。調査結果は、主郭部(1ノ郭)の地形に沿うように掘り込まれた堀と、堀を掘り残して設けた土橋が確認されている。堀は、東側上面幅3.90m(13.0尺)底面幅0.36m(1.2尺)、深さ0.75m(2.5尺)を計測するが、東側は開墾による破壊を受けているため、本来の上面幅と深さは中央部と同程度と推定される。中央部では、上面幅6.30m(21尺)、底面幅0.33m(1.1尺)、深さ1.86m(6.2尺)を計測する。西側では、上面幅6.00m(20尺)、底面幅0.36m(1.2尺)、深さ1.71m(5.7尺)を、各々計測する。土橋の東側では、土橋から1.05m(3.5尺)東側まで一段低くなっている。この部分の深さは、東側掘底より0.30m(1.0尺)程度低くなっている。この低くなった状況で、西側へと続いている。堀の底面は、平坦で壁は底面より0.80mまで86°の急勾配で、ここから上面までは62°の勾配で外壁を掘り込み、内壁は底面より0.70mの所まで72°、ここから上面まで42°の勾配を有している。

堀内の土層は、底面に暗褐色上(第20層)が堆積し、この上面に粘土粒子、砂、砂ブロック等を含む柔質な上層が堆積している。厚さは、底面より0.50mの部分までである。この上面には、粘土粒子砂、粘土ブロックを含み固くしまっている土層が0.70mの厚さで堆積している。また、現表より0.60mから1.50m程度の厚さで明褐色上、黒褐色上(粘土質)が堆積している。粘土質のため、固質である。土層の堆積状況は、北西部(3~5T)以外同様である。

出土遺物としては、土師器片、内耳土器片などが底面より0.50~0.60m上位で東側より集中的に出土している。

2 Tの調査結果 (第18図、図版8)

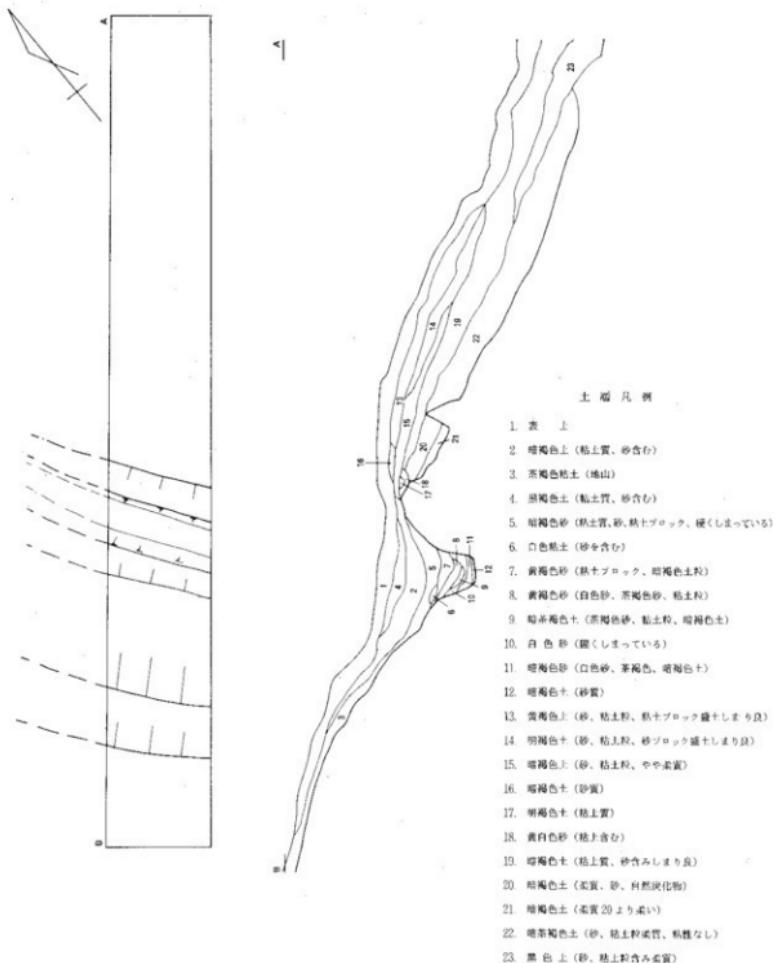
2Tは、1Tから約2.0m程度西側へIIノ郭まで設定したTで、全長21.50mを計測する。幅は、2.0mである。調査の結果、堀と土塁が確認された。堀は、上面幅8.10m(27.0尺)、底面幅0.54m(1.8尺)、深さ1.62m(5.4尺)を計測する。底面は、平坦で壁は底面より0.80mの所まで外壁で78°、内壁で68°の急勾配であり、ここから上面まで外壁で43°、内壁で31°の勾配で掘り込まれている。



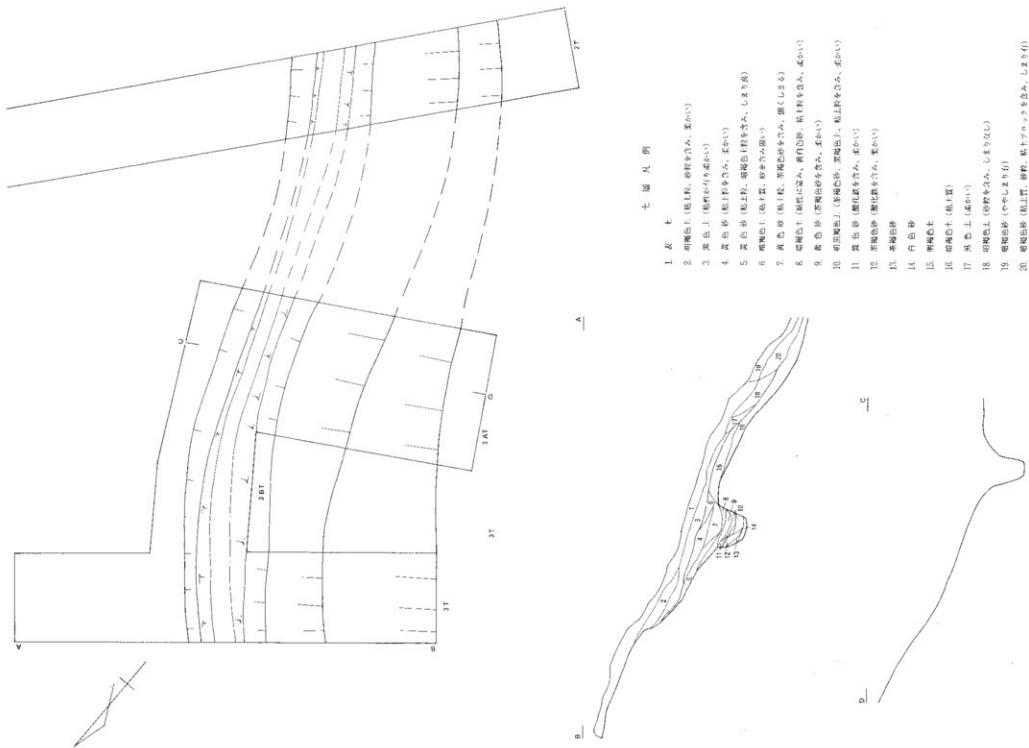
上層凡例

1. 黒土上
2. 黒色土 (砂、粘土粒含む)
3. 黒色土 (砂粒含む)
4. 貫白粘土ブロック
5. 噴褐色土 (白色粘土、砂粒含む)
6. 白色粘土
7. 噴褐色土 (砂、粘土粒含む)
8. 白砂、白色粘土ブロック (砂主体で固い)
9. 噴褐色土 (砂、粘土粒含む、固い)
10. 白色粘土ブロック、砂 (粘土主体で固い)
11. 噴褐色土 (砂、粘土粒含む)
12. 噴褐色土 (粘土ブロック含む)
13. 粘土、砂 (同じ割合で固い)
14. 白色砂層
15. 噴褐色土 (粘土ブロック、砂、粘土粒、喷褐色土含む)
16. 白色粘土 (白色粘土ブロック、砂含む)
17. 噴褐色土 (喷褐色砂、白色粘土ブロック含む)
18. 噴褐色砂 (やや黄質)
19. 白砂
20. 噴褐色土 (砂、白色含む)
21. 噴褐色土 (白色砂粒、喷褐色砂ブロック含む)
22. 噴褐色土 (喷褐色砂粒、白色砂ブロック含み、喷褐色土含む、重かい)
23. 噴褐色土上 (白色砂粒、白色粘土ブロック含み、重かい)
24. 噴褐色土 (喷褐色砂粒、喷褐色砂ブロック含み、重かい)
25. 噴褐色砂 (白色砂粒、白色粘土ブロック含み、固い)
26. 噴褐色土 (粘土質、土礫片粒、白色砂含み、固い)

第17図 1T(IIノ郭)実測図 ($1/100$) L = 35.00 m



第18図 2T (II no Kō) 実測図 ($1/100$) L = 35.00 m



第19図 3T (IIノ郭) 実測図 ($1/100$)



堀内の土層は、底面に暗褐色砂が5cm程度の厚さで堆積している。この上面は、1Tと同様であるが、各土層の厚さは1Tとは異なる。また、2Tの堀は西側でやや北へ寄っているため斜めで確認され、3Tとは北方に向い緩やかな弧を画くように掘り込まれている。

土壘は、堀の外側（北側）で確認されたが、主郭部（1ノ郭）の土壘はどしどしきした土壘ではなく、堀を掘った土砂等を北側斜面に捨てながら斜面構築した程度であるものの、土盛した各土層は固くしまっているため版築等の技法が考えられる。このため、土壘をも意識していたものと考えられる。土盛は、長さ6.00m、厚さ0.60mで砂や粘土を含む黄褐色土、明褐色土、暗褐色土を用いている。斜面構築の状況は、西側でも北側とほぼ同様の状況である。なお、土壘上面は戦後の開墾による削平を受けた可能性を有している。

出土遺物としては、きわめて少量で石臼片と土師器片が合計6点出土した程度である。石臼は、堀の南東部で堀底面より約1.00m上位から出土している。

3Tの調査結果（第19図、図版8）

3Tは、2Tの西約10.50mの所でⅡノ郭北側中央部に設定し調査を行った。この結果、3Tで確認された堀と1、2Tとの堀が弧を画いていることが判明したため、3Tの東側へ拡張T（3A、BT）を設定して調査を行った。

調査の結果、2Tより西方に掘り込まれた堀は、3BTまで緩やかに弧を画きながら北へ突出するよう掘り込まれ、3BTから3Tにかけては緩やかな弧を画き南西方方向に掘り込まれている。堀の上面幅は、3ATで8.10m（27尺）、3Tで7.50m（25尺）と3Aがやや広くなっている。底面は、3ATで0.36m（1.2尺）、3BTで0.48m（1.6尺）、3Tで0.51m（1.7尺）と3Tが広くなっている。深さは、3ATで1.06m（3.5尺）、3Tで1.00m（3.3尺）と3Tがやや浅くなっている。堀底面は、平坦面で、壁は外壁が底面より0.74mまで68°の勾配を有し、ここから堀上面まで35°の勾配を有している。内壁は、底面から0.88mまで70°の勾配を有し、ここから上面は43°の勾配を有しているよう、中央以下は急勾配の壁で掘り込まれている。

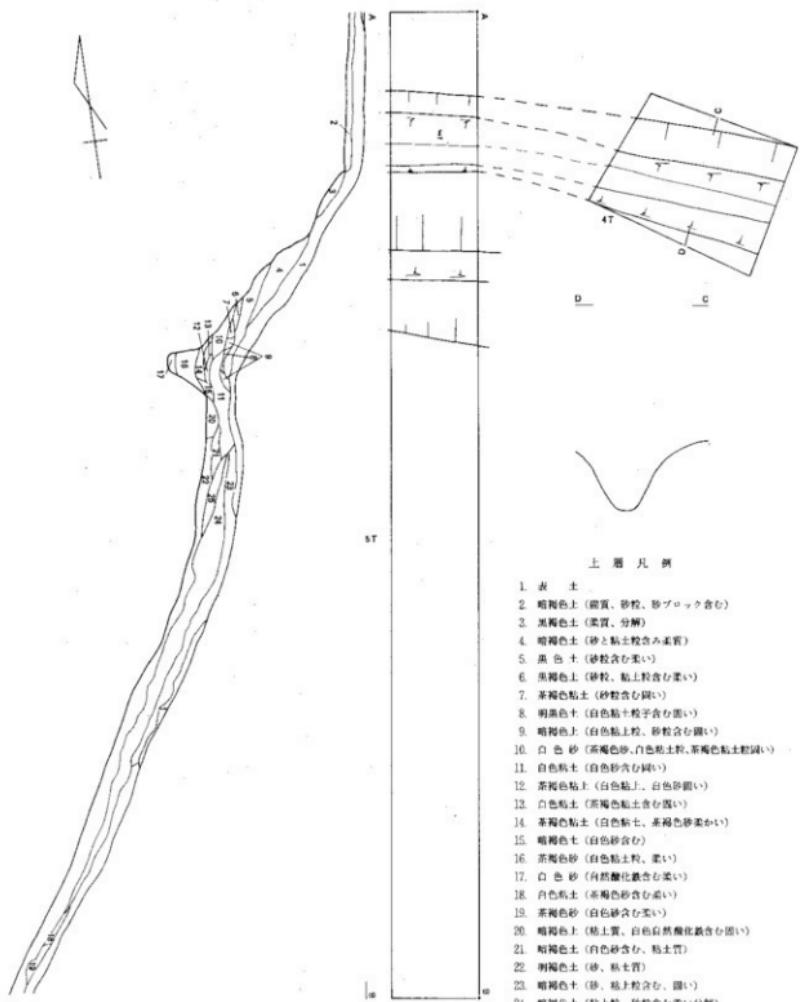
堀内の土層は、底面に白色砂（固くしまっている）が堆積し、上面に厚さ約0.60mで柔質の砂、黒褐色土、明褐色土が堆積している。この上面に厚さ約0.50mで固質の砂、暗褐色土が堆積している。この上面は、表土層等である。堆積状況は、1T～2Tと同様である。

出土遺物としては、比較的多いが全て土師器片と甕片で合計15点出土しているが、全て破片であるため実測不能である。

4Tの調査結果（第20図、図版9）

4Tは、3Tの西約7.00mの所でⅡノ郭が、北西コーナーに向い緩やかにカーブし始める部分に位置する。Tは、長さ3.60mと任意で設定している。

調査の結果、堀は南西方向に向い直線的に掘り込まれている。堀の上面幅は、東側で6.30m（21尺）西側で6.00m（20尺）と西側が狭くなっている。堀底面幅は、東側で0.36m（1.2尺）、西側で0.48m（1.6尺）と西側がやや広くなっている。深さは、1.20m（4.0尺）で東側、西側とも同じ深さである。



第20図 4 T・5 T (IIノ郭) 実測図 ($1/100$) L = 35.00 m

このように、西側で堀が狭くなるのは北西コーナーが台地の尾根部に位置するため、上面を狭くし底面を逆に広くしたためと判断される。堀の壁は、内外壁とも底面より 0.94 m まで 61° の勾配で掘り込まれ、ここから上面まで外壁が 27° で内壁 42° の勾配で掘り込まっている。このように、堀の中央部付近を境として上面は斜めに、下位は垂直に近い角度で掘り込んでいる。

堀内の土層は、1～3 T とほぼ同様であり、遺物は皆無である。

5 T の調査結果（第 20 図 図版 9）

5 T は、II ノ郭北東部で 4 T の西約 3 m の所で、II ノ郭北西コーナー部に位置する。調査の結果、東側で確認した堀が 6 T にかけて緩やかに弧を画きながら掘り込まれていることを確認したものの 5 T 内の堀は直線的に 4 T と結び付くようである。堀は、上面幅 6.00 m (20 尺)、底面幅 0.39 m (1.3 尺)、深さ 1.08 m (3.6 尺) を計測するが、内壁上面は崩落等により湾曲している。堀底面は、平坦面で外壁は底面から 0.80 m の所まで 60° の勾配を有し、ここから上面は 28° の勾配を有している。内壁は、底面から 0.76 m の所まで 80° の勾配を有し、ここから上面は 40° の勾配を有している。このように、外壁より内壁がより垂直に近い角度で掘り込まれている。本 T と、以東の T (1～4 T) での堀角度と多少異なった結果が得られた。T は、全長 10.0 m である。

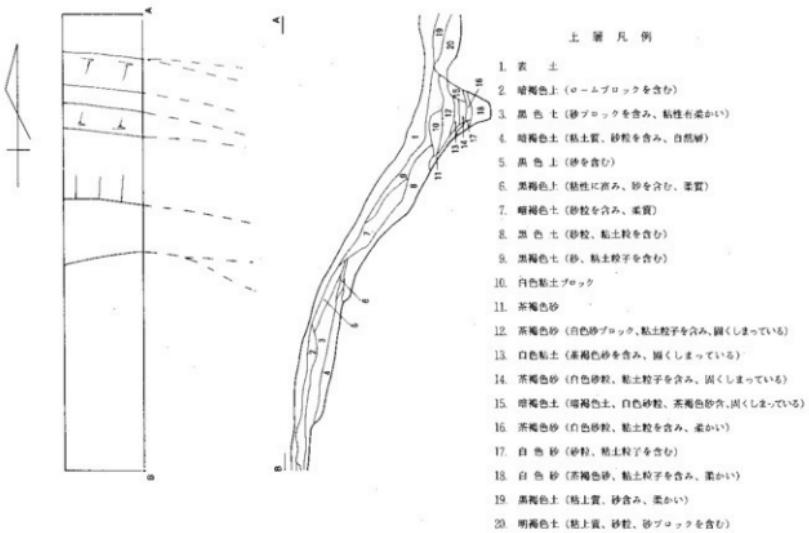
堀内の土層も、壁と同様異なっている。堀底面から中位まで (0.70 m 上面) は柔質な茶褐色粘土、暗褐色土、砂が堆積しており、底面には白色砂が堆積している。この上面には、固質の粘土、明黑色土、暗褐色土、砂が堆積している。堀中央以上は、5 T 以東の各 T と同様であるが、中央以下は異なっている。

出土遺物としては、堀上面で茶褐色粘土（第 5 層）下位より五輪塔空風輪と、5 点の土師器甕片が出土している。出土遺物に関しては、後述する。

6 T の調査結果（第 21 図、図版 9）

6 T は、5 T の西約 2.00 m で II ノ郭北西コーナー部に位置し、北側斜面まで設定した T で全長 21.0 m の T である。堀は、北西コーナー部に位置するためやや弧を画くように掘り込まれている。堀の上面幅は、6.00 m (20 尺) で底面幅は東側で 0.39 m (1.3 尺) を計測するが、西側では 0.36 m (1.2 尺) と西側がやや狭くなっている。深さは、1.14 m (3.8 尺) を計測する。底面は、外壁側が内壁側よりやや高くなっているが平坦である。壁は、外壁が上面から底面まで 62° の勾配を有しているが、内壁は底面から約 0.80 m の所まで 64° の勾配を有し、ここから上面は 36° の勾配を有している。このように外壁は直線的に急角度で掘り込まれているのに対し、内壁は上面が斜めで中央以下が急角度に掘り込まれている。この差は、6 T 内の堀が北西コーナー部（尾根部）に掘り込まれているためと判断される。

堀の外側（北側斜面）には、2 T 北側と同様に斜面構築した状況が認められたものの、明確な土塁としての土盛層は認められなかったが、斜面部上方（堀の北側）に長 2.10 m で比較的平坦な部分が所在することから、ここが土塁であった可能性を有している。土盛は、長さ 8.00 m、厚さ 0.55 m で、砂や粘土を含み固質な暗褐色土、黄褐色土、黒褐色土を用いて土盛している。



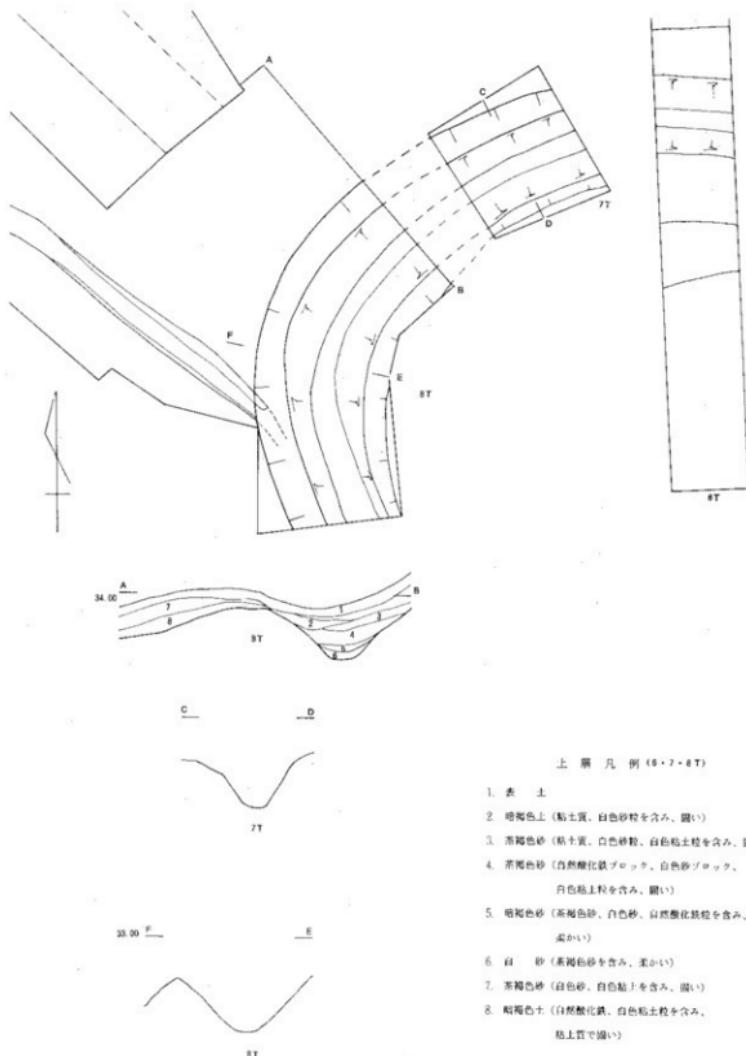
第21図 6 T (IIノ郭) 実測図 ($1/100$) L = 35.00 m

出土遺物としては、土師器坏片、甕片、カワラケ片などが合計 15 点出土したものの、図示可能な遺物は出土しなかった。土師器は、第 2 号住居址の遺物と推定されるが、復元不能である。

7 T の調査結果 (第 22 図、図版 9)

7 T は、6 T の南西約 2 m で II ノ郭北西コーナー部に位置している。T は、長さ 0.90 m で任意に設定了 T である。調査の結果、II ノ郭堀が東側より掘り込まれて 7 T 付近で南西へ大きく曲がるようであり、7 T はその部分に位置するため南西に向かい緩やかな弧を画くように掘り込まれている。堀の上面幅は、東側で 6.00 m (20 尺)、中央部で 6.30 m (21 尺)、西側で 6.00 m (20 尺) を計測する。底面は、東側で 0.45 m (1.5 尺)、中央部で 0.39 m (1.3 尺)、西側で 0.36 m (1.2 尺) を計測する。このように、堀は上面が東側より西側がやや広くなっている。底面は、西側が東側より狭くなっている。上面、底面とも、緩やかな弧を画いている。堀底面は、ほぼ平坦面となっており、壁は外壁が底面より約 0.70 m の所まで 52° の勾配を有し、ここから堀上面まで 27° の勾配を有しており内壁は、底面より 0.90 m の所まで 58° の勾配を有し、ここから上面にかけて 34° の勾配を有している。このように堀は底面より 0.70 ~ 0.90 m の所まで急角度であるが、上面にかけては緩斜面となっている。堀内の角度は 7 T 以東ほど急角度ではない。なお、深さは、0.75 m (3.2 尺) 程度である。

堀内の土層は、6 T と同様であり、出土遺物は土師器坏小破片が 3 点出土した程度である。



第22図 7T・8T(IIノ郭)実測図 (1/100)

8 Tの調査結果（第 22 図、図版 9）

8 Tは、7 Tの南西約 1 m でⅡノ郭及び遺跡の北西コーナー部に相当する。Tは、長さ 7.50 m で地形に合せ設定した。調査の結果、堀が大きく弧を画き南西方向へ掘り込まれている。堀の幅は、上面幅が東側で 6.60 m (22 尺)、中央部で 6.60 m (22 尺)、西側で 5.70 m (19 尺) を計測し、西側（南西方向）にかけて次第に狭くなっている。底面は、東側で 0.36 m (1.2 尺)、中央部で 0.42 m (1.4 尺)、西側で 0.63 m (2.1 尺) を計測し、上面とは逆に西側（南西方向）にかけて次第に広くなっている。底面は、皿状で内外壁の部分が中央部よりやや高くなっている。深さは、東側で 1.29 m (4.3 尺)、中央部以西が 1.12 m (3.7 尺) を計測し、次第に浅くなっている。壁は、外壁が東側で底面より 0.80 m の所まで 57° の勾配を有し、ここから上面まで 37° の勾配を有している。内壁は、底面より 0.90 m の所まで 67° の勾配を有し、ここから上面は 36° の勾配を有している。中央以西は、外壁が底面から上面まで 43° の勾配を有し、内壁も外壁同様 47° の勾配を有している。このように、東側と中央部以西では異なった掘り方をしている。

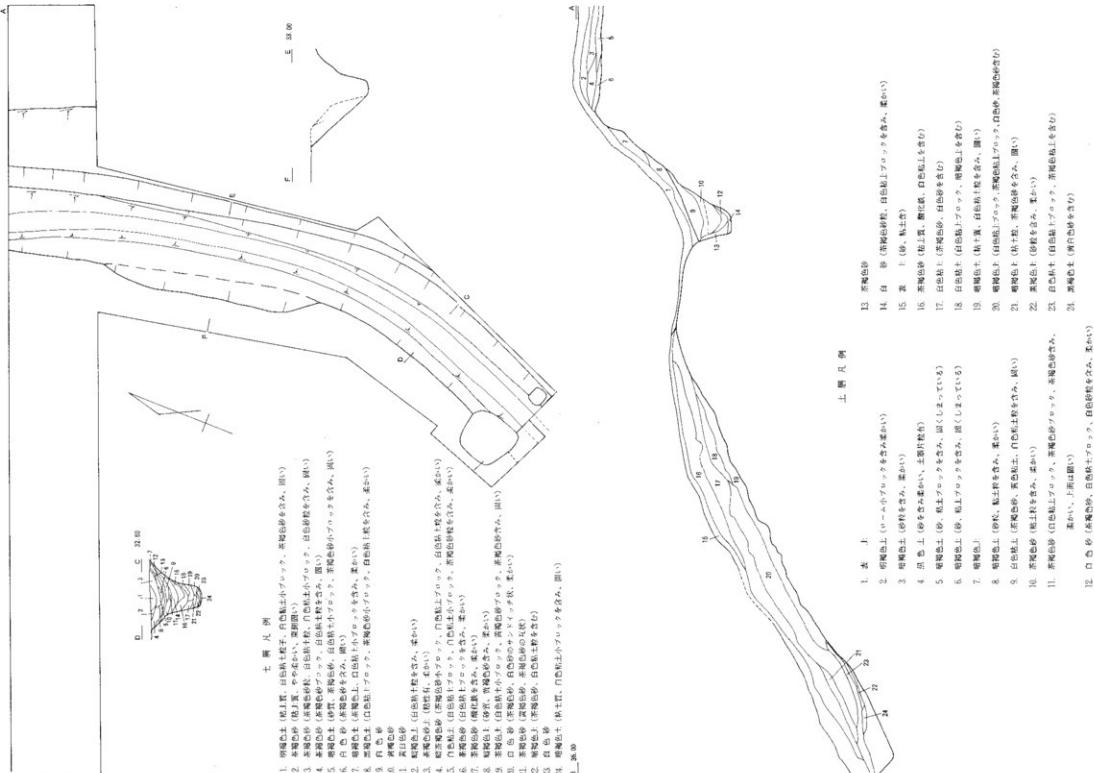
堀内の土層は、底面上 0.30 m の厚さで柔質な砂が堆積し、この上面に厚さ約 0.50 m で固質な暗褐色土と砂が堆積している。堆積状況は、7 T 以東とは多少異なっている。

出土遺物としては、常滑窯体部小破片が 2 点と土師器窯体部片が 7 点の合計 9 点出土したのみで、図示可能な遺物は出土しなかった。

9 Tの調査結果（第 23 図、図版 9・10）

9 Tは、Ⅱノ郭西側で 8 Tの南側に位置し、西側中央部付近まで長く設定した Tである。9 Tは、西側斜面部まで全長 2.30 m の長さで設定し、南側への拡張部は約 40.0 m である。堀は、8 Tからの堀が 9 T 中央部まで南東方向に向って掘り込まれてから、南西方向へ直線的に掘り込まれている。堀の幅は、9 T で上面幅 4.80 m (16 尺)、底面幅 0.39 m (1.3 尺) であり、深さは 1.05 m (3.5 尺) を計測する。9 T の南東部（拡張区）では、中央部上面幅 5.40 m (18 尺)、底面幅 0.33 m (1.1 尺)、深さ 1.50 m (5.0 尺) を計測する。南側では、上面幅 5.40 m (18 尺)、底面幅 0.36 m (1.2 尺)、深さ 1.41 m (4.7 尺) を、各々計測する。このように、堀の上面幅は南へ進むにつれて次第に広くなる傾向を有するが底面はほぼ一定のようであり、深さは次第に深くなる傾向を有している。堀深さの相違は、堀の外側（西側）土壠の高さと地山の高さによる相異である。堀の底面は、やや皿状をなすものの比較的平坦で、外壁は 9 T から中央部まで 0.90 ~ 1.03 m まで 76° ~ 71° の勾配を有し、ここから上面は 47° ~ 48° の勾配を有している。同じ所までの内壁は、底面から 1.35 ~ 0.74 m の所まで 62° ~ 74° の勾配を有しここから上面は 40° ~ 52° の勾配を有している。中央部から南西部にかけては、外壁は 61° ~ 50° の勾配を有し、内壁は 66° ~ 35° の勾配を有している。内壁は、9 T 南端は底面より 1.80 m の所までが 66° の勾配を有している。このように、堀の角度は南側にかけて内壁が直線的な急角度で掘り込まれている。

堀内の土層は、9 T では 8 T とはほぼ同様で底面より厚さ約 0.65 m で柔質な砂（白色と茶褐色）が堆積しており、この上面は固質な暗褐色土、粘土、砂が堆積している。拡張部では、1、2 T 等と同様の堆積状況である。堀底面には、砂と暗褐色土（良くしまっている）が堆積している。



第23図 9 T (IIノ郭) 実測図 ($1/100$)



西側土界（斜面構築部）は、堀西壁の1.50 m 西側より全長 11.40 m、最大厚 1.21 m で固く土盛されている。盛土面は、自然層の砂層上面に粘土質の暗褐色土、粘土、砂（固質で粘土ブロック、砂含）等を盛土している。自然層の砂層上面は、凸凹が著しく人工的に削平された状況を示している。盛土上面は、やや高くなっている。

出土遺物としては、スラグ 1 点、土器類片と甕片、須恵器甕片、石（雲母片岩）等が合計 12 点出土したもの、図示出来たのはスラグ 1 点のみである。石は、自然石で使用痕は認められなかった。

また、堀の南端は第 9 号土壙によりその西側を、一部掘り切られている。

10 T の調査結果（第 24 図、図版 10）

10 T は、Ⅱノ郭西側中央部で 9 T 南約 1.50 m に設定した T で、調査開始前主郭部（Ⅰノ郭）西側虎口と推定された部分である。T は、長さ 6.50 m で設定した。調査結果、9 T よりの堀が直線的に掘り込まれているのみで、虎口としての土橋、門址等の遺構は確認されなかった。幅は、北側で上面幅 5.80 m（19 尺）、底面幅 0.42 m（1.4 尺）深さ 1.41 m（4.7 尺）を計測し、中央部では上面幅が 6.30 m（21 尺）、底面幅 0.42 m（1.4 尺）、深さ 1.41 m（4.7 尺）を計測する。南側では、上面幅 6.40 m（8.0 尺）底面幅 0.45 m（1.5 尺）、深さ 1.20 m（4.0 尺）を、各々計測する。このように、幅は北側から南側にかけて上面幅が次第に広くなっているが、底面はほぼ同程度の広さである。深さは、南側がやや浅くなるがほぼ同程度の深さといえよう。堀底面は、ほぼ平坦面をなしている。壁は、外壁が底面より 0.88 m の所まで 72° の勾配を有し、ここから上面まで 43° の勾配を有している。内壁は、底面から 1.00 m の所まで 67° の勾配を有し、ここから上面は 52° の勾配を有している。このように、堀の壁は底面より 1.00 m までは急角度で掘り込まれているが、ここから上面までは緩斜面となっている。

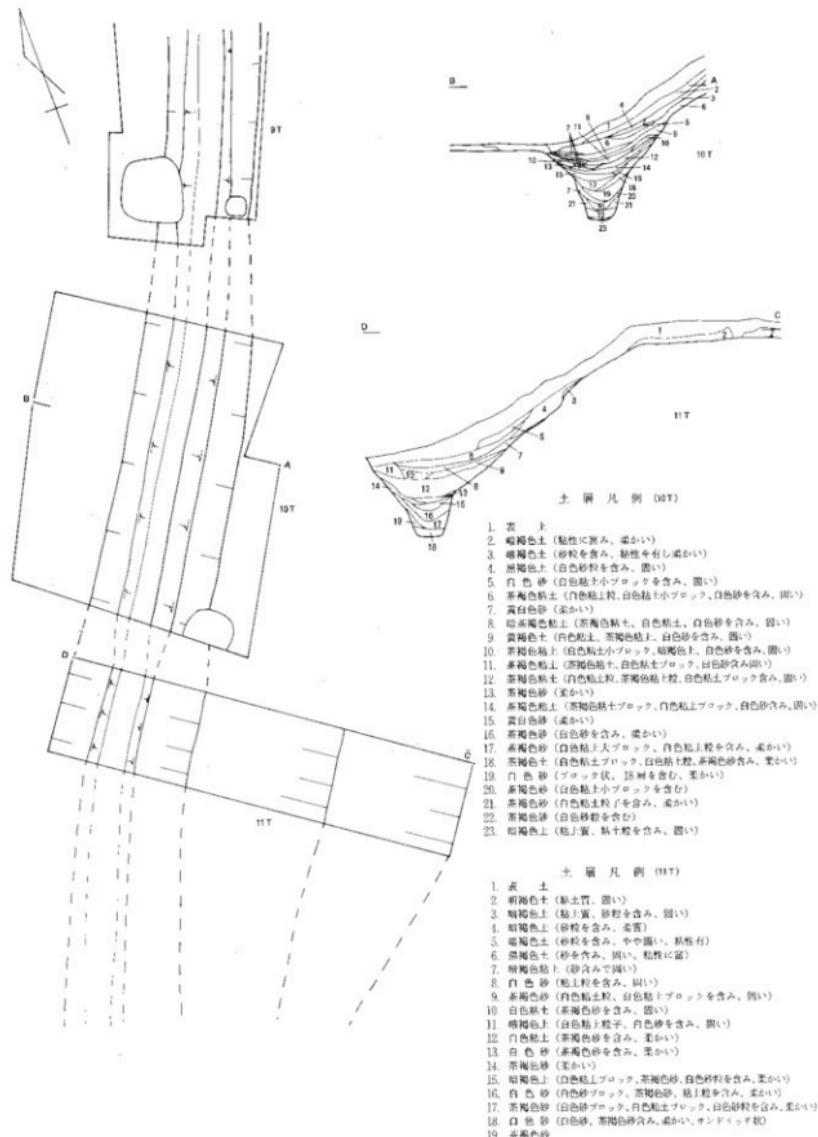
堀内土層は、底面に固質の暗褐色土が 0.06 m 堆積し、この上面に柔質な粘土、砂、茶褐色土などが厚さ約 1.00 m で堆積している。この柔質な土層上に、固質な暗褐色土、黒褐色土、砂、粘土、黄褐色土などが 0.60 m の厚さで堆積している。堆積状況は、Ⅱノ郭北側の 1 T、2 T、3 T 等とほぼ同様である。

出土遺物としては、堀内よりカワラケが 1 点と南端東側より貝層が出土したのみで、きわめて少量の出土遺物である。遺物に関しては、後述する。

11 T の調査結果（第 24 図、図版 10）

11 T は、Ⅱノ郭西側中央部南側で 10 T の南約 1.00 m に設定した T で、主郭部（Ⅰノ郭）より堀西側まで長さ 9.00 m の T である。調査結果は、10 T の堀と接続するように直線的に掘り込まれた堀が確認された。堀は、上面幅 6.60 m（22 尺）、底面幅 0.51 m（1.7 尺）、深さ 1.65 m（5.5 尺）を計測し、10 T よりやや広く深くなっている。堀底面は、平坦面で外壁は堀底面より 0.60 m の所まで 60° の勾配を有しここから上面までは 53° の勾配を有している。内壁は、堀底面より 0.88 m の所まで 74° の勾配を有しここから上面は 37° の勾配を有している。このように、堀の角度は 10 T の同角度と多少異なっているものの、堀上面壁は緩角度であるのに対し中央以下は急角度である。

堀内土層は、9 T 堀内土層と類似しているが、9 T 拡張区と 10 T の堀内土層とは異なる。



第24図 10T・11T (IIノ郭) 実測図 ($1/100$) L = 35.00 m

T堀内土層は、底面に砂（白色砂）が0.15m程度堆積しており、この上面に厚さ約1.00mで柔質な粘土、砂（白色、茶褐色砂）、暗褐色土等が堆積している。この上面に、厚さ約0.40mで固質な黒褐色土、粘土、砂、暗褐色土が堆積している。また堀底面の白色砂は、白色砂と茶褐色砂がサンドイッチ状に堆積している。

出土遺物は、皆無である。

12 Tの調査結果（第25図、図版10）

12 Tは、Ⅱノ郭南西コーナー部で11 T南約10.0mに位置し、主郭部（Ⅰノ郭）より西側斜面部まで設定したTである。T長は、約20.0mである。調査の結果は、11 Tよりほぼ直線的に掘り込まれた堀と、西側斜面の盛上状況が確認された。堀は、上面幅5.10m（17尺）、底面幅0.54m（1.8尺）、深さ0.99m（3.3尺）を計測する。幅と深さは、11 Tよりやや狭くなっている。堀の底面は、内壁側がやや高くなっているがほぼ平坦面をしており、外壁は底面から0.80mまでは57°の勾配を有し、ここから上面は25°の勾配を有している。内壁は、底面より1.00mまでは66°の勾配を有し、ここから上面は37°の勾配を有している。このように、内壁の角度は11 Tとほぼ同程度であるが、内壁の角度は11 Tより緩い角度である。

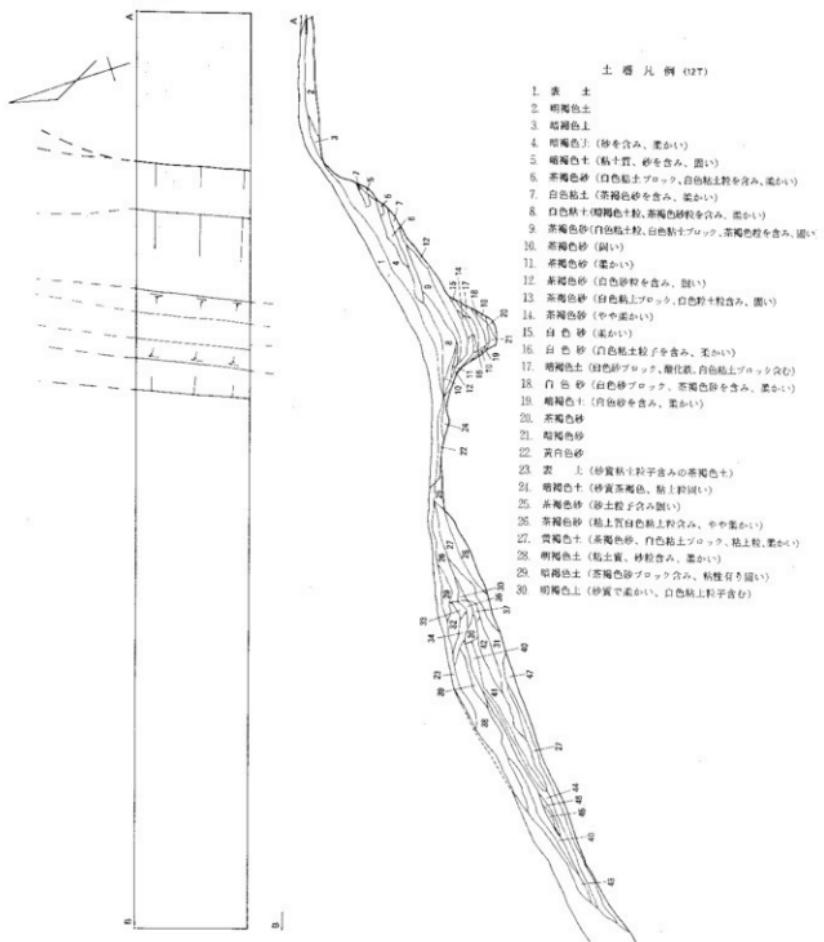
土層は、堀底面より0.50～0.60mの厚さで柔質な暗褐色土、白色砂、茶褐色砂、暗褐色砂が堆積し、この上面に厚さ約0.40mで固質な砂（茶褐色、白色）が堆積している。この上面に、柔質で粘土質の暗褐色土、茶褐色砂、白色粘土が堆積している。

西側斜面の盛上は、堀の西側約1.00mから斜面下約9.00m付近まで、最大厚約1.10mで盛土されている。盛上は、主として緩斜面を急斜面化するために盛土されている。堀より、西側5.00m付近までは0.60mの勾配を有する緩斜面で、この付近から急斜面を構築している。土層は、黄褐色土、明褐色土、暗褐色土、砂、粘土、黒褐色土等が、砂、粘土、酸化鉄を含みながら固く盛土されている。また中央部には、土壘状の掘り込みが認められるが柔質な覆土でのため、攪乱された状況であった。12 Tは、Ⅱノ郭南西コーナー部（14 T西側）まで拡張した。

出土遺物は、土師器甕片が3点出土した程度で図示不能な破片である。

13 Tの調査結果（第26図、図版11）

13 Tは、Ⅱノ郭の南西コーナー部で12 Tから14 T西側約2.00mの所まで、長く拡張したTで全長は約19.0mである。調査の結果は、堀と西側斜面の盛土が確認された。また、一部攪乱を受けている。堀は、コーナー部で南北方向へやや突出しており、犬走り状の平坦部を造っている。堀幅は、北側で上面幅4.80m（16尺）、底面幅0.60m（2.0尺）、深さ0.70m（2.3尺）を計測する。中央部（コーナー部）では、上面幅6.30m（22尺）、底面幅0.24m（0.8尺）、深さ0.84m（2.8尺）を計測する。東側では、4.20m（14尺）、底面幅0.27m（0.9尺）、深さ1.14m（3.8尺）を各々計測するが、東側から北側にかけては東側から4.00m付近まで平坦面となっているが、これ以後緩やかに下降し約7.00m付近で一段下がってから北側へと接続している。堀底面は、コーナー部が丸底となっている以外ほぼ平坦である。堀外壁は、北側が底面より0.36mの所まで50°の勾配を有し、ここから上面まで20°の勾配を有



- 31. 茶褐色土 (砂質で粘性有、白色砂ブロック、白色砂粒)
- 32. 茶褐色土 (粘性に富、白色砂粒含み、固い)
- 33. 茶褐色土 (砂質、白色砂粒、酸化鉄ブロック、粘土粒、柔かい)
- 34. 茶褐色土 (砂質、白色粘土ブロック含み、柔かい)
- 35. 茶褐色砂 (白色粘土粒、酸化鉄ブロック)
- 36. 茶褐色砂 (酸化鉄ブロック含み、柔かい)
- 37. 白 色 砂 (白色砂ブロック、茶褐色砂)
- 38. 茶褐色土 (白色砂粒、茶褐色砂ブロック固い、難み認め)
- 39. 茶褐色砂 (白色砂粒、酸化鉄柔かい)

- 40. 茶褐色砂 (白色砂、白色粘土粒、酸化鉄ブロック柔かい)
- 41. 茶褐色土 (白色砂粒、白色砂ブロック、茶褐色砂ブロック、やや柔かい)
- 42. 白色粘土 (白色粘土ブロック、白色粘土粒、茶褐色土、柔かい)
- 43. 黑褐色土 (粘土質、白色粘土ブロック、白色砂粒、固い)
- 44. 茶褐色土 (明、粘土質、白色粘土粒、白色砂粒ブロック、柔かい)
- 45. 茶褐色土 (白色砂粒、茶褐色砂、茶褐色砂ブロック、柔かい)
- 46. 白 色 砂 (白色砂粒、白色砂ブロック、茶褐色砂)
- 47. 白 色 砂 (白色砂粒、白色砂ブロック、柔かい)
- 48. 茶褐色土 (粘土質、白色砂粒バニス、固い)

第25図 12T (II no Koh) 実測図 ($1/100$) L = 35.00 m

している。内壁は、 56° の勾配を有している。コーナー部では、外壁が底面より 0.45m (1.5尺)の所まで 50° の勾配を有し、ここから上面は 37° の勾配を有している。内壁は、ほぼ同程度で $45\sim47^{\circ}$ の勾配を有している。東側では、外壁が底面より 0.60m (2.0尺)の所まで 54° の勾配を有し、ここから上面は 20° の勾配を有している。内壁は、底面より 1.15m (3.5尺)の所まで 57° の勾配を有し、ここから上面は 18° の勾配を有している。このように、12Tからは上面が緩角度で中央以下の角度も減少し斜めになっている。大走りは、堀底面より 0.45m (1.5尺)の所に設けられており、幅 0.29m (0.9尺)、長さ 6.84m (22.8尺で3.8間)を計測する。

土層は、12T土層に多少異なっている。堀底面に、 $0.04\sim8\text{cm}$ の厚さで固質の暗褐色土が堆積し、この上面に柔質な砂(白色及び茶褐色)、暗褐色土が厚さ 0.15m で堆積している。この上面に、固質な砂(茶褐色)、暗褐色土等が 0.80m 程度堆積している。西側斜面の盛土は、茶褐色砂、暗褐色土、黒褐色土が厚さ約 1.00m 以上で盛土され、固くしまっている。

出土遺物としては、土師盤壺片が7点出土した程度である。

14Tの調査結果 (第26図、図版11)

14Tは、主郭部(Ⅰノ郭)からⅡノ郭南側の西側にかけて設定したTで長さ 10.0m を計測する。調査の結果は、主郭部(Ⅰノ郭)南側土塁と堀を確認したものの、南側斜面への盛土は確認されなかつた。土塁に関しては、前述してある。堀は、上面幅 4.20m (14尺)、底面幅 0.45m (1.5尺)、深さは 0.96m (3.2尺)を計測する。堀底面は、内壁部が外壁部よりやや深くなっているがほぼ平坦面をなしでいる。壁は、外壁が堀底面より 0.36m (1.2尺)の所まで 63° の勾配を有し、ここから上面は 50° の勾配を有している。内壁は、底面より堀上面まで 56° の勾配を有し、ここから土塁南側下端まで 37° の勾配を有している。このように、堀外壁が急角度であるのに対し内壁は、緩角度で掘り込まれている。また外壁上面は、やや内側へ湾曲している。

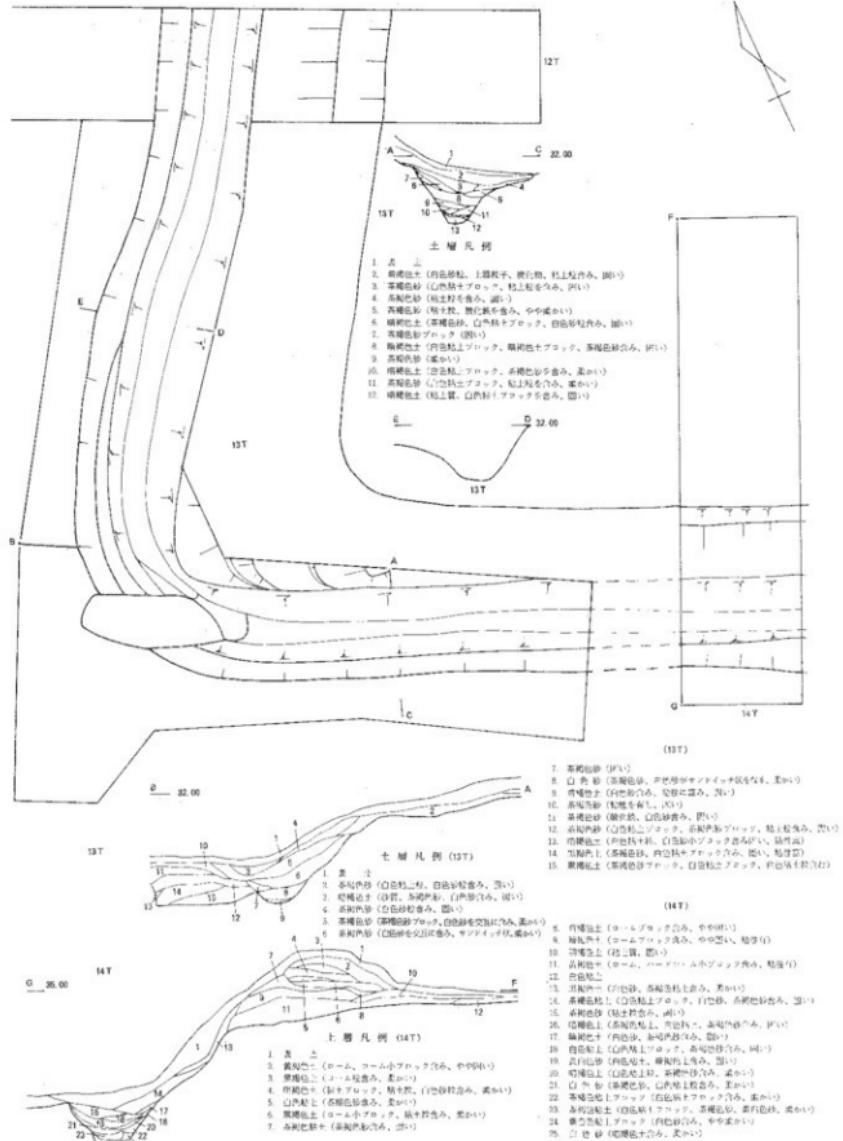
堀内土層は、13Tの土層と多少異なっている。堀底面より、厚さ $0.30\text{m}\sim0.70\text{m}$ で柔質な粘土(茶褐色、黃白色)、白色砂が堆積しており、この上面に厚さ約 0.50m で固質な粘土、砂、暗褐色土等が堆積している。

出土遺物としては、土師器甌3点、土製支脚片1点、縄文式土器片1点等が出土した程度である。

15Tの調査結果 (第27図、図版11)

15Tは、14T同様主郭部(Ⅰノ郭)南側からⅡノ郭南側中央部にかけて設定したTで、長さ 9.30m で設定した。調査の結果は、T北側で主郭部(Ⅰノ郭)南側土塁とT南側で堀が確認されている。土塁は、前述してある。堀は、上面幅 4.20m (14尺)、下面幅 0.57m (0.9尺)、深さ 1.02m (3.4尺)を計測し、14Tよりやや広く深くなっている。堀底面は、ほぼ平坦面であり壁は、外壁が底面より 0.33m (1.1尺)まで 55° の勾配を有し、ここから上面まで 32° の勾配を有している。内壁は、底から上面まで 60° の勾配を有し、ここから土塁南側下端まで 33° の勾配を有している。このように、内壁より外壁が緩角度を有している。

堀内土層は、底面に厚さ約 0.10m で柔質の茶褐色砂層が堆積しており、この上面に厚さ 0.55m で固



第26図 13T・14T (II・郭) 実測図 (1/100)

質な白色粘土、暗褐色土、白色砂、茶褐色砂が堆積している。この上面には、厚さ約0.70mで固質な明褐色土、暗褐色土、粘土、黒色土が堆積している。

出土遺物としては、土師器甕が破片で11点出土したのみである。

16 Tの調査結果（第27図、図版12）

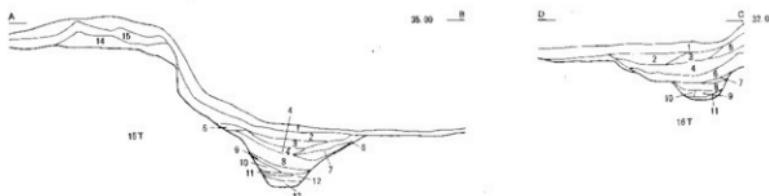
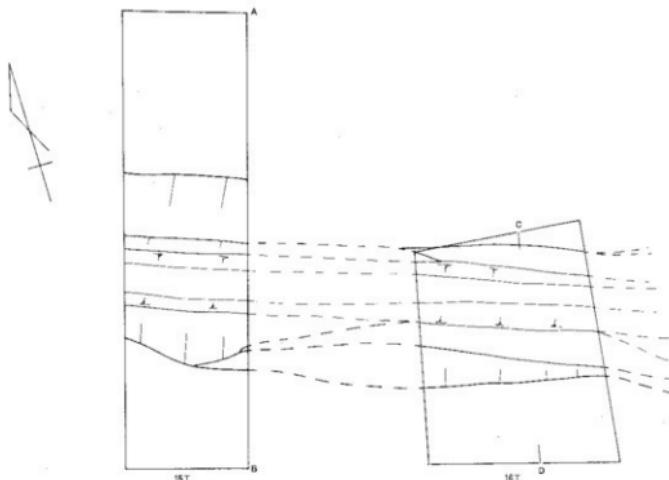
16 Tは、Ⅱノ郭中央東で15 Tの東約4.00mに設定したTで、長さ4.70m、幅3.50mで設定したTである。調査の結果、堀と掘の南壁（外壁）中央部に犬走り状の平場を確認した。この平場は、土層の堆積状況から堀内に設けられた設置と判断される。堀は、上面幅が東側で4.80m（16尺）、西側で4.50m（15尺）を計測し、底面幅は東側で0.42m（1.4尺）、西側で0.54m（1.8尺）を計測する。深さは、西側で0.84m（2.8尺）、中央以東で0.54m（1.8尺）を計測する。このように、15 Tから17 T方向にかけて次第に狭く浅くなっている。深さの差は、16 T中央部で地山が東側にかけて下降しているためである。犬走り状の平場は、外壁で底面より0.41m（1.3尺）上面に位置し、幅は東側で0.72m（2.4尺）、西側で0.48m（1.6尺）を計測し西方に向かい次第に狭くなっている。堀底面は、中央部から東側は平坦となっているが、西側は丸底状を呈している。壁は、外壁は犬走り状の所までが47°の勾配で、犬走り状平坦部から上面までは32°の勾配を有している。内壁は、底面より0.60m（2.0尺）の所までが65°の勾配で、ここから上面は25°の勾配を有し主郭部（Ⅰノ郭）南側土塁下端まで到るものと推定される。また、北側にも幅0.50mで底面より0.76mの所にも一段の平場を設けている。

堀内の土層は、犬走り状平坦部以下には0.41mの厚さで柔質な砂（茶褐色、黄色、黄褐色）、暗褐色土が堆積しており、この上面には厚さ約0.60mで固質な暗褐色土、黒褐色土、砂が堆積しており、今までの堀内土層とは異なった堆積状況を示している。

出土遺物としては、土師器甕が破片で5点出土した程度である。

17 Tの調査結果（第28図、図版12）

17 Tは、Ⅱノ郭の南東部に位置する所で、堀が北東へ向かって曲がる部分に相当する。Tは、本根を除き幅約7.00m、長さ約3.80mで設定した。調査の結果、Tの中央西側で堀が北東に曲がっていることが確認され、底面は中央西側で南側へ広がりコーナー部を形成している。また、堀の北側と南側の平場は、16 Tよりやや狭くなっているが堀と併行して設けられている。堀幅は、上面幅が東側で5.10m（27.0尺）、西側で5.40m（18.0尺）を計測する。堀底面幅は、東側で0.75m（2.5尺）、西側では0.54m（1.8尺）、コーナー部で1.05m（3.5尺）を各々計測する。深さは、東側で1.08m（3.6尺）、西側で1.02m（3.4尺）、コーナー部で0.52m（1.7尺）を各々計測する。このように、西側からコーナー部にかけ広くなり、コーナーから東側にかけて次第に狭くなっている。深さでは、コーナー部が浅い以外ほぼ同程度の深さである。北側（内壁）の平坦は、東側で堀底面より0.12m（1.4尺）、中央部で0.28m（0.9尺）、西側で0.75m（2.5尺）の高さを有している。幅は、コーナー部から東側にかけてが0.36m（1.2尺）で、コーナーから西側にかけて0.54m（1.8尺）を計測し、西側から次第に狭くなっている。南側（外壁）の平坦部（犬走り状）は、堀底面より東側で0.75m（2.5尺）、中央部では0.75m（2.5尺）～0.30m（1.0尺）、西側で0.48m（1.6尺）の高さを計測し、幅はほぼ一定で0.36m



土 壤 例 15T

1. 黒 砂

2. 明褐色土 (粘土質固い、白色砂含む、酸化鉄含む)

3. 明褐色土 (2層より固い白色粘土粒、黃褐色砂ブロック)

4. 明褐色土 (粘土質、白色粘土粒含む固い)

5. 黃褐色粘土 (黃褐色砂含む固い)

6. 黒 砂 (炭化物含む)

7. 明褐色土 (黄白色砂、白色粘土ブロック、固い)

8. 白色粘土 (白色粘土粒子、白色砂粒、白色粘土小ブロック)

9. 明褐色土 (白色粘土粒子、黄白色砂、茶褐色土固い)

10. 白色粘土 (ブロック状をなす、固い)

11. 白 色 砂 (固い)

12. 明褐色砂 (固い)

13. 明褐色砂 (白色粘土小ブロック含む、固い)

14. 黑褐色土 (茶褐色粘土ブロック含み、柔かい)

15. 茶褐色粘土 (柔かい)

土 壤 例 (16T)

1. 明褐色土 (泥炭化、砂粒、粘土粒、固い)

2. 明褐色土 (白色砂ブロック、粘土粒、白色砂粒、固い)

3. 明褐色土 (白色砂小ブロック、白色砂粒、固い)

4. 黑褐色土 (自然消化物、酸化鉄ブロック、白色砂粒、粘土粒、固い)

5. 黑褐色土 (白色砂ブロック、粘土粒、固い)

6. 白 色 砂 (白色粒子含み白色砂ブロック、粘土粒、ブロック固い)

7. 明褐色砂 (白色粒子含み、柔かい)

8. 黄褐色砂 (柔かい)

9. 黄褐色砂 (粘土粒、白色砂粒、柔かい)

10. 茶褐色砂 (柔かい)

11. 明褐色土 (自然酸化鉄ブロック、粘土粒、柔かい)

第27図 15T・16T (IIノ郭) 実測図 (1/100)

(1.2尺)を計測する。堀の底面は、西側が内壁側が外壁がやや高くなっているが、中央以東同様ほぼ平担面をなしている。壁は、外壁が西側から中央部にかけて 29° (平場上面も含) の勾配であり、東側では堀底面から平場にかけては 28° 、平場から上面までが 57° の勾配を各々有している。内壁は、西側から中央部までが底面より平場まで 50° 、平場から上面まで 54° の勾配を有しており、東側では底面から平場まで 68° 、平場から上面まで 32° の勾配を各々有している。このように、内壁は比較的急角度であるが、外壁は緩角度となっている。

堀内上層は、西側では $16T$ と類似しており底面より厚さ $0.40m$ で、砂質で柔質な茶褐色砂、暗褐色土、白色砂が堆積しており、ここから上面までは砂質で固質な黒褐色土、茶褐色砂、暗褐色土が堆積している。中央以東では、底面より上面まで砂質で固質な明褐色土、暗褐色土、黒色土、砂が堆積している。

出土遺物としては、カワラケ1点、土師器坏片、甕片合計7点等が出土している。カワラケは、西側堀底面よりの出土である。遺物については、後述する。

18 Tの調査結果 (第28図)

18 Tは、IIノ郭南東端で17 Tの東側約 $3.00m$ で、IIノ郭からIIIノ郭上面まで長さ約 $8.50m$ で設定したTである。調査の結果は、Tの北側に堀を確認したが、斜面部構築の盛土は廃域後の盛土が確認されたのみである。

堀は、北東に向かい緩やかにカーブする状況で確認されている。堀幅は、上面幅が東側、西側ともほぼ同様で $6.60m$ (22.0尺)を計測する。堀底面幅は、東側で $1.02m$ (3.4尺)、西側で $0.75m$ (2.5尺)と西側がやや広くなっている。平場は、内壁側が堀底面より $0.42m$ (1.4尺)の所に設けており幅 $0.39m$ (1.3尺)を計測する。外壁側では、堀底面より $0.48m$ (1.6尺)の所に設けており、幅は西側で $0.72m$ (2.4尺)、東側で $0.90m$ (3.0尺)と東側にかけて次第に広くなっている。堀底面は、ほぼ平担で壁は、外壁が底面より $0.27m$ (0.9尺)の所まで 55° の勾配を有し、ここから上面までが 24° の勾配を有している。内壁は、底面より $0.42m$ の所まで 32° の勾配を有している。このように、外壁は内壁より急角度を有しており、平場より上面までは緩角度である。深さは、 $0.60m$ (2.0尺)を計測する。

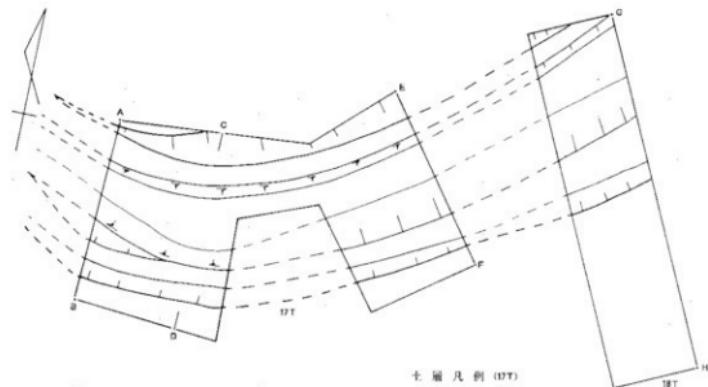
堀内土層は、底面より $0.40m$ の厚さで柔質な砂層(茶褐色、暗褐色)が堆積しており、この上面に固質な暗褐色土、黒色土(各々粘土質)が厚く堆積している。南側では、黒色土に暗褐色土、黒褐色土(固質で砂質)が盛土されているものの、盛土状況から廃域後の盛土である。

出土遺物としては、土師器片等が合計7点程度出土したのみである。なお、本T以東は開墾により消失している。遺物は、後述する。

28 Tの調査結果 (第29、35図、第9表、図版12)

28 Tは、IIノ郭南側の南東斜面下でIIIノ郭南側平担部(Xノ郭)に設定したTである。Tは、中央部に幅 $7.70m$ 、長さ $4.50m$ でTを設定し、この東側と西側に拡張区を設定して調査を行った。

調査結果は、東側から西側(IIIノ郭南東部)にかけて狭く浅い溝が1条確認されたが、中央西側では南壁が流出しており、中央部で一段下がっている。溝の規模は、東側で幅 $0.80m$ (2.6尺)で深さが



七層凡例 (17T)

1. 黒褐色土 (自然風化物、難化成ブロック、白色砂粒、粘土粒、固い)
2. 自然難化成
3. 茶褐色砂 (自然難化成ブロック、白色砂粒、柔かい)
4. 茶褐色土 (砂質、自然難化成ブロック含み、やや柔かい)
5. 茶褐色土 (砂質、自然難化成ブロック含み、やや柔かい)
6. 茶褐色砂 (白色砂粒、粘土粒、自然難化成ブロックより白色砂多い、やや柔かい)
7. 茶褐色土 (自然難化成、白色砂粒、柔かい)
8. 茶褐色土 (白色砂粒、粘土粒、自然難化成、茶褐色土、柔かい)
9. 墓系褐色砂 (難化成小ブロック含み、柔かい)
10. 白色砂 (柔かい)
11. 茶褐色砂 (白色砂、粘土粒、固い)

上層凡例 (18T・19T)

1. 黒土 (砂質、固い)
2. 茶褐色土 (白色砂粒、茶褐色砂小ブロック、粘土質、固い)
3. 黑色土 (白色砂粒、茶褐色砂粒、粘土粒、固い)
4. 茶褐色砂 (白色砂粒、固い)
5. 茶褐色土 (白色砂粒、粘土粒、粘土質、固い)
6. 茶褐色砂 (白色砂、自然難化成、やや柔かい)
7. 白色砂 (粘土粒、粘土ブロック、固い)
8. 茶褐色土 (白色粘土粒、白色砂、固い)
9. 茶褐色砂 (白色砂粒、黃白色砂、柔かい)
10. 茶褐色砂 (白色砂、ブロック含み、固い)
11. 墓系褐色砂 (柔かい白色砂粒含む)
12. 茶褐色砂 (粘土粒、粘土ブロック、柔かい)
13. 茶褐色砂 (柔かい)
14. 茶褐色砂 (白色粘土粒、白色粘土ブロック、白色砂、柔かい)
15. 茶褐色土 (砂質、白色砂粒含み、固い)
16. 茶褐色土 (白色砂粒含み、柔かい)
17. 黑褐色土 (粘土質、白色砂粒含み、固い)
18. 茶褐色土 (粘土質、白色砂、茶褐色砂、固い)
19. 茶褐色土 (自然難化成ブロック、白色砂、固い)

第28図 17T・18T (IIノ郭) 実測図 ($1/100$)

0.40 m (1.3 尺)、中央部で幅 0.60 m (2.0 尺)、深さ 0.45 m (1.5 尺)、西側で幅 0.72 m (2.4 尺)、深さ 0.48 m (1.6 尺) を各々計測する。溝底面は、丸底で壁は斜めに掘り込まれている。中央部での段差は 0.23 m である。

溝内の土層は、砂質の暗褐色土、黒色土が溝内に堆積している。出土遺物としては、土玉、カワラケが出土している。出土遺物については、後述する。

なお、本溝の西端を知るために II ノ郭北側で、II ノ郭から当郷にかけて T を入れたが両者 (X、II ノ郭) において遺構ははら確認されなかつたし、X ノ郭西端は調査開始前に消失している。また、西側拡張 T 西端部分で、本溝はその痕跡を残す程度となっている。本溝は、東側から地形に沿うように掘り込まれた溝で、カワラケ等が出土していることから当城跡に関連する遺構と推定される。

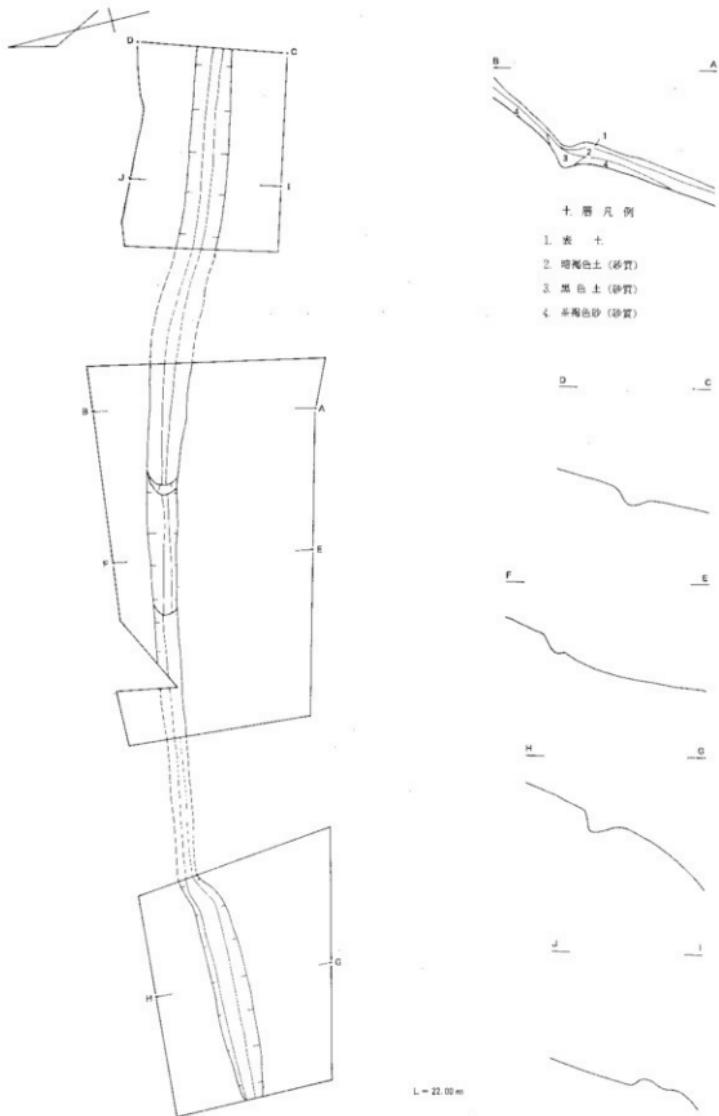
3) II ノ郭堀 (第6図、第8表)

II ノ郭での T による調査結果は、前項で述べたとおりである。このように II ノ郭は主郭部 (I ノ郭) の地形に沿うように堀が全周していたことと判断されるが、東側は開墾により当時の地形を消失しているため、堀も消失し確認されなかつた。また、虎口は北東部に 1 ケ所設けられている。

堀の規模は、北側、西側、南側とでは多少異なった計測値を有している。北側 (1 ~ 6 T) では東側からの堀が 2 T で南側に入り込んでから北西方向へ弧を画いている。この 2 T 部分の堀が、北側では最も広く 8.10 m (27.0 尺) を計測し、北西コーナー部 (6 T) で 6.00 m (20.0 尺) と 2 m 以上も狭くなっている。これ以外では、6.00 m (20 尺) ~ 7.50 m (25 尺) の幅を有している。北西部 (7、8 T) は、ほぼ同程度の幅で 5.70 m (19 尺) ~ 6.30 m (21 尺) を計測するが、北側よりやや狭くなっている。西側 (9 ~ 13 T) では、中央北側で堀が緩やかに曲る部分 (9 T ~ 9 T 中央部) が最大幅 5.40 m (18 尺) と狭く、11 T が 6.60 m (22 尺) と最も広くなっている。他は、4.80 m (16 尺) ~ 6.60 m (22 尺) の堀幅である。南西コーナー部では、5.40 m (18 尺) を計測する。南側では (13 ~ 16 T)、14 T が 4.20 m (14.0 尺) と狭くなっている。他の部分では 4.50 m (15 尺) ~ 6.30 m (22 尺) と次第に広くなり、これから南東部 (16 ~ 18 T) にかけて次第に広くなっている。18 T が広く 6.60 m (22.0 尺) と南東部で最も広い堀となっている。このように、堀の幅で見ると北東部、南東部の西コーナーと、北側中央部が 6.60 m 以上と最も広くなっている。南西コーナー部 (13 T) が最も狭くなっている。他部分では、ほぼ平均した広さで 17 ~ 22 尺程度の幅を有している。

深さで見ると、北東部 (1 T) 虎口付近が 1.86 m (6.2 尺) と最も深くなっているが、他の部分では一定ではない。北側では、1.00 m (3.3 尺) ~ 1.62 m (5.4 尺) の深さであるが、1.20 m (4.0 尺) 以内の所が多い。北西コーナー部では、0.95 m (3.2 尺) ~ 1.29 m (4.3 尺) と 1.20 m (4.0 尺) 前後の数値を示している。西側では、9 T 中央部が 1.50 m (5.0 尺) と最も深く 13 T 北側が、0.70 m (2.3 尺) と最も浅くなっている。他の部分では、0.99 m (3.3 尺) ~ 1.41 m (4.7 尺) の深さを有しており、3 尺 ~ 5 尺程度の深さである。南側は、浅い部分が中心で 0.52 m (1.7 尺) ~ 1.08 m (3.6 尺) の深さであるが、3 尺代が多い。このように、深さで見ると最も深い部分で 6 尺、最も浅い部分で 1.7 尺となるが、3 尺 ~ 5 尺代での深さの部分が多く見られる。

堀の壁を見るならば、内壁、外壁とも中央以下が急角度で掘り込まれており、中央以上が緩い角度で掘り込まれる箱築陥堀状をなしている。これを角度から見ると、北側中央部は内壁、外壁とも 70°



第29図 IXノ郭 (28T) 遺構実測図 ($1/100$) $L = 22.00 \text{ m}$

以上と40°以上の角度を有しており、北側の西側では外壁が60°、27°以上で内壁は60°、40°以上の角度を有しており、北側中央部より緩い角度となっている。北西コーナー部は、外壁が50°と30°代で内壁は50~60°、30°代となっており、北側西部より緩い角度である。西側は、外壁が60°~70°代と40°代で、内壁は60°代と40°前後の角度を有し、北西コーナー部よりやや急角度をなしている。南西コーナー部は、外壁が50°代と20°代で内壁50°代と40~50°代の角度で、西側より緩い角度であり、北西コーナー部と類似した角度である。南側は、14~16 Tにかけては外壁が50°~60°代と30°~50°となり、内外壁とも緩い角度を有している。南東部では、内外壁とも20°~50°代の角度で、南側中央部と類似した角度である。

以上のように、北側の堀が広く深くそして急角度の堀となり、コーナー部が浅く狭い堀で緩い角度に掘り込まれている。これは、コーナー部が尾根筋に相当する部分であることに帰因するようであり、現存する土塁（Iノ郭）と合せ考えると、堀が浅くなっている所に土塁が築かれているように見える。しかし、これは現状からの結果であり、土塁がIノ郭に全周していたであろうことから、否定される点である。コーナー部が浅いのは、地理的条件による可能性が高いものと推定される。

堀と土塁との関係は、Iノ郭内で土塁が現存する部分で見ると、北西部（5 T）ではIノ郭土塁とIノ郭土塁（斜面盛土）間が、6.60 m (20.0 尺) で比高差 2.40 m (8.0 尺) である。この方法で見ると

第8表 堀計測値一覧 (m)

TNO 地 点	上幅	底幅	深さ	外 壁		内 壁	
				位置	下面部 角	上面 角	位置
東	3.90	0.36	0.75				
I 中	6.30	0.33	1.86	0.80	86°	62°	0.70
T 西	6.00	0.36	1.71				
2 T	8.10	0.54	1.62	0.80	78°	43°	0.80
3 T	7.50	0.36	1.00	0.74	68°	35°	0.88
A	8.10	0.48	1.06				
4 東	6.30	0.36	1.20	0.94	61°	27°	0.94
T 西	6.00	0.48	1.20	0.94	61°	27°	0.94
5 T	6.00	0.39	1.08	0.80	60°	28°	0.76
6 T	6.00	0.39	1.14				
7 T	6.00	0.45	0.95	0.70	52°	27°	0.90
中	6.30	0.39	0.95				
西	6.60	0.36	0.95				
東	6.60	0.36	1.29	0.80	57°	37°	0.90
I 中	6.60	0.42	1.12				
T 西	5.70	0.63	1.12				
	4.80	0.39	1.05	0.90	76°	47°	1.35
				1.03	71°	48°	0.74
9 T	5.40	0.33	1.50	0.90	76°	47°	1.35
中				1.03	71°	48°	0.74
南	5.40	0.36	1.41		61°		1.80
					50°		66°
							35°

TNO 地 点	上幅	下幅	深さ	外 壁		内 壁	
				位置	下面部 角	上面 角	位置
北	5.80	0.42	1.41				
10 T	6.30	0.42	1.41	0.88	72°	43°	1.00
南	6.40	0.45	1.20				
11 T	6.60	0.51	1.65	0.60	60°	53°	0.88
12 T	5.10	0.54	0.99	0.80	57°	25°	1.00
北	4.80	0.60	0.70	0.36	50°	20°	
13 T	6.30	0.27	0.84	0.45	50°	37°	45°
東	4.20	0.27	1.14	0.60	54°	20°	1.15
14 T	4.20	0.45	0.96	0.36	63°	50°	
15 T	4.20	0.57	1.02	0.33	55°	32°	60°
東	4.80	0.42	0.84	0.41	47°	32°	0.60
16 T	4.50	0.54	0.54				
東	5.10	0.75	1.08	0.75	28°	57°	0.42
17 T		0.52	0.52	0.75	29°	29°	0.28
西	5.40	1.02	1.02	0.48			0.75
東	6.60	1.02	0.60	0.27	55°	24°	0.42
18 T	6.60	0.75	0.60				

6 Tでは7.50m(20.5尺)に2.90m(9.3尺)を計測する。9 Tでは、7.50m(20.5尺)に2.70m(9.0尺)を計測する。15 Tでは5.40m(10.8尺)に3.00m(10.0尺)を計測する。このように、比高差は10.0尺が基準のようであり、実好堀幅は10～20尺が基本のようである。

堀内の土層は、その堆積状況から時間差が認められる。その1は、堀底にやや固質な暗褐色土、砂が存在した時期で、城が機能していた時期で堀底と推定される部分である。その2は、堀底の土層上に柔軟な土層が堆積している時期で、廃城となり埋められた時期である。この上面に、堀2とはほぼ同様の土層で固質な土層である。この土層は、堀を埋め歩み固めた時期でその3に相当する。この時期としては、出土した五輪塔から16世紀後半初頭頃と推定される。その4が、粘土質の黒色土、褐色土が堆積した時期で、当城跡が最終的に廃城となった時期であり、この3・4間に虎口1が所在する。

以上の事から、堀は3回に分けて埋められており、この埋められた事が当城跡の廃城期を示していることに推定される。

4) IIノ郭斜面構築 (盛土、図版13)

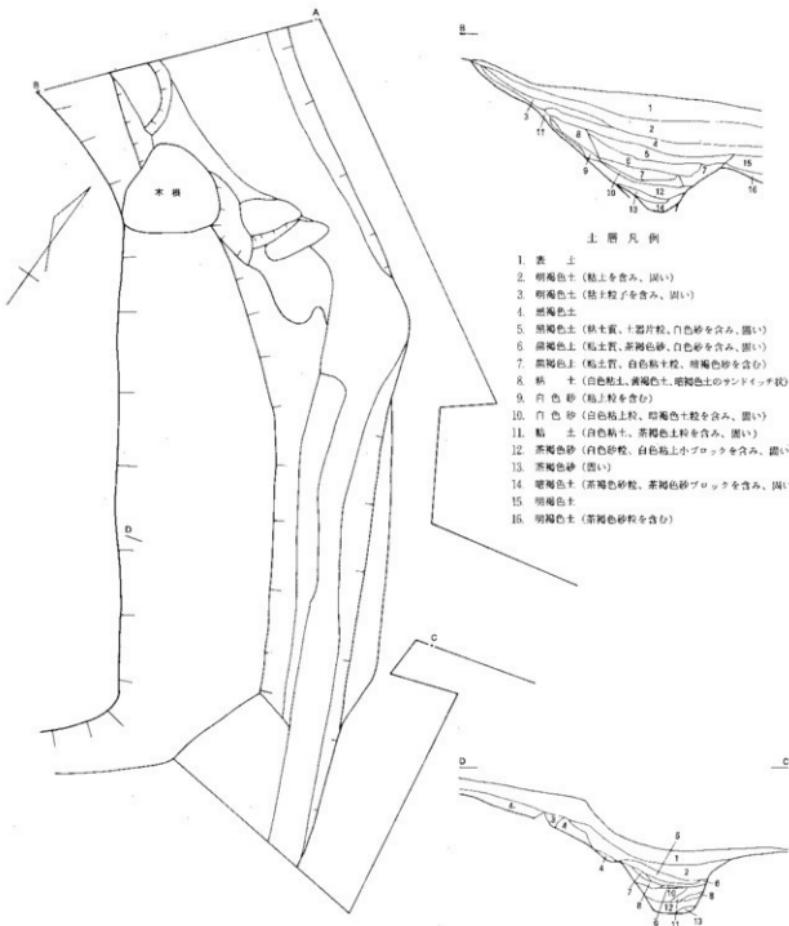
IIノ郭の斜面構築(盛土)は、IIノ郭北側と西側、南西部で確認されたが、南側では確認されていない。盛土の長さと厚さは、場所により多少差が認められる。北側では、長さ4.0～6.0mで厚さ0.50～0.60mの規模を有している。北西部では、長さ11.0mで厚さ0.70m程度を計測する。西側では、7.50m～9.50mの長さで、厚さは1.20m程度を計測する。このように、北側より西側が長く厚く盛土されている。これは、北側より西側の斜面が長い事に帰因する事である。南西部も、西側と類似した状況を呈している。上面は、西側が比較的平坦面を形成しているが、土壘としたものかは確定出来ない。

盛土の土層は、砂や粘土を含む暗褐色土、黄褐色土、茶褐色砂、白色粘土等が、斜面下の方へ順次盛土されている。土質は、良くしまった固質な土層である。

5) 虎 口 (第30・31図、図版12)

虎口は、主郭部(Iノ郭)北東部で主郭部(Iノ郭)とIIノ郭間に所在し、土橋として確認された虎口(虎口2)と、堀を埋めてから粘土を用いて構築した虎口(虎口1)とがある。虎口1は、IIノ郭堀を埋めてからの再利であり、虎口2はIIノ郭堀を北東部で掘り残して土橋とした虎口である。

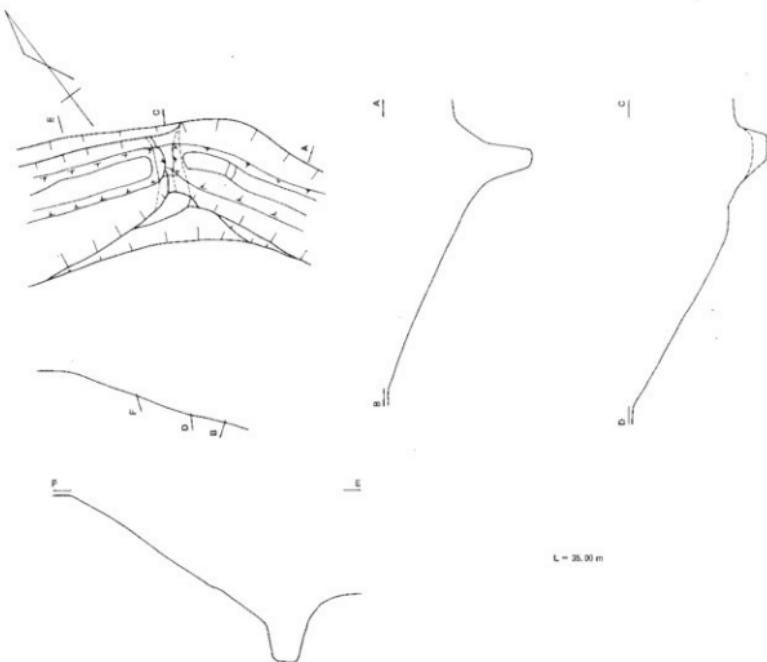
虎口1は、主郭部(Iノ郭)北東部で1T中央西側で確認された。堀が、第12層の固質な茶褐色砂まで埋められてから、南壁(主郭部北側斜面)に粘土(第8層)、白色砂(第9層)、粘土(第11層)を用いて、階段状に構築している。構築部分は、堀が南西方向にかけて緩やかに曲がる部分から1Tと2T間付近までで、長さは約5.50m程度である。最下段は、堀の南壁中段で主郭部より1.80m程度下位に位置しており、白色粘土と黄褐色粘土を用いて厚さ0.30mに敷きつめている。幅は、1.20m×0.90mである。ここから、緩やかに上昇しながら中段に到る。中段は、主郭部より1.20m程度下位で第8層の粘土を、長さ約1.80m、幅0.70m、高さ0.50m程度に固く敷いている。この上面が、主郭部となる。また堀内南側には、幅0.15～0.60mで東側から中央まで固質な道路状の部分があり、東側よりの進入路であった可能性を有している。この虎口は、当城が一度廃城になってから再利用された時



土層凡例

- | | |
|----------------------|--------------------------|
| 1. 表上 | 8. 明褐色土 (砂、粘土粒を含む) |
| 2. 黒色土 (砂、粘土粒を含む) | 9. 明褐色土 (砂、粘土粒を含み、固い) |
| 3. 黑色土 (砂粒を含む) | 10. 白砂、白色粘土ブロック (砂主体で固い) |
| 4. 黄白色粘土ブロック | 11. 白色粘土ブロック、砂 (粘土主体で固い) |
| 5. 明褐色土 (白色粘土、砂粒を含む) | 12. 粘土、砂 (同じ割合で固い) |
| 6. 白色粘土 | 13. 茶褐色砂 (粘土ブロックを含む) |
| 7. 明褐色土 (粘土粒、砂粒を含む) | |

第30図 虎口(IIノ郭)実測図1 ($1/100$) L = 35.00 m



第31図 虎口(IIノ郭)実測図2(1/100)

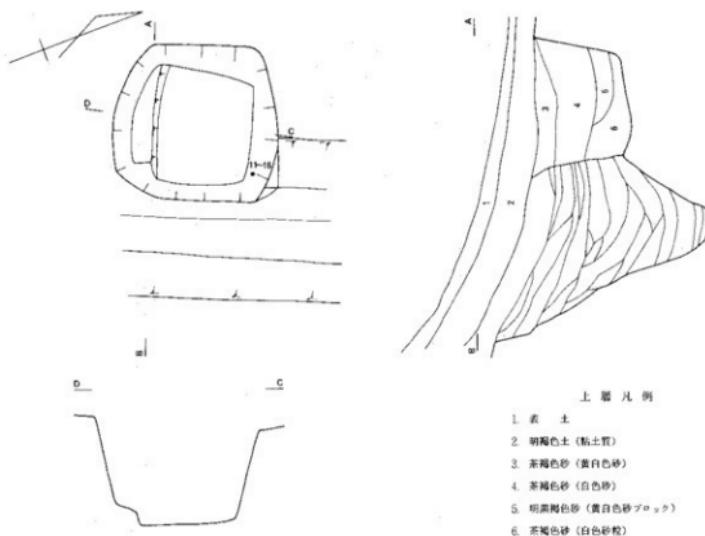
の虎口と判断される。時期的には、16世紀後半と推定される。(第30図)

虎口2は、IIノ郭堀を掘り残して土橋としており、IIノ郭西側に位置する。土橋は、幅0.35m、長さ0.95mで堀北側からは0.70m下位に相当するが、上面と幅は崩れている。本来の土橋は、幅約1.00m、長さ約2.40m程度の規模で、堀北側から0.40m程度の下位面に位置していたものと判断される。堀底面との差は、0.43m～0.73m程度で上面は比較的平坦面となっているが、北壁と南壁が中央部より0.04m程度高くなっている。本虎口は、当城築城時の虎口であり、時期的には15世紀後半～16世紀前半に相定される。(第31図)

なお、本虎口に関する門等の造構を確定することは出来なかった。

6) IIノ郭土壤 (第9号土壤、第32図、図版14)

IIノ郭で確認された土壤としては、西側中央部で堀を掘り切っている第9号土壤がある。本土壤は東西径1.25m、南北径1.34m、深さ0.74mで、N-23°-Eに方位を有し隅丸方形状を呈している。



第32図 土壌（第9号土壤）実測図1 ($1/40$) L = 33.50 m

土壤の底面は、南側に一段のテラスを造り出している。底面は、ほぼ平坦で壁付近は丸味を有している。底面とテラスは、0.11mの差を有している。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。出土遺物としては、北東部より6枚の古銭が重なって出土している。このことから、本土壤は墓壙と判断される。土壤内の土層は、堀を掘り切っていることと、砂層中に掘り込まれているため、砂や粘土が混在する土層となっている。出土遺物については、後述する。

7) 城跡出土遺物 (第33～38図、第9、10表、図版22・23)

今までには、城跡関係の遺構について記述して来た。本項では、城跡関係の諸遺構より出土した遺物について記述するが、なかにはT調査時に出土した土師器、土玉等も含んでいる。出土遺物については、第33～37図と第9、10表に示した。

第33図A1は、主郭（1ノ郭）南西部より出土したおろし皿片である。体部下半の破片で、淡緑色の薄い釉が体部上半に施釉されている。A2は、A1同様南西部より出土したおろし皿底部片である。体部下端には、一部自然釉が認められる。A3は、1T東側より破片の状態で出土した内耳土器で、接合資料である。口縁部は、やや湾曲しており、耳は1ヶ所欠損しているが3ヶ所のようである。A4は、1T東側より出土内耳土器で体部下半を欠損している。口縁部は、湾曲している。A5は、南東部の28Tより出土したカワラケである。体部は、内外面とも著しく磨滅しており、整型は不明である。底部は、回転ヘラ削りにより削り出されている。口唇部は、やや丸味を有している。A6は、



1

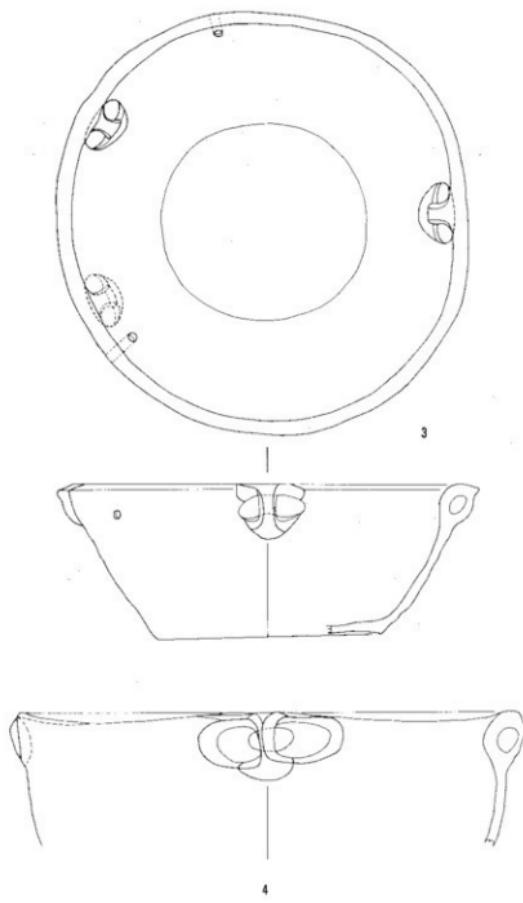


2

第33図 中世出土遺物 1 (1/2)

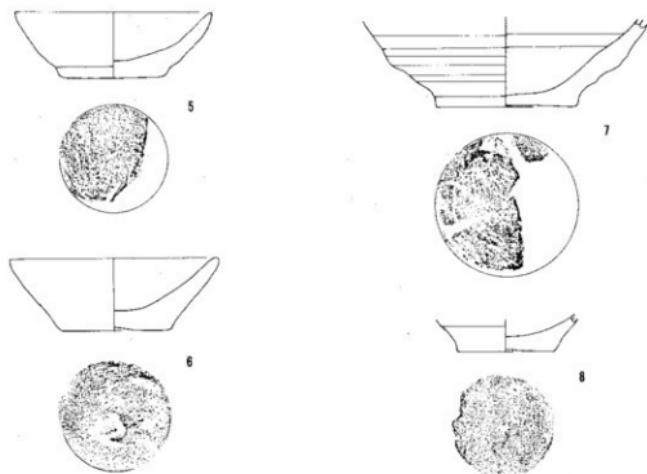
第9表 城跡出土遺物一覧表1

No.	名 称	出土 レーベル (cm)	法、量 (cm)				胎 土	焼成	色 調	器型・整型の特徴	出土 地點
			口径	底径	現高	腹径					
1	おろし皿	+ 5			2.1		明褐色	良好	淡緑色	体部上半は回転ヘラ切り、ヘラナデ後施釉。体部下半は露胎、釉は薄い。	主郭部 南西
2	おろし皿	+ 7		8.0	1.3		灰褐色	良好	灰褐色	底部は、回転糸切りで、体部は回転ヘラナデ、下端ヘラナデ。	主郭部 南西
3	内耳土器	+82	34.5 × 33.5	16.4 × 16.9	12.1 × 12.6		雲母・長石・砂、荒い	良好	表黑色 内 明茶褐色	耳は2ヶ所で、体部下半を欠く。 口唇内面は、ヘラナデ。体部は荒いヘラナデ。	IIノ郭 1T
4	内耳土器	+82	40.6		10.8		長石・石英、荒い	良好	明茶褐色	耳は2ヶ所で、体部下半を欠く。 口唇内面は、ヘラナデ。体部は荒いヘラナデ。	IIノ郭 1T
5	カワラケ		8.0	4.4	2.7		長石・石英・小石、荒い	良好	暗茶褐色	体部上半1/4程度欠損。体部下端を削り、底部回転ヘラ切り、トス開口部へラ切り、ヘラナデ。	2B T 中央
6	カワラケ		8.5	4.7	2.9		小石・石英・長石、荒い	良好	明褐色	体部を1/2程度欠損、表内著しく磨滅。底部は回転ヘラ切りヘラナデか	IIノ郭 9T
7	カワラケ			5.8	3.7		小石・石英・長石・砂、荒い	良好	暗褐色	体部上半1/4程度欠損。体部回転ヘラ切り、トス開口部へラ切りヘラナデか	第9号 土壤内
8	カワラケ			4.0	1.5		小石・石英・砂、荒い	良好	橙褐色	体部上半を欠く、体部は著しく磨滅、底部は同軸ヘラ切り、ヘラナデか	IIノ郭 17T
9	石臼片	+1.00	径 12.5 × 9.5		8.5					凝灰岩質で、9本の溝を認める。 突手孔は深さ3.9cm有、1.4~1.5cm程度の破片	IIノ郭 2T
10	五輪塔空風輪	+60	長 25.0	空長 10.3	風長 12.0	差込 部 0.8				砂岩質の空風輪で、全体に過半化している。	IIノ郭 5T
11	古 銭	+ 7	径 2.4	孔 0.7	重 3.1g					永楽通宝	第9号 土壤
12	古 銭	+ 7	径 3.4	孔 0.7	重 3.2g					永楽通宝	第9号 土壤
13	古 銭	+ 7	径 2.4	孔 0.7	重 3.0g					淳化元宝	第9号 土壤
14	古 銭	+ 7	径 2.3	孔 0.7	重 3.4g					開元通宝	第9号 土壤
15	古 銭	+ 7	径 2.2	孔 0.8	重 1.4g					大觀通宝	第9号 土壤
16	古 銭	+ 7	径 2.5	孔 0.7	重 2.2g					開元通宝	第9号 土壤
17	古 銭	+ 5	径 2.1	孔 0.9	重 2.1g					開元通宝	Iノ郭 北側
18	土 玉		径 2.6 × 3.1		2.5	重 20.9	砂、荒い	良好	茶褐色	孔径6.8cm×0.7cm 一部欠損。底足よりの流入か	2B T 東側
19	土 玉		径 3.6 × 3.4		3.1	重 35.9	砂、荒い	普通	茶褐色	孔径6.8cmで、 底足よりの流入か	2B T 東側



第34図 中世出土遺物2 (1/2)

Tより出土したカワラケである。体部は、M5と異なり直線的に外傾しており、整型は内外とも著しく磨滅しているため不明である。底部の削り出しが、見られない。M7は、第9号土壙より出土したカワラケである。体部上半を欠損し、体部には回転ヘラ削り痕を明瞭に残しており底部は、内面中央部と外面が削り出されている。M8は、南側の17Tより出土したカワラケでM6と類似した器型である。整型は、内外とも著しく磨滅しているため不明である。M9は、2Tより出土した白片である。推定上面径は、約17cm程度と小型の石臼である。M10は、5Tより出土した砂岩質の五輪塔空風

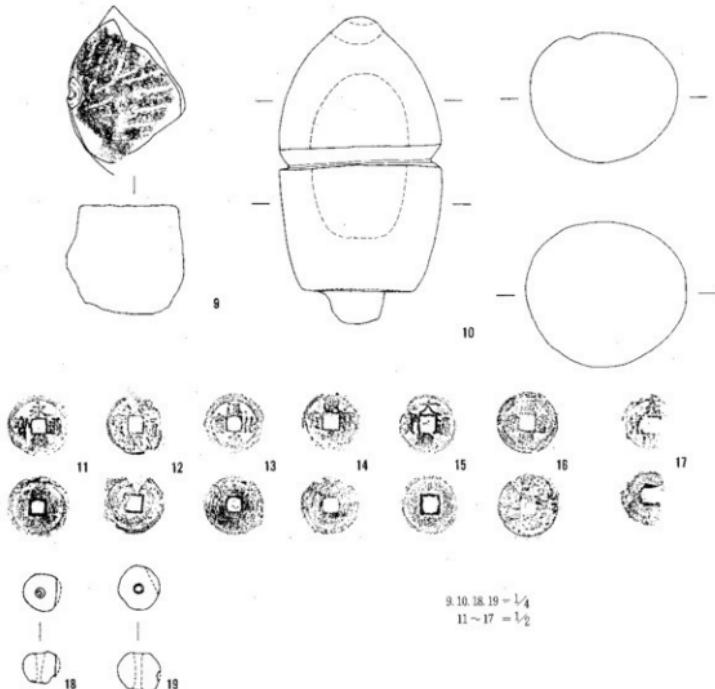


第35図 中世出土遺物3 (1/2)

輪で、各輪とも遍平化しており宝珠は、型式化している。 $\#11 \sim 17$ までは古銭で、 $\#11 \sim 16$ までの6枚がⅡノ郭第9号上壙内（底面上7cmより出土）より出土し、 $\#17$ は主郭部（Ⅰノ郭）北側より出土している。銭銘は、永楽銭（ $\#11 \cdot 12$ ）、淳化元宝（ $\#13$ ）、大觀通宝（ $\#15$ ）、開元通宝（ $\#16$ ）、開元園寶（ $\#17$ ）である。 $\#18 \cdot 19$ は、28T東側より出土した土玉である。

第37図 $\#20 \sim 26$ は、井戸1からの出土遺物である。出土層位は、上層（第1～3層中）と中位層からの出土であるが、上位層で中央東側に集中している。出土状況は、東側からの投入である。 $\#20$ は、底面から172cmの所で出土した土師器碗型土器で、内外面とも著しく磨滅している。 $\#21$ は土師器高台付坏の高台片で、底面上167cmの所から出土している。脚先端は、ヘラ削り、ヘラナデであるが体部は、著しく磨滅している。 $\#22$ は、底面上76cmの所より出土した須恵器短頸瓶体部片である。しっかりした胎土で、体部上半に自然釉を有している。 $\#23$ は、底面上178cmの所より出土した土師器坏で、口縁部～底部まで $1/4$ 程度の破片である。体部上半は、回転ヘラナデで下半は手持ちヘラ削りのようであるが、体部は内外面磨滅している。底面は、回転ヘラ切り、ヘラ削りのようである。 $\#24$ は、底面上165cmの所より出土した土師器甕片で $1/4$ 程度の破片である。全体的に磨滅しているが、整型は横位ヘラナデと荒いヘラナデである。 $\#25$ は、砂岩質の砥石で底面上169cmの所より出土している。上面と、右側面、先端に使用痕を有している。 $\#26$ は、井戸上面（床面上197cm）の所より出土した石捧片で、上下両側面と一面に敲痕を有している。

第38図は、各Tや主郭部（Ⅰノ郭）より出土した一括資料である。 $\#27$ は、Ⅱノ郭18Tより出土



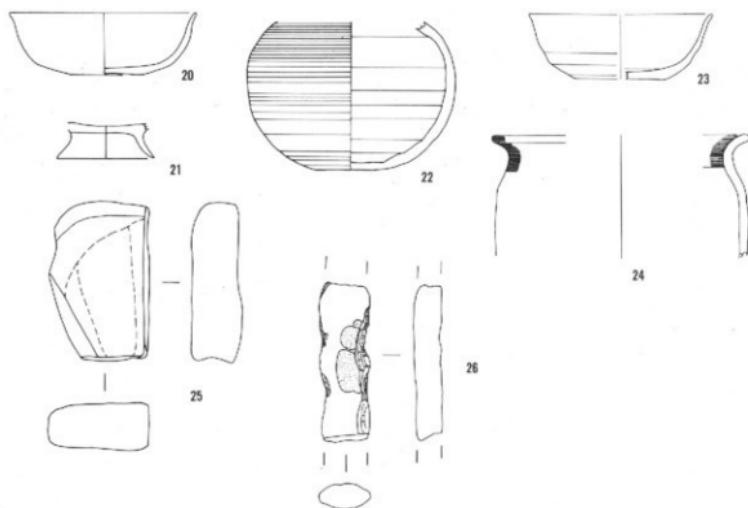
第36図 中世出土遺物 4

した土師器坏片で、 $\frac{1}{4}$ 程度の破片である。陵は、低く丸味を有している。 $\#28$ は、Ⅱノ郭18Tより出土した須恵器坏片で、体部から底部にかけて $\frac{1}{4} \sim \frac{1}{5}$ 程度遺存している。全面著しく磨滅しているため、整型は体部下端以外不明である。 $\#29 \sim 32$ は、土玉である。 $\#29$ は、28Tより出土し $\#30$ は主郭部北側からの出土である。 $\#31$ 、 32 は、主郭部北側よりの出土である。 $\#32$ は、Ⅱノ郭9Tより出土したスラグである。 $\#34 \sim 38$ は、鶴文時代の敲石である。 $\#34$ は、Ⅱノ郭2Tより出土した砂岩質の敲石で、一部を欠損している。 $\#35$ は、Ⅱノ郭7Tより出土した砂岩質の敲石で $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。 $\#36$ は、Ⅱノ郭9Tより出土した砂岩質の敲石で胴側面に使用痕を有している。 $\#37$ 、 38 は、主郭部東側より出土した砂岩質の敲石である。

以上が、城跡関係の出土遺物である。このように、中世品の出土量はきわめて少量である。このことは、本城跡の性格を示している点でもある。

第10表 城跡出土遺物一覧表2

名 称	出士 レベル (cm)	法 量 (cm)				胎 土	焼 成	色 調	器型、整型の特徴	備 考
		口 径	底 径	現 高	陵 径					
20 土師器碗	+172	152	5.8	5.0		小石、石英、長石、雲母、荒い	良好	暗褐色	口縁～体部下半まで一部黒、内外面著しく磨滅し不明。井戸1出土	表面一部赤褐色
21 土師器台	+167			2.9		石英、雲母、長石、荒い	良好	明褐色	内外面磨滅していながら、箇位へラナデが井戸1出土	1/2程度残
22 須恵器短頸甌	+76		4.5	12.1		灰褐色 小石含	良好	灰褐色	体部は回転ヘラ削り、体部下半部へラナデ回転ヘラ切り・ヘラナデ井戸1出土	体部1/2程度残
23 上師器坏	+178	15.0	7.2	5.3		石英、長石、荒い	良好	茶褐色	体部上半回転ヘラナデ、下半部は手持ちヘラナデ、ラブリーフ底面回転ヘラナデ	体部1/2程度残井戸1出土
24 土師器甌	+165	11.0		9.8		細粒子 緻密	良好	赤褐色	1/4程度残、頸部以上焼失、体部は荒いヘラナデ、井戸1出土	
25 磁石	+169	長 129 幅 8.1 厚 3.7			重 650g	石質 砂岩			上面、右側面、先端に使用痕。他は自然面で下端欠損井戸1出土	
26 石棒	+195	長 129 幅 4.0 厚 2.0			重 185g	石質 雲母片岩			両先端を欠損しており、上下両側面には酸による剥離有井戸1出土	
27 土師器片		15.0		3.5	14.6	長石、石英砂、荒い	良好	暗褐色	口縁部は横位ヘラナデ、体部はヘラ削り、ヘラナデは丸味有す。	Ⅱノ郭 18 T
28 須恵器片		12.6	9.0	4.0		小石、長石砂	良好	明灰褐色	内・外面著しく磨滅し整型不明、体部下端は手持ちヘラ削り有	Ⅱノ郭 18 T
29 土玉	径 4.2 × 3.9			3.7	重 20g	小石、石英荒い	良好	暗褐色	孔径 1.2cm × 1.0cm 完型品	28 T 西側
30 土玉	径 3.6 × 3.5			3.0	重 35g	小石、砂 荒い	普通	暗褐色	孔径 0.8cm 完型品	主郭部
31 土玉	径 3.6 × 3.5			3.2	重 35g	砂 荒い	良好	暗茶褐色	孔径 1.0cm 完型品	主郭部
32 土玉	径 2.8 × 2.8			1.9	重 75g	砂 荒い	良好	暗茶褐色	孔径 0.9cm 完型品	主郭部
33 スラグ	径 9.0 × 5.1			2.1	重 150g					9 T
34 敲石	長 118 幅 7.7 厚 5.4				重 720g	石質 砂岩			上面一部欠損、上面中央と右側面に使用痕を有す	2 T
35 敲石	長 72 幅 10.0 厚 5.2				重 440g	石質 砂岩			中央以下を欠損し、側面に使用痕を有す。上下端は自然面	7 T
36 敲石	長 118 幅 5.9 厚 3.3				重 380g	石質 砂岩			上面は自然面で、両先端と両側面に使用痕を有す	9 T
37 敲石	長 7.6 幅 5.2 厚 4.7				重 260g	石質 安山岩			上下面是自然面で、両先端と両側面に使用痕を有す	主郭部
38 敲石	長 8.8 幅 5.7 厚 3.3				重 260g	石質 砂岩			上下面是自然面で、右側面は自然面左側面に使用痕を有す	主郭部



第37図 主郭部（Iノ郭）井戸出土遺物（ $1/4$ ）

2. 中世以前の遺構と遺物

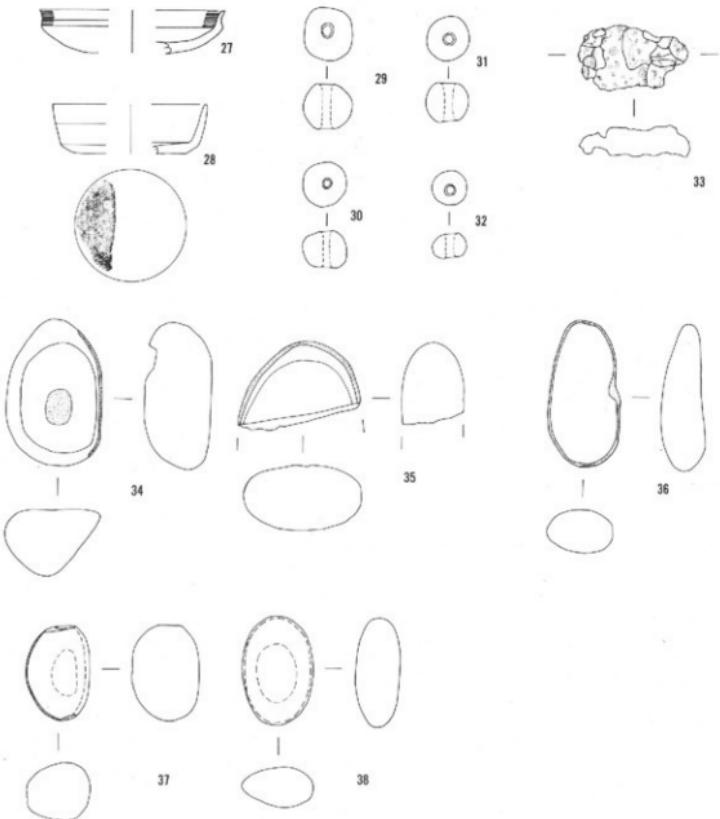
中世以前の遺構としては、堅穴住居址、溝、土壤がある。以下に、住居址より遺物と共に順次記述していく。これらの遺構は、主郭部（Iノ郭）に集中している。

1) 住居址

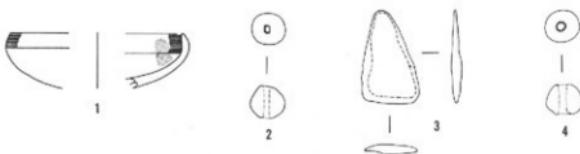
第1号住居址（第39、40図、第11表、図版15・24）

本住居址は、主郭部の北西部で9T東側土塁下で確認された住居址で、築城時に上面の大部分と西側は築城時に破壊され、南側は確認調査時に消失している。また、カマドを有する住居址（第1号住）と、これの外側に1住居址所在するようであるが、住居址であるかは確定出来ない。

本住居址の規模は、東西径3.00m、南北径3.00m、深さ0.08mで、N-81°-Eに方位を有し正方形形状を呈している。底面は、全体に柔弱な貼床で壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は、掘り込まれていない。柱穴は、2本確認されたもののP1は0.62mと比較的深い掘り込みであるが、P2は0.05mと浅い掘り込みである。P2の南側に、2ヶ所の焼土域が所在している。焼土域は、上面が貼床状にしまっており、厚さ0.05m程度であり、本址の規模から本址外側の遺構に結び付くようである。カマドは、東壁中央部に位置している。



第38図 城址出土遺物 (1/4)



第39図 第1号住居址実測図 (平面 $1/50$ カマド $1/25$ L = 35.00 m)

第11表 第1号住居址出土遺物一覧表

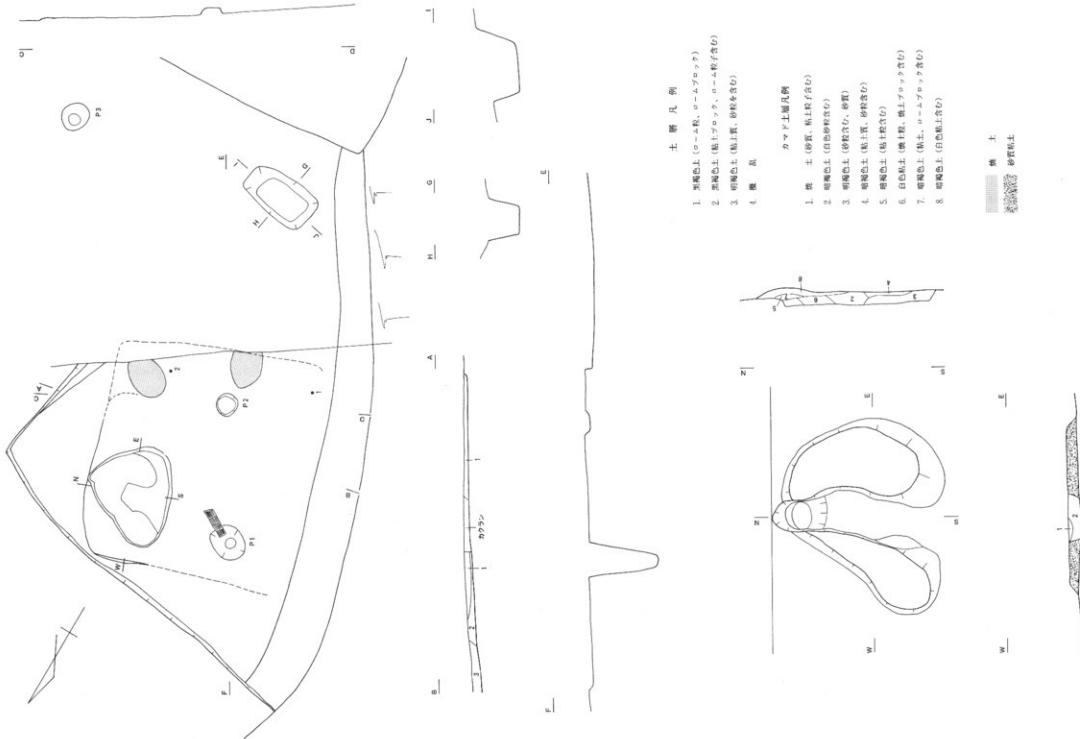
No.	名 称	出 土 レベ ル (cm)	法 量 (cm)				胎 土	焼 成	色 調	器型、整型の特徴	備 考	
			口 径	底 径	現 高	腰 径						
1	土師器 坏	+ 8	14.0		4.5		雲母、長石、 石英、普	良好	暗褐 色	最大径 15.0cm、口縁部は横部へラナデ、 体部はハラ崩り、 ヘラナデ、内面煤 付着	1/4程度 残存	
2	土 玉	+ 8	径 2.5 × 2.8		厚 2.3		重 20g	砂、荒い	良好	暗褐 色	孔径 0.8×0.8 cm	
3	石 斧		長 7.1	4.6	0.8		重 25g	石質 雲母片岩			上下両面は自然面 で刃部は良磨かれ ている	一括資 料
4	土 玉		径 2.6 × 2.7		2.6		重 25g	砂、普通	良好	暗茶褐色	孔径 0.7×0.4 cm	一括資 料

カマドは、東壁中央部に位置し長さ 1.09m、幅 1.30m、高さ 0.08m を計測する。燃焼部は、第4層の暗褐色土がこれに相当するものと推定されるが、焼土層は確認出来なかった。燃焼部は住居址床面とほぼ同レベルである。煙道部は、燃焼部と同一面から先端部で 0.04m 程度掘り下げられてから斜めに立ち上がり、先端は東壁と同一面である。煙道部には、暗褐色土（第8層）が堆積している。壁は白色砂質粘土を用いている。なお、カマドの上面に焼土の堆積が一部見られる。

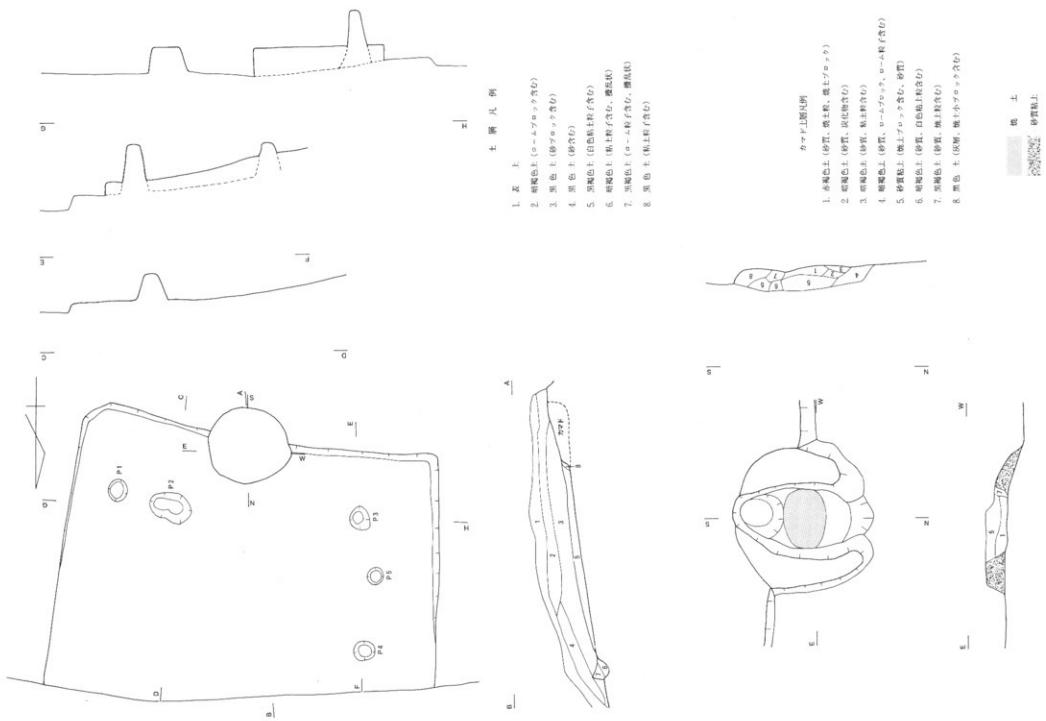
出土遺物としては、きわめて少量で土師器片、土玉、石器等が少量出土した程度である。No.1は、土師器片で $\frac{1}{4}$ 程度の破片である。器面には、一部煤が付着している。No.2は、土玉の完型品である。No.3・4は、覆土内出土の一括資料である。No.3は、土玉であり No.4は、雲母片岩質の石斧で刃部は良く砥磨されている。出土レベルは、No.1と2が床面上 8cm の所より出土している。また、P 1 の中央部から東側にかけて長さ 0.40m、幅 0.12m、厚さ 0.07m の炭化物が、床面上 5cm の所に所在している。

本址の土層は、黒褐色土と明褐色土が堆積しており、黒褐色土が 2 層に細分される。また、第3層の明褐色土は粘土質で、一部擾乱を受けている。

外側の遺構は、前述 2ヶ所の焼土域と南側の貯蔵穴を併なっている部分で、規模は東西径 4.00m 以上、南北径 5.70m 程度で、深さは 0.08m を計測する。床面は、柔弱な直床となっており壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。カマドと柱穴は、確認出来なかった。P 3 は、本址以外の柱穴である。貯蔵穴は、南側（南壁付近）に位置し東西径 1.00m、南北径 0.58m、深さ 0.50m を計測し、隅丸長方形を



第40図 第1号住居址出土遺物 ($1/4$)



第41図 第2号住居址実測図 (平面 $1/50$ カマド $1/25$ L = 35.00 m)

呈している。貯蔵穴の底面は、斜めになっているが平坦で壁は、東壁が斜めに掘り込まれている以外ほぼ垂直に掘り込まれている。貯蔵穴内には、明黒褐色土と黒色土が堆積している。遺物は、何ら出土しなかった。

第2号住居址（第41図、図版15）

本住居址は、主郭部の北西部で6T南側で確認された。北側と上面の一部は、築城時に破壊されている。規模は、東西径5.00m、南北径3.55m、深さ0.20mでE-87°-Sに方位を有し、長方形状をなしている。床面は、柔弱な直床で壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は、南側でこれに相当する部分（第6、7層）を確認したが、擾乱（木根）を受けたようであるため確定出来ない。他の部分で、壁溝は確認出来なかった。柱穴は、全部で5本（P1～5）確認されたが、P1、3～5の4柱穴と判断される。P2は、本址以外の柱穴と判断される。柱穴の深さは、P1が12cm、P3が48cm、P4が11cm、P5が17cmとP3以外比較的浅い柱穴である。カマドは、東壁中央部に位置している。

カマドは、東壁中央部に位置し長さ0.93m、幅0.96m、高さ0.13mを計測する。燃焼部は、カマドの中央部で床面より0.03m程度下がっており、赤褐色土（第1層）が堆積しているが、下位はあまり分解していない。燃焼部下位面は、カマドの手前から燃焼部先端まで緩やかに立ち上がっている。煙道部は、燃焼部先端より0.03m程度落ち込んでから斜めに立ち上がっており、住居址東壁から0.35m東方に煙道部先端がある。煙道部には、黒褐色土（第7層）と黒色土（第8層）が堆積している。

出土遺物としては、土器類坏片、甕片、須恵器坏片、坏蓋片などが出土しているものの、全て小破片で図示可能な遺物は出土しなかった。

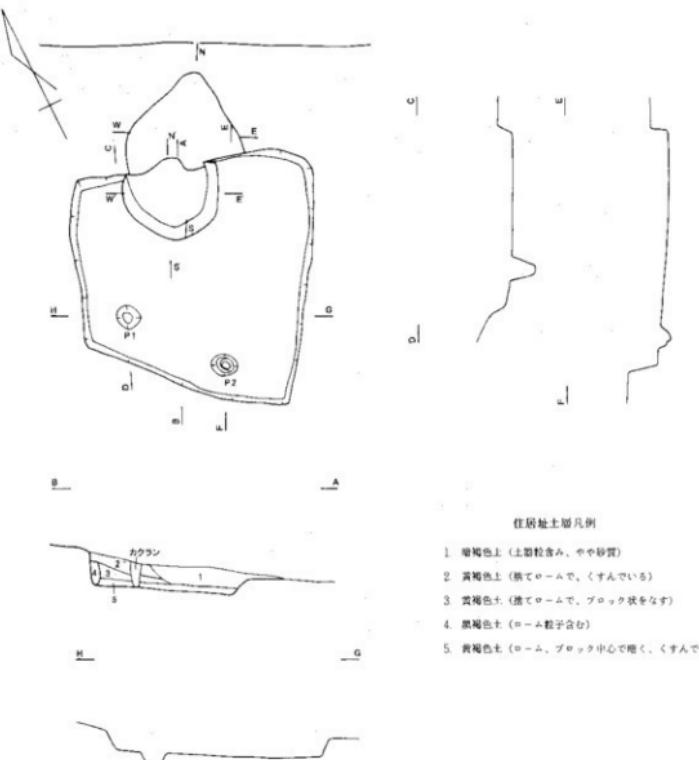
本址の土層は、住居址内に黒色土（第3層）と黒褐色土（第5層）が堆積し、壁溝状の部分に暗褐色土（第6層）、黒褐色土（第7層）が堆積している。第3層上面は、中世城跡の土壘に相当する部分である。

なお、本住居址の床面は北方にかけて下降している。これは、本住居址が北側端部に位置するためと判断される。

第3号住居址（第42～44図、第12表、図版15・21・24）

本住居址は、主郭部の北西部に位置している。規模は、東西径2.47m、南北径2.46m、深さ0.44mで、N-25°-Eに方位を有し不整方形状を呈している。床面は、柔弱な直床で北壁にかけ緩やかに下降している。壁溝は、掘り込まれておらず壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。柱穴は、住居址の南側で2本（P1、2）確認されたのみである。柱穴の深さは、P1が26cmでP2は13cmの深さを有している。カマドは、北壁中央部で新旧が認められるが、新カマドは右袖が消失している。

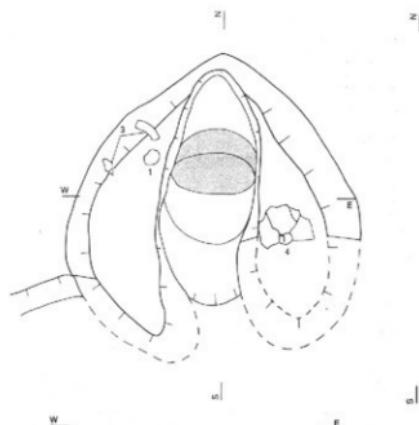
新カマドは、北壁中央やや東側に位置し長さ1.53m、幅1.49m、高さ0.18mを計測する。燃焼部はカマドの中央部に位置し床面より0.08m程度下がっている。燃焼部には、赤褐色土（第1層）が堆積しているが、下位はあまり焼けていない。燃焼部の手前（南側）には、暗褐色土（第6層）が堆積し焚口部の一部と判断される。煙道部は、住居址の床面と同一レベルで赤褐色土（第9層）が堆積しており、先端部は住居址の北壁より0.80m程突出している。壁は、砂質粘土を用いて構築している。



第42図 第3号住居址実測図（平面 $1/50$ L = 35.00 m）

旧カマドは、北壁中央部に位置し長さ 0.81 m、幅 1.00 m、高さ 0.20 m を計測する。燃焼部は、カマドの中央部付近で暗褐色土（第2層）堆積しているが、下位に暗褐色土（第3層）を敷き火床面としている。火床面は、0.03～0.07 m の厚さを有している。煙道部は、燃焼部と同一面で壁は斜めに立ち上がっている。煙道部先端は、住居址北壁より 0.08 m 程度突出している。壁は、砂質粘土を用いて構築している。

出土遺物としては、住居址内より土師壺と甕の小破片と土玉が出土し、新カマドからは壺、甕、鉢（土器器）などが出土しており、図示出来たのは第44図に示した9点のみである。 $\wedge 1$ は、土師器壺でカワラケ質で $\frac{1}{2}$ 程度の破片であり、新カマド左袖上面より出土している。 $\wedge 2$ は、 $\wedge 1$ と同様の壺で新カマド内より出土している。 $\frac{1}{2}$ 程度の破片で、内外面とも磨滅している。 $\wedge 3$ は、土器器鉢型製



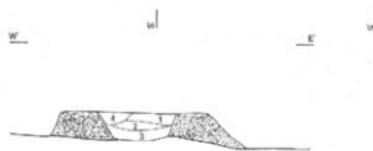
土層凡例

1. 赤褐色土（燒土粒、粘土粒）
2. 黒褐色土（燒土粒子含みでくすんでいる）
3. 黄褐色土（砂質粘土粒含、天井部）
4. 黑褐色土（燒土粒子含）
5. 赤褐色土（くすんでいる、燒土粒子含む）
6. 黑褐色土（焼土粒子含む）
7. 黑褐色土（砂質、火力の為やや赤褐色化）
8. 砂質粘土（重かしい）
9. 赤褐色土（くすんでいる、燒土粒含、煙道部）



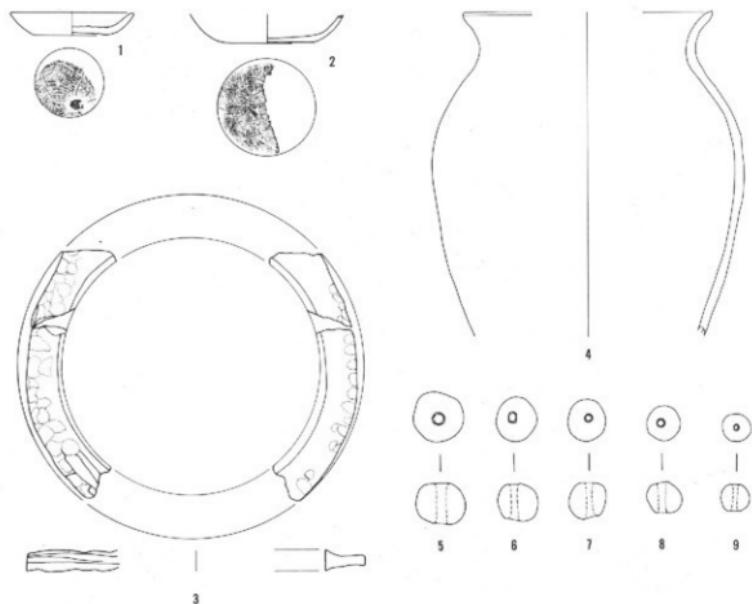
カマド土層凡例

1. 赤褐色土（砂質、天井の飛けたもの）
2. 黑褐色土（燒土粒含む）
3. 黑褐色土（ロームブロック含む）
4. 黄褐色土（砂質、天井部）
5. 黑褐色土（固くしまるロームブロック含む）
6. 黑褐色土（砂質ローム粒含む）



■ 植 土
□ 沙質粘土

第43図 第3号住居址カマド実測図（カマド1/20 L = 34.50 m）



第44図 第3号住居址出土遺物 (1/4)

第12表 第3号住居址出土遺物一覧表

No.	名 称	出 土 レベル (cm)	法 量 (cm)				胎 土	焼 成	色 調	器型、整型の特徴	備 考
			口 径	底 径	現 高	腹 径					
1	土師器 环		10.0	5.5	1.8		長石、雲母 荒い	良好	暗褐 色	内外とも荒いヘラナダ。底面は回転 系切り。カマドの上部に接着。	約4程度 度残
2	土師器 环			7.7	2.3		長石、小石 石英、荒い	良好	暗褐 色	内外とも著しく磨 滅している。2程度 度残。カマド内出 土。	
3	土師器 环	内径 27.4	外径 21.0	1.7 × 0.8			長石、雲母 普通	良好	暗褐 色	上面は、ヘラナダ 側面は、ヘラ切り、 カマド左袖内出土。	2程度 度残
4	土師器 甕		20.0		26.4		長石、石英 荒い	良好	暗褐 色	内外とも著しく磨 滅。2程度残 カマド右袖内出土。	
5	土 玉	縦 4.0 × 4.0		3.3		重 50g	長石、石英 荒い	良好	暗茶褐色	孔径 1.0×1.0cm	一括資 料
6	土 玉	縦 6.6 × 3.3		3.0		重 30g	砂、荒い	良好	茶褐 色	孔径 0.9×0.7cm	一括資 料
7	土 玉	縦 3.3 × 3.0		2.9		重 10g	砂、荒い	良好	暗褐 色	孔径 0.7×0.7cm	一括資 料
8	土 玉	縦 2.8 × 2.8		2.6		重 25g	砂、荒い	普通	暗褐 色	孔径 0.7×0.7cm	一括資 料
9	土 玉	縦 2.3 × 2.3		2.1		重 15g	砂、緻密	良好	暗褐 色	孔径 0.6×0.4cm	一括資 料

品と推定される。約程度の破片で、新カマド左袖内より出土している。No.4は、土師器甕で約程度の破片である。新カマド右袖内よりの、出土である。No.5～9までは、本住居址内より出土した土玉で一括資料である。

住居址の土層は、暗褐色土、黄褐色土、黒褐色土が堆積しており、黄褐色土が3層に細分される。これらの土層は、南方より流入した状況を呈している。また、一部木根による擾乱を受けている。

第4号住居址 (第45・46図、第13表、図版15、16、21)

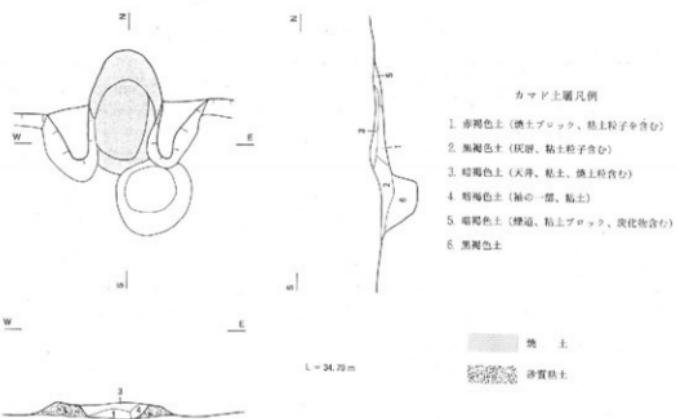
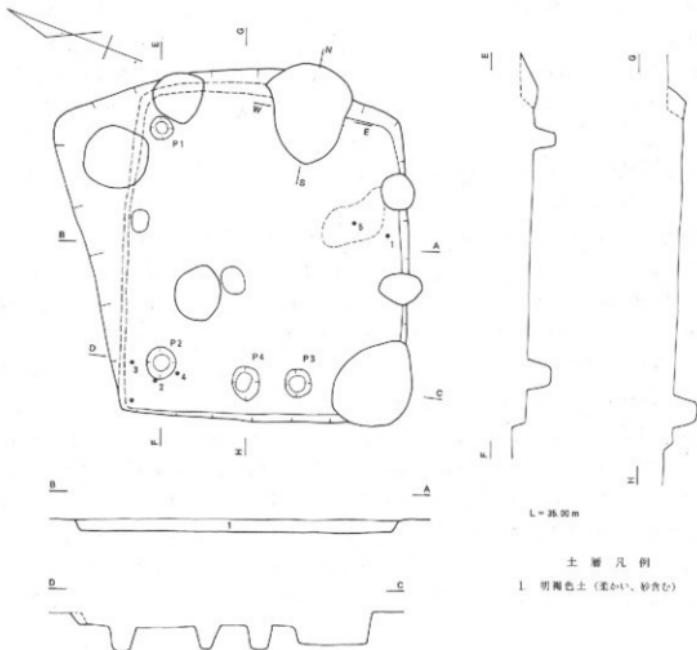
本住居址は、主郭部中央北端に位置し2棟からなる住居址である。他の1棟は、第5号住居址である。本住居址の規模は、東西径2.90m、南北径3.47m、深さ0.14mで、N-67°-Eに方位を有し長方形形状を呈している。底面は、しっかりした直床であり、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は掘り込まれておらず、柱穴は4本(P1～4)確認されたが、北東部の1本は確認出来なかった。カマドは、北壁中央東側に位置している。また、西壁は第5号住居址と重複し築城時の破壊を受けたため確認出来なかった。さらに、第6、7、8号土壤により切られている。

カマドは、北壁中央東側に位置し長さ0.65m、幅0.80m、高さ0.06mを計測する。燃焼部は、カマドの中央北側に位置しているが、燃焼部手前の焚口部が床面より約0.07m度下がっており、これから煙道部にかけて緩やかに立ち上がっており、煙道先端部が住居址床面とはほぼ同一面である。このことから、燃焼部下位は緩やかな斜面となっている。燃焼部には、赤褐色土(第1層)が堆積しており、焚口部には黒褐色土(第2層)が堆積している。煙道部は、燃焼部より緩やかに立ち上がっている。煙道部先端は、住居址北壁から0.27m突出している。煙道部には、暗褐色土(第5層)が堆積している。

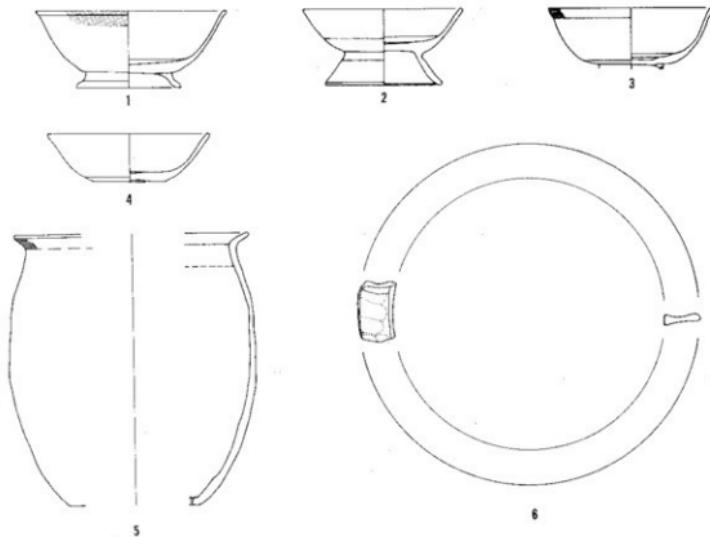
出土遺物としては、土師器高台付环、环、甕等が出土している。出土地点は、カマドの南側と南東

第13表 第4号住居址出土遺物一覧表

No.	名称	出土 レベル (cm)	法量(cm)				胎土	焼成	色調	器型、整型の特徴	備考
			口径	底径	現高	腹径					
1	土師器 高台付环	床直	15.5	7.2	6.2	高台 高 1.2	8.5	緻 密	良好 内)黒 外)暗褐色	体部はヘラナデ、 高台下端回転ヘラ 削り、ヘラナデ。 内部黒色処理、 煤一部有。	口縁 程欠損
2	土師器 高台付环	+6	12.0	6.4	6.1	高台 高 2.7	9.6	小石、長石、 雲母、荒い	良好	茶 褐色	内外とも著しく 磨滅、下端 はヘラ削り、ヘ ラナデ。少程度 残。
3	土師器 高台付环	+4	13.3	5.4	5.0			雲母、長石、 石英、荒い	良好 内)暗褐色 外)赤褐色	表面は回転ヘラ ナデ、ヘラナデ、 下端は手持ちヘラ 削りで2次火災 受けた。	口～体 部程残
4	土師器环	+4	13.0	5.9	3.9			長石、石英、 荒い	良好	茶 褐色	内外とも著しく 磨滅、底面は回 転系切り？約程 度残。
5	土師器甕	+4	19.0 × 18.0	10.5	22.0			雲母、長石、 荒い	良好	暗茶褐色	口縁部は回転ヘ ラナデ？体部は 著しく磨滅、口 ～底部まで約程 度残。
6	土師器甕		内径 22.0	外径 28.0				荒い	良好	暗茶褐色	表面は手ナデ、 側面はヘラ削り、 下端はナデ。
											一 括 料



第45図 第4号住居址実測図（平面 $1/50$ カマド $1/25$ ）



第46図 第4号住居址出土遺物 (1/4)

コーナー付近に集中している。第46図は、図示出来た本址の出土遺物である。1～3は、土師器高台付壺である。1は、床面接着遺物で2と3は、床面上4～6cmの所より出土している。4は、土師器壺で床面上4cmの所より出土しており、内外面とも著しく磨滅している。5は、土師器壺で床面上4cmの所より出土している。6は、土師器の鉄型土製品の小破片で一括資料である。これらの遺物は、出土レベルから全て本址に結び付く遺物と判断される。

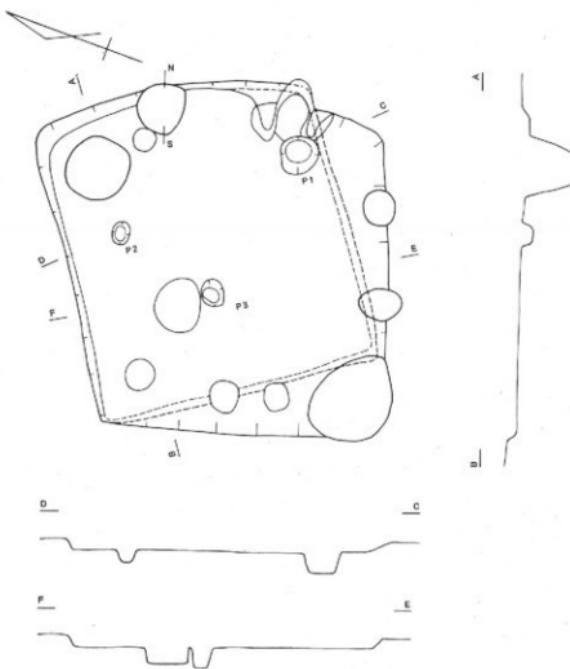
土層は、粘土質の明褐色土が1層堆積しているのみである。

第5号住居址 (第47図、図版16・24)

本住居址は、第4号住居址にその東側を掘り切られた住居址である。規模は、東西径2.88m、南北径3.27m、深さ0.14mを計測し、N-65°-Eに方位を有し長方形形状を呈している。東壁は、第4号住居址により破壊されている。床面は、しっかりした直床で壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は、掘り込まれておらず柱穴は、3本(P1～3)確認されたのみである。カマドは、北壁中央部に位置している。また、2基の土壙とも重複している。

カマドは、北壁中央部に位置しているが、壁と袖は消失しており燃焼部のみが残っている程度である。燃焼部は、長さ0.56m、幅0.36m、深さ0.02mで、赤褐色土が堆積しているものの、下位の粘土面はほとんど分解していない。

出土遺物は、皆無である。



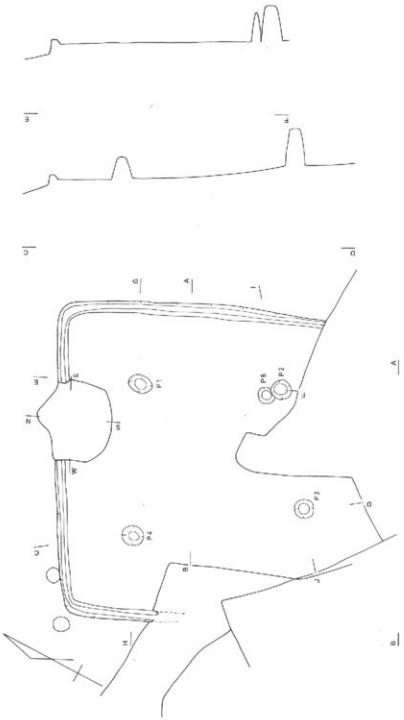
カマド土居凡例

I. 赤褐色土 (燒土粒、燒土ブロック、粘土質)

焼 上

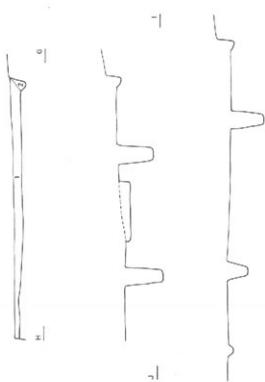


第47図 第5号住居址実測図 (平面 1/50 カマド 1/25 L = 35.00 m)



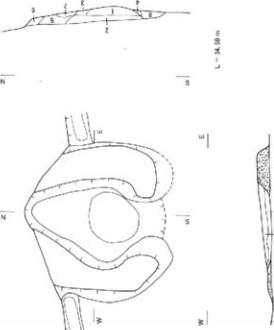
L = 35.00 m

土 壁 壁
1. 砂褐色土 (壁上, 壁下, 地上)
2. 黄褐色土 (壁上, 地上)



カマド土壁凡例
1. 沙褐色土 (壁上, 壁下, フラットセイ)
2. 黄褐色土 (壁上, 黑色板, 壁下小フロッケセイ)
3. 黄褐色土 (壁上セイ)
4. 黄褐色土 (壁上, 壁下, 黑色板)
5. 黄褐色土 (壁上, 壁下, 黑色板)
6. 黄褐色土 (壁上, 黑色板)
7. 白白板土
8. 沙質土 (白色砂, 壁上砂層)

L = 34.00 m



第48図 第6号住居実測図 (平面1/50 カマド1/25)

第6号住居址（第48図、図版16）

本住居址は、主郭部の北東部に位置しており、住居址の南側は耕作擾乱や築城時による破壊のため消失している。規模は、東西径4.20m、南北径4.00m程度、深さ0.15mを計測し、N-30°-Wに方位を有し隅丸長方形状を呈している。床面は、しっかりした直床であり壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は、幅0.17m、深さ0.22mでカマド以外全周していたようである。柱穴は、対角線上に4本（P1～4）とP2の北東部に1本（P5）の、合計5本確認されている。柱穴の深さは、P4が26cmと浅い以外40cm代の深さを有する柱穴である。カマドは、北壁中央東側に位置している。

カマドは、北壁中央東側に位置し長さ0.98m、幅1.00m、高さ0.09mを計測するが、西側は0.03mの高さを計測するのみである。壁は、消失している。燃焼部は、カマドの中央部に位置しており床面より0.02m程度下げている。燃焼部には、赤褐色土（第1層）が堆積しているものの下位の粘土面はあまり焼けていない。燃焼部の南側には、第4層の暗褐色土が堆積していることから焚口部分と推定される。煙道部は、燃焼部から緩やかに立ち上がっており、先端は斜めに立ち上がっている。煙道部の先端は、住居址北壁から0.27m程度突出している。煙道部には、暗褐色土（第4・6層）が堆積し中央部に粘土（第7層）、黒褐色土（第5層）が堆積していることから、煙道部は崩された状況を示している。袖は、砂質粘土を用いているため壁も砂質粘土を用いていたものと推定される。

出土遺物としては、土師器坏小破片と甕小破片が合計5点出土したのみで、図示可能な遺物は出土しなかった。

土層は、壁溝内に粘土粒子を含む暗褐色土と住居址内には、粘土質の明褐色土が堆積している。

第7号住居址（第49図、図版16）

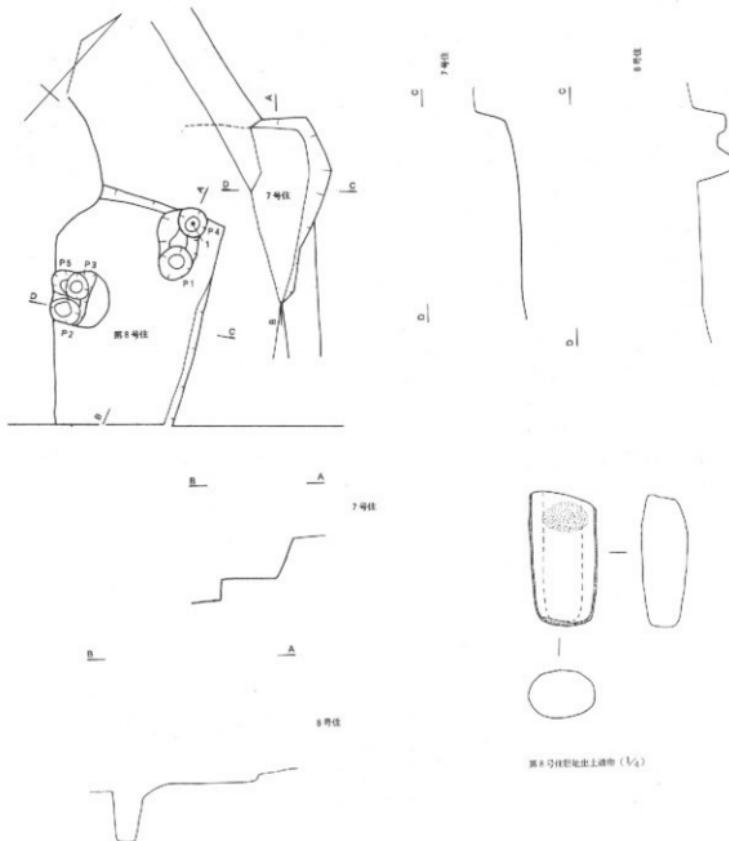
本住居址は、主郭部の北東部で第6号住居址の南側に位置するが、築城時と開墾等による破壊のため、その大部分を消失している。確認部での規模は、東西径0.80m、南北径1.88m、深さ0.41mを計測する。方位としては、N-40°-Wと推定される。床面は、しっかりした直床で壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝と柱穴は、確認出来なかったが、第8号住居址のP4が本址に結び付く可能性を有している。カマドや炉址等は、確認出来なかった。

出土遺物としては、土師器坏、甕、高台付坏などが小破片で合計25点出土しているが、図示可能な遺物は出土しなかった。

本址の土層は、黒色土が壁下面に堆積しており、この上面に黒褐色土が堆積していた。これらの土層は、粘土粒子を多く含んでいる。

第8号住居址（第49図、第14表、図版16・25）

本住居址は、主郭部の北東部で第7号住居址の南西部に位置しているが、上面、南側、西側は築城時や開墾等により消失している。確認部での規模は、東西径1.60m、南北径2.45m、深さ0.13mを計測し、方形又は長方形状を呈する住居址と推定される。方位は、N-25°-Wのようである。床面は比較的しっかりした直床であり、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は、掘り込まれていない。カ



第49図 第7・8号住居址実測図 (平面 1/50 L = 34.50 m)

第14表 第8号住居址出土遺物一覧表

No.	名称	出 土 レ ペ ル (cm)	法 量 (cm)				胎 土	焼 成	色 調	器型、整型の特徴	備 考
			口徑	底径	現高	陵径					
1	敲石	床面	長 10.9	幅 5.9	厚 3.8		重 385g	石質 安山岩		下端を欠く、両側と先端及び上面に使用痕を有す。	

マドや炉址等は、認められない。柱穴は、北東部に 2 本 (P 1, 4) と中央西側に 3 本 (P 2, 3, 5) の合計 5 本確認したが、本址に結び付く柱穴は P 1 のみのようである。P 4 は、第 7 号住居址に結び付く可能性を有し、P 2, 3, 5 がどこに結び付くかは不明である。P 1 の深さは、37cm である。他は、P 2 が 58cm、P 3 が 49cm、P 4 が 32cm、P 5 が 43cm の深さを有している。

出土遺物としては、P 4 の上面より礫石が 1 点と住居址内より土師器坏小破が 3 点出土したのみで図示したのは礫石 1 点のみである。

第 9 号住居址 (第 50・51 図、第 15 表、図版 16・25)

本住居址は、主郭部の北東部で第 9 号住居址の南西隣に位置しており、遺構の保存状況は第 7・8 号住居址と同様著しく破壊されている。確認部分での規模は、東西径 2.70m、南北径 2.83m、深さは 0.15m を計測し、N-35°-W に方位を有し長方形形状を呈している。住居址の底面は、柔弱な直床であり壁は、垂直に掘り込まれている。壁溝は、掘り込まれておらず柱穴は、住居址の西側に 2 本掘り込まれている (P 1, 2)。貯蔵穴は、住居址の北西コーナー部に位置し、東壁は攪乱を受け破壊されている。貯蔵穴の規模は、東西径 1.15m (推定)、南北径 0.67m、深さ 0.29m で、隅丸長方形形状をなしている。底面は、平坦で壁は垂直に掘り込まれている。カマドは、北東コーナーに位置している。なお、柱穴の深さは P 1 が 34cm、P 2 が 46cm の深さを計測する。

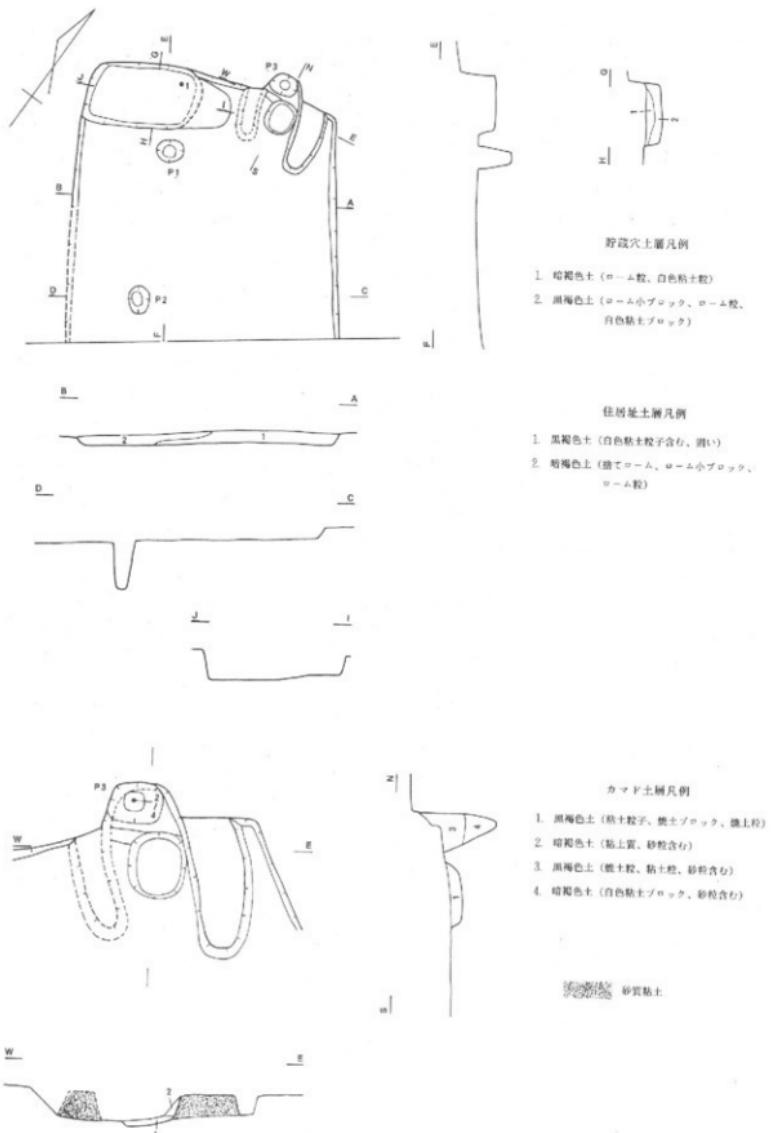
カマドは、住居址の北壁東側 (北東コーナー部) に位置し、長さ 0.89m、幅 0.90m、高さ 0.13m を計測するが、カマドの左袖と上部は破壊されている。燃焼部は、カマドの中央部に位置しており床面より 0.06m 程度掘り下げている。この部分には、黒褐色土 (第 1 層) が堆積しているが、火床面はあまり焼けておらず焼土の堆積はほとんど見られない。燃焼部先端は、床面より 0.03m 程度立ち上がってから煙道部に到っている。煙道部には、P 3 が掘り込まれているため大部分を消失している。カマドの袖は、砂質粘土を用いて構築している。

出土遺物としては、貯蔵穴内より土師器坏、甕が出土し、覆土内から土師器坏片、甕が出土しているが、数量的には 15 点と少量である。また、P 3 内より土玉が 3 点出土している。これらの出土遺物で、図示出来たのは坏 (第 52 図 A1) と土玉 3 点のみである。A1 の坏は、貯蔵穴出土品で 5% 程度の破片である。緻密な胎土で、比較的良好な整型である。A2 ~ A4 は、P 3 の中位層 (第 3 層下位) からの出土である。

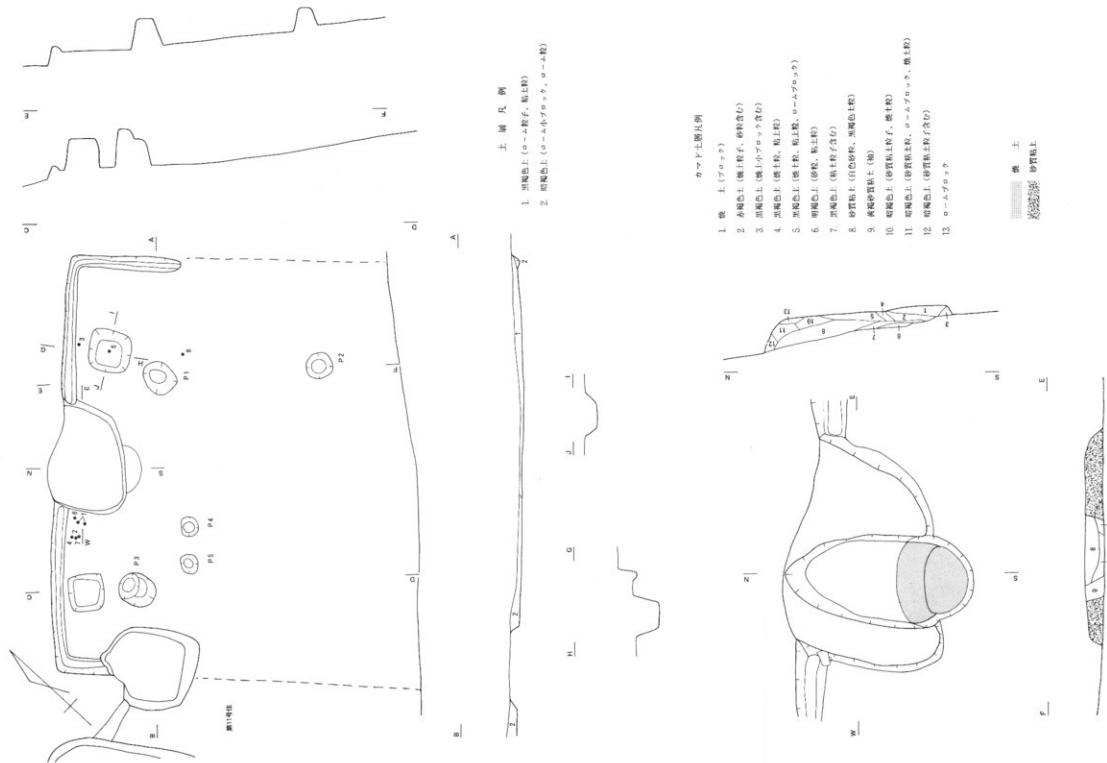
本址の土層は、住居址と貯蔵穴内に黒褐色土と暗褐色土が堆積しており、P 3 内には黒褐色土と暗褐色土が堆積している。

第 10 号住居址 (第 52・53 図、第 16 表、図版 17・25)

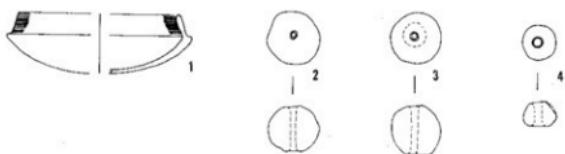
本住居址は、主郭部の中央東側に位置しており、第 11・12 号住居址と重複している。前後関係は本住居址は第 11 号住居址に切られ第 12 号住居址を、掘り切っている。よって、第 11 号住居址は第 11・12 号住居址を掘り切っている。本住居址の規模は、東西径 5.56m、南北径 4.60m、深さ 0.19m、N-47°-W に方位を有し長方形形状を呈するものと推定される。本址は、東側の緩斜面部に位置するため P 2 付近で 0.51m の深さとなり、東側端部にかけて次第に下降している。住居址の床面は、P 1 の南側



第50図 第9号住居址実測図 (平面 $1/50$ カマド $1/25$ L = 33.40 m)



第52図 第10号住居址実測図(平面1/50 カマド1/25 L = 34.50 m)



第51図 第9号住居址出土遺物 (1/4)

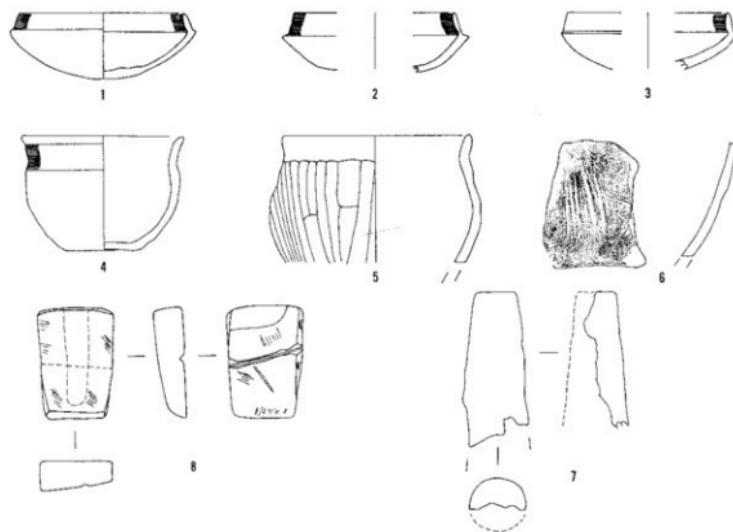
第15表 第9号住居址出土遺物一覧表

No.	名称	出土 レベル (cm)	法量(cm)				胎土	焼成	色調	器型、整型の特徴	備考
			口径	底径	現高	陵径					
1	土師器坏	+10	13.0		4.8	14.9		緻密	良好	黒色	口縁部は、横位ヘラナデ、底以下はヘラ削り、ヘラナデ、少程度残。
2	土玉		径 4.3 × 4.3		3.6		重 60g	雲母、長石 荒い	良好	茶褐色	孔径 0.7×0.5cm
3	土玉		径 4.1 × 4.1		3.9		重 65g	長石、雲母 普通	良好	茶褐色	孔径 0.7×0.7cm
4	土玉		径 2.9 × 2.7		2.0		重 15g	石英、長石 荒い	普通	暗褐色	孔径 0.9×0.9cm

付近までしっかりした貼床となっているが、これ以東の床は斜面となっているため確認出来ない。壁溝は、住居址の中央西側（北壁より 1.50m まで）から、第11号住居址カマド付近まで本址のカマドを除き幅 0.17m、深さ 0.17～0.24m で掘り込まれており壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。柱穴は 3 本（P 1～3）確認されたが、P 3 に対応する柱穴は確認出来なかったが、対角線上に 4 本所在したものと推定される。貯蔵穴は、カマドの両側に所在している。右側の貯蔵穴は、長径 0.58m、短径 0.55m、深さ 0.33m で正方形をなし、左側の貯蔵穴は長径 0.50m、短径 0.48m、深さ 0.41m で正方形をなしている。底面は、両者ともほぼ平坦であり壁は、両者ともほぼ垂直に掘り込まれている。カマドは北壁中央部に位置している。

カマドは、北壁中央部に位置し長さ 12.50m、幅 1.45m、高さ 0.12m を計測するが、上面は破壊されている。燃焼部は、カマドの手前に位置し赤褐色土（第2層）が堆積しており、良く焼けており焼土ブロック状（第1層）をなしている。燃焼部下位は、住居址の床面とほぼ同一面である。煙道部は、燃焼部から 0.60m 程度北進した後に、緩やかに立ち上がっている。ここで、一度 0.05m 程度立ち上がり、この後に緩やかに立ち上がっている。煙道部には、黒褐色土（第4・5層）、暗褐色土（第10・11層）が堆積している。暗褐色土は、砂質粘土主体層であることから崩落したものと推定される。壁は砂質粘土を用いて構築している。

出土遺物は、土師器坏、甕、土玉、支脚、砥石などが出土しており、第53図に示した。No.1～3 は土師器坏である。No.1 は、床面より出土し陵線は鋭く、部体は端整な整型である。No.2 は、床面より出



第53図 第10号住居址出土遺物 (1~7 1/4 8~1/2)

第16表 第10号住居址出土遺物一覧表

No.	名 称	出 土 レベル (cm)	法 量 (cm)				胎 土	焼 成	色 調	器型、整型の特徴	備 考
			口径	底径	高 度	高 台 径					
1	土師器 环	床直	13.3		5.3	14.8		緻密	良好	暗茶褐色	口縁部は内外横位ヘラナデ、体部は壘整なヘラナデ。一部欠損。
2	上部器 环	床直	13.0		4.5	14.9		緻密	良好	表)黒 色 内)暗褐色	口縁部は内外横位ヘラナデ、体部はヘラナデ削りヘラナデ。口～底部まで14残。
3	土師器 环	床直	13.0		4.5	14.1		緻密	良好	暗褐色	口縁部は内外横位ヘラナデ、体部はヘラナデ削りヘラナデ。口～底部まで15残。
4	土師器 壇	床直	13.1	5.2	9.3		長石、石英 雲母、荒い		良好	明茶褐色	口縁部横位ヘラナデ、体部は荒いヘラナデ。少程度残。
5	土師器 壇	+ 5	15.0		10.3		長石、石英 荒い		普通	明茶褐色	口縁部ナデ。体部は荒いヘラナデ削り少程度欠損。内面著しく磨耗。
6	土師器 壇	+ 4					長石、石英 荒い		良好	明褐色	体部片で、焼成後の傷を表面に有する。
7	支 脚	床直	長 12.5	上径 3.3	下径 5.0			荒い	普通	赤褐色	下半と少程度を欠く。表面はナデ整型。
8	砥 石	床直	長 4.5	幅 2.9	厚 1.1		重 30g	石質 硬質泥岩			全面良く使用している。下面に0.15mの傷を有す。

土しており $\frac{1}{4}$ 程度の破片で、陵は $\frac{1}{6}$ より突出している。 $\text{No.} 3$ は、床面より出土した $\frac{1}{4}$ 程度の破片であり、低く鋭い陵を有している。 $\text{No.} 4$ は、床面より出土した土師器塊型土器で約 $\frac{1}{4}$ 程度の破片である。 $\text{No.} 5$ は、土師器壺で貯蔵穴内より出土した $\frac{1}{4}$ 程度の破片である。 $\text{No.} 6$ は、土師器体部片で、器面に焼成後の傷を有している。 $\text{No.} 7$ は、床面より出土した $\frac{1}{4}$ 程度の支脚片で下端を欠いている。 $\text{No.} 8$ は、泥岩質の砥石で裏面に溝を有している。総数は、150点である。

土層は、住居址内に暗褐色土と黒褐色土が堆積しており、貯蔵穴内には黒褐色土が堆積している。

第11号住居址（第54・55図、第17表、図版17・21・25）

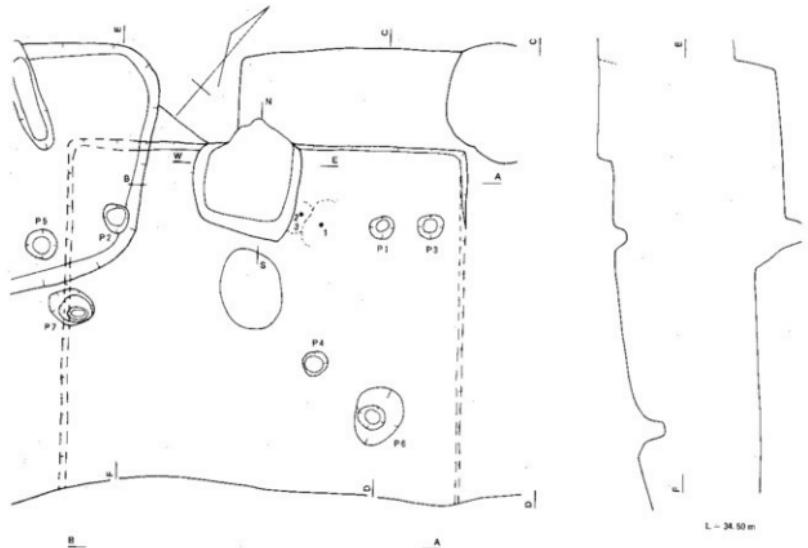
本住居址は、主郭部の東側で第10、12号住居址を掘り切っている。規模は、東西径4.08m、南北径3.57m、深さ0.21mを計測し、N-39°Wに方位を有し長方形形状を呈している。床面は、カマドの南側からP1付近まで平坦で、P1以南は緩斜面となっている。このため、P1以北はしっかりと貼床となっているが、P1以南で貼床は確認出来なかった。壁は、北壁以外確認されなかったがほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は、確認されなかった。柱穴は、合計7本確認されたが本址に結び付く柱穴は、P1、2、6の3柱穴のようである。カマドは、北壁中央部に位置している。

カマドは、北壁中央部に位置しており長さ1.32m、幅1.08m、高さ0.17mを計測する。燃焼部は、カマドの手前で住居址床面より0.04m程度下がっており、暗褐色土（第3、4層）が堆積している。焼土（第7層）は、右袖内壁部分に少量認められる程度である。燃焼部先端は、暗褐色土（第2、5層）が崩れ込んで煙道部入口を塞ぐように埋積している。煙道部は、第5層（暗褐色土）先端から緩やかに立ち上がっており、暗褐色土（第6、9～11層）が堆積している。煙道部先端は、住居址北壁より0.40m程度突出している。壁は、砂質粘土を用いて構築している。

出土遺物としては、土師器壺、环、支脚などが出土しているものの、図示出来たのは第55図に示した4点程度である。 $\text{No.} 1$ は、土師器壺片で $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{5}$ 程度の破片であり、カマドの右袖で床面より出土している。体部は、磨滅している。 $\text{No.} 2$ は、 $\text{No.} 1$ の右側で床面より出土した土師器壺で、口縁部は約 $\frac{1}{4}$ 体部～底部にかけ $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{5}$ 程度遺存している。外面とも、著しく磨滅している。 $\text{No.} 3$ は、カマドの右側で $\text{No.} 2$ の下位より出土した土師器壺で、体部下端を $\frac{1}{4}$ 程度遺存している。全体的に、荒い整型であ

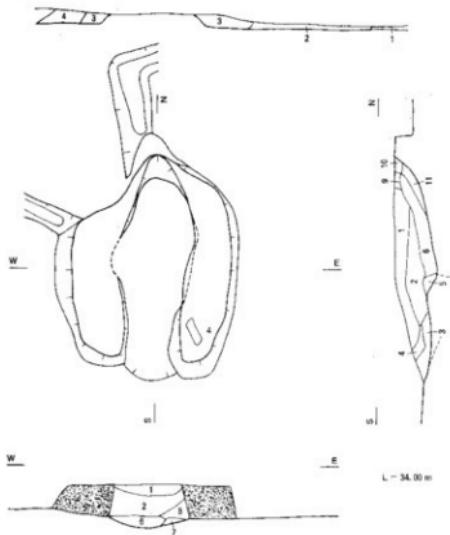
第17表 第11号住居址出土遺物一覧表

No.	名 称	出 土 レベル (cm)	法 量 (cm)				胎 土	焼 成	色 調	器 型、整型の特徴	備 考
			口徑	底 径	現 高	陵 径					
1	土師器 壺	床直	22.0		27.3		小石、雲母 長石、荒い	良好	暗褐色	口縁部は回転ヘラ ナデで、腹部ヘラ ナデ。体部は著し く磨滅している。	$\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{5}$ 程 度残
2	土師器 壺	床直	20.4	7.2	30.0		雲母、長石 石英、荒い	良好	茶褐色	口縁部は、横位ヘ ラナデか、体部は 内外面著しく磨滅。	体部 $\frac{1}{4}$ 口縁 $\frac{1}{5}$ 底部 $\frac{1}{5}$ 残
3	土師器 壺	床直	23.0 × 22.0	8.0	24.0		雲母、長石 石英、荒い	良好	黑 色	口縁部は、横位ヘ ラナデで体部はヘ ラ削り、ヘラナデ。 下端ヘラ削り。	底部のみ $\frac{1}{5}$ 残
4	土 製 支 脚		長 13.8	幅 5.5	厚 5.3		小石、砂 荒い	良好	赤褐色	下端を欠損して いる。全体的にナデ、 カマド内出土。	



土層凡例

1. 塗褐色土 (ローム粒子、粘土粒)
2. 前褐色土 (ローム小ブロック、ローム粒)
3. 黒褐色土 (ローム粒子、粘土粒、七面土)
4. 結褐色土 (ローム粒、炭化物)

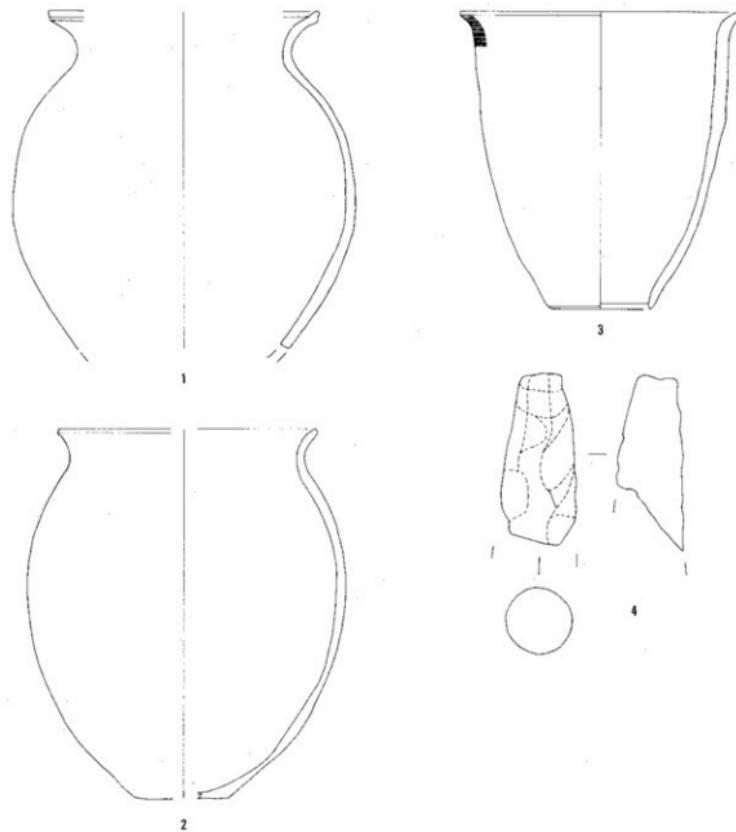


カマド土層凡例

1. 塗褐色土 (ロームブロック、ローム小ブロック
燒土粒含む)
2. 前褐色土 (燒土粒、燒土粒、
ロームブロック含む)
3. 褐褐色土 (燒土粒、炭化物含む)
4. 暗褐色土 (燒土粒子含む)
5. 帶褐色土 (ロームブロック含む)
6. 暗褐色土 (燒土ブロック、燒土粒、
燒土粒含む)
7. 燃土土
8. 黑褐色土 (燒土粒子含む)
9. 帶褐色土 (白色粘土粒含む)
10. 前褐色土 (ローム小ブロック、炭化物含む)
11. 帶褐色土 (ローム粒、炭化物、粘土粒含む)

燃土土 燃土粒上

第54図 第11号住居址実測図 (平面1/50 カマド1/25)



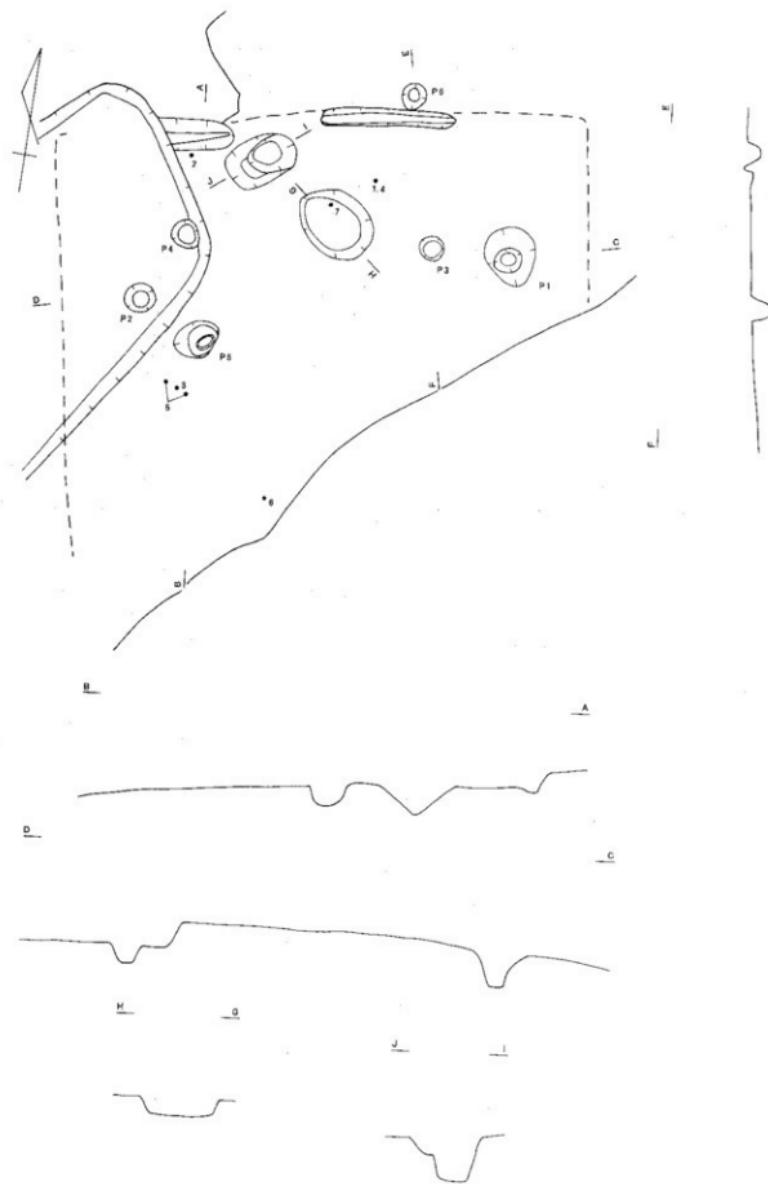
第55図 第11号住居址出土遺物（ $\frac{1}{4}$ ）

る。図4は、カマド内より出土した支脚片である。総数は、270点である。

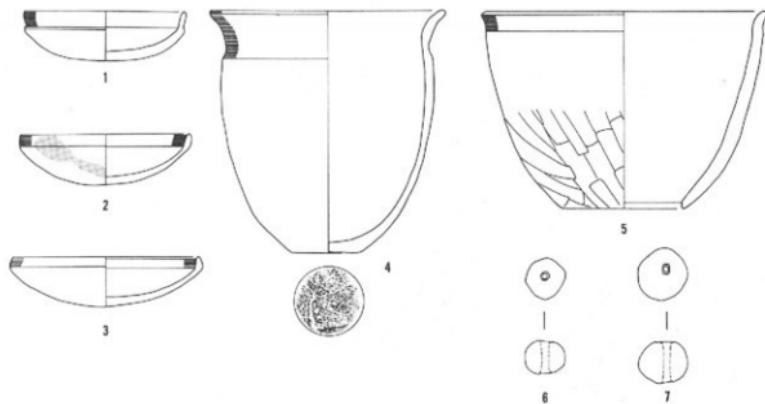
本址の土層は、黒褐色土と暗褐色土が堆積している。

第12号住居址（第56・57図、第18表、図版17・21・26）

本住居址は、主郭部の東側で第10・11号住居址及び第1・2号地下式倉庫に切られている。このため、壁は北西部に一部現存するのみである。規模は、東西径4.50m、南北径4.50m、深さ0.20mでN-11°-Wに方位を有し長方形状を呈する住居址である。床面は、第12号住居址カマド北西部では柔弱な貼床となっていることから、貼床であったものと推定される。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれて



第56図 第12号住居址実測図（平面 $1/50$ L = 34.50 m）



第57図 第12号住居址出土遺物 (1/4)

第18表 第12号住居址出土遺物一覧表

No.	名 称	出 土 レ ベル (cm)	法 量 (cm)				胎 土	焼 成	色 調	器型、整型の特徴	備 考
			口径	底径	現高	腹径					
1	土師器 环	床直	13.0		4.0	12.9		小石、石英 雲母、荒い	良好	暗褐色	口縁部は、横位 ヘラナデ。体部 は磨滅し整型不 明。底は低い。
2	土師器 环	床直	13.8		4.1	13.6		雲母、長石 石英、荒い	良好	暗褐色	口縁部は内外機 部へラ削り、背面 に一部擦付痕。
3	土師器 环	床直	15.0		4.0	15.3		細粒子 緻密	良好	暗褐色	口縁部は横位、体部は ヘラ削りへラナデ(荒い)、 内面へラナデ。
4	土師器 甕	床直	19.0	5.5	19.6			長石、石英 荒い	良好	暗茶褐色	口縁～体部上半 まで横位へラナ デ。体部荒いへ ラナデ。口縁～ 体部まで穴欠
5	土師器 甕	+ 5	23.0	9.6	16.0			細粒子 緻密	良好	暗茶褐色	口縁部は横位へ ラナデ。体部は 横位へラ削り、下端 内面へラ削り。
6	土 玉	床直	径 3.3		27		重 25g	荒い	良好	暗褐色	孔径 0.7 cm 表面は磨滅して いる。
7	土 玉	- 8	径 4.2 × 4.0		34		重 50g	長石、石英 荒い	良好	暗褐色	孔径 0.7 × 0.6 cm

おり壁溝は、幅 0.09 ~ 0.21 m、深さ 0.06 ~ 0.14 m で北側部分のみ確認されたが、中央部は掘り込まれていないためカマドが所在したものと推定される。柱穴は、P 1 ~ 6 まで 6 本所在するものの P 1、4、6 は、第 11 号住居址の柱穴で P 2、3、5 の 3 柱穴が本址に関連する柱穴と推定される。また、カマド部分は、pit 状をなす部分と灰落状の部分とからなる。前者は、第 12 号住居址のカマド下位面に位置し、後者は同住居址カマドの南側に位置している。また、床面は壁溝から南端にかけて緩やかに

下降している。カマドの部分には、暗褐色土が堆積している。

出土遺物としては、土師器壺、甕、瓶、土玉などが出土しており、第57図に示した以外全て小破片である。**M1**～**3**は、土師器壺で床面より出土している。**M1**は、中央北側より出土し低い陵を有し、体部は磨滅している。**M2**は、北西部より出土し程度を欠損している。器面には、一部媒が付着している。**M3**は、中央南側から出土しており程度の破片である。**M2**、**3**は、陵を有していない。**M4**は、中央北側で床面から出土した土師器甕で、程度欠損している。体部は、磨滅している。**M5**は、**M4**の東側で床面上5cmの所より出土した土師器瓶である。体部上半は磨滅している。**M6**、**7**は、土玉である。**M6**は、床面より出土し、**M7**は、灰落し状の部分上面より出土している。総数は60点である。

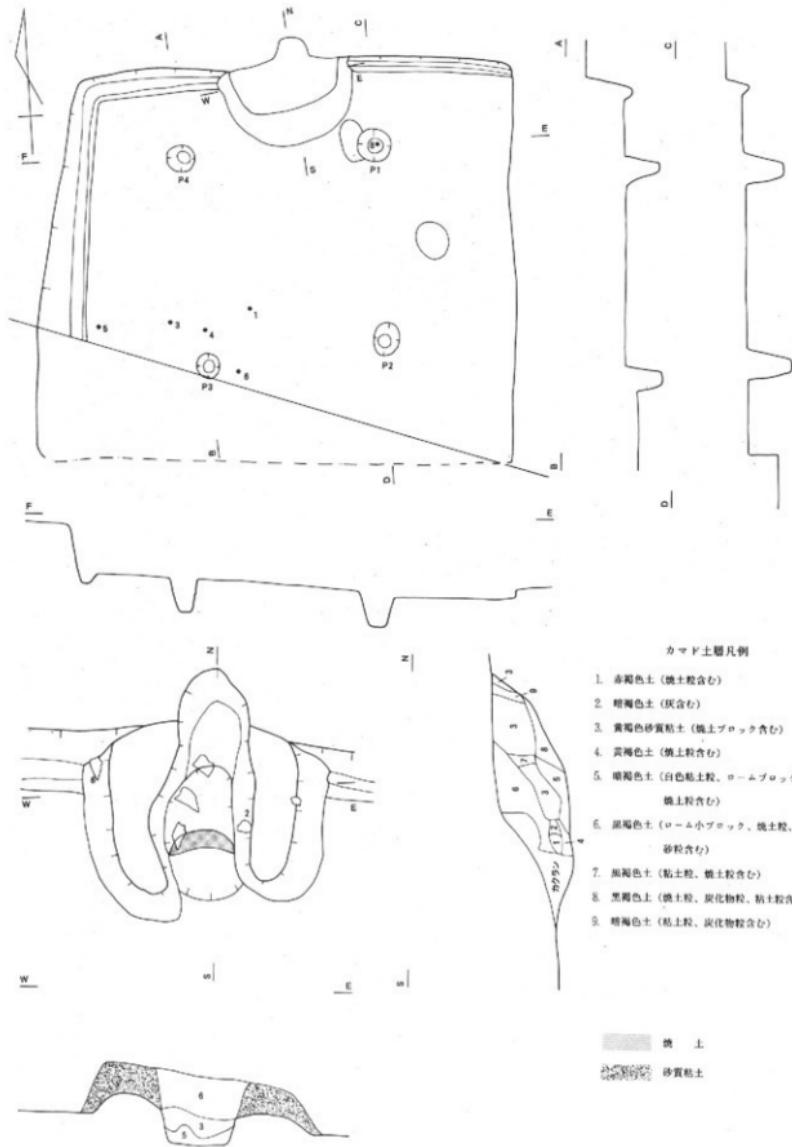
本址の土層は、黒褐色土と暗褐色土が堆積している。

第13号住居址 (第58・59図、第19表、図版17・18・26)

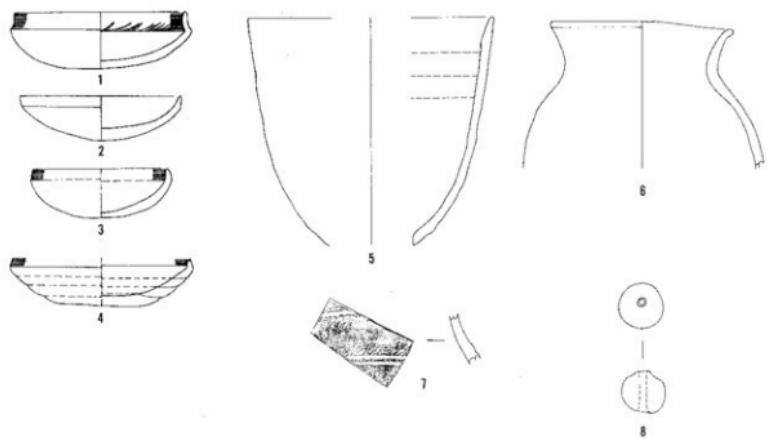
本住居址は、主郭部の東側緩斜面部で第12号住居址の南東部に位置している。本住居址が、東側斜面部に位置するため東壁は推定である。規模は、東西径4.58m、南北径4.00m、深さ0.50m(西壁)を計測し、N-0°-Eに方位を有し長方形形状を呈している。床面は、P1・2までは比較的しっかりした貼床であるが、P1・2以東は直床状をなしており、P3・4以西と北壁付近は柔弱な貼床である。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており壁溝は、幅0.15～0.30m、深さ0.06～0.09mでカマドと東壁以外で掘り込まれている。また、西壁の一部は崩落しており南壁は、確認調査時と耕作擾乱により消失している。この部分は、城跡の構築も開墾等による破壊を受けている。東壁は、北壁の壁溝が終了した部分で壁としたが、ここから0.60m先は開闢を受けていることと、ここ以東壁らしい部分は確認出来なかった。柱穴は、対角線上に4本(P1～4)掘り込まれており、カマドは北壁中央部に位置している。

カマドは、北壁中央部に位置し上面の大部分を破壊されている。規模は、長さ1.27m、幅1.22m、高さ0.38mを計測する。カマドの中央上面と、手前は破壊されている。燃焼部は、カマドの手前に位置し、火床部には黄褐色土(第4層)を用いて敷いている。燃焼部には、赤褐色土(第1層)と灰層(第2層)が堆積しており、火床部の黄褐色土はくすんでいる。この黄褐色土の前方に、燃焼部先端があり暗褐色土(第5層)が堆積している。この部分は、先端で0.09m程度立ち上がってから煙道部に到る。第5層先端部には、瓶を設置する部分と推定される黒褐色土(第7層)がある。煙道部は、緩やかに立ち上がり先端部分は、カマド壁内を通るように構築されている。煙道部先端は、住居址の壁より0.30m突出している。壁は、砂質粘土を用いて構築している。

出土遺物としては、土師器壺、甕、瓶、須恵器甕、土玉などが出土している。これらの遺物で、図示出来たのは第59図に示した8点程度で、他は全て小破片である。総数としては、きわめて多く300点以上を数える。第59図**M1**は、土師器壺で床面より出土しており、低く丸い陵を有し体部は内外面とも磨滅している。**M2**は、カマド右袖部内側より出土した土師器壺で、陵を消失しており体部は内外面とも磨滅している。**M3**は、床面上13cmの所より出土した土師器壺で、塊に近い型状である。**M4**は、床面上13cmの所より出土した土師器壺型土器で、体部に粘土の輪積痕を明瞭に残している。**M5**は、床面上8cmの所より出土した土師器甕であり、口縁部が歪んでいるため橢円形状の器型となっ



第58図 第13号住居址実測図 (平面 $1/50$ カマド $1/25$ L = 33.40 m)



第59図 第13号住居址出土遺物 (1/4)

第19表 第13号住居址出土遺物一覧表

No.	名 称	出 土 レ ベ ル (cm)	法 量 (cm)				胎 土	焼 成	色 調	器型、整型の特徴	備 考	
			口 径	底 径	現 高	蔵 径						
1	土師器 坏	床直	13.7		4.5	14.6		雲母、長石 荒い	良好	黑 色	口縁部は、内外横位 ヘラナデ、体部は磨 滅。底は丸味を有す。	
2	土師器 坏	+13	13.0		3.7	12.7		雲母、長石 荒い	良好	暗褐色	全体に著しく磨滅し ていて。口縁～体部 にかけら欠。	
3	土師器 坏	+13	11.0		4.0	11.3		細粒子 緻密	良好	暗褐色	口縁部は横位ヘラナ デ、体部は荒いヘラ 削り、ヘラナデ等程 度残。	
4	土師器 坏	+13			3.8	14.7		細粒子 緻密	良好	明褐色	口縁部は、横位ヘラ ナデ、体部は荒いヘ ラ削り、口面ヘラ削 り	
5	土師器 瓶	+ 8	20.0 X 19.0	7.0	18.5		雲母、長石 石英、普通		良好	暗褐色	表はヘラ削り、ヘラ ナデ、体部下端はヘ ラ削り、口～底部ま で残、口縁も残。	
6	土師器 甕	+ 7	14.8		11.8		長石、石英 雲母、荒い		良好	暗褐色	口縁ヘラ削り、口縁 以下はヘラナデ、体 部は弓欠損。	
7	須惠器 壺						緻密 灰褐色	良好	灰褐色		一括 資料	
8	土 玉	+ 6	34		3.4		重 40g	長石、石英 荒い	良好	暗褐色	孔径 0.7 × 0.7 cm	

ている。 $\#6$ は、床面上4cmの所より出土した土師器甕で、口縁部が歪んでいる。 $\#7$ は、須恵器甕片であり、 $\#8$ は床面上6cmの所より出土した土玉である。

本址の土層は、黒褐色土、暗褐色土、明褐色土が堆積している。

第14号住居址（第60図、図版18）

本住居址は、主郭部の北東部に位置している。規模は、東西径3.94m、南北径0.84m、深さ0.10mで、長方形をなす住居址である。住居址は、N-60°-WであるもののカマドはE-45°-Sと南向きである。住居址の床面は、ほぼ平坦で壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝は掘り込まれていない。柱穴は、西壁に接して1本（P1）と中央部に1本（P2）の2本確認されたのみである。

カマドは、南壁西側に位置し長さ0.87m、幅0.88m、高さ0.09mを計測する。燃焼部は、カマドの中央部で住居址の床面と同一面である。焼土は、2ヶ所に堆積しているので燃焼部には黒褐色土（第2層）が堆積している。火床面は、あまり焼けていない。煙道部は、燃焼部より緩やかに立ち上がり煙道部先端は住居址南壁より0.19m突出している。煙道部には、赤褐色土（第4層）が堆積している。燃焼部手前の暗褐色土（第3層）は、焚口部と判断される。カマド壁は、砂質の白色粘土を用いて構築している。2棟ではなく、1棟の住居址である。

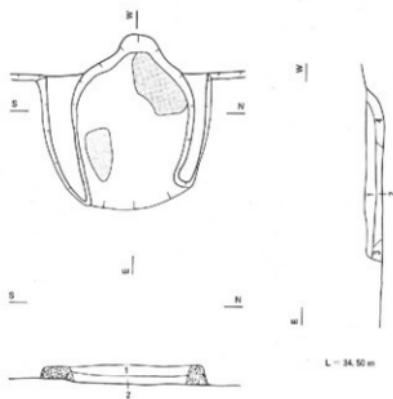
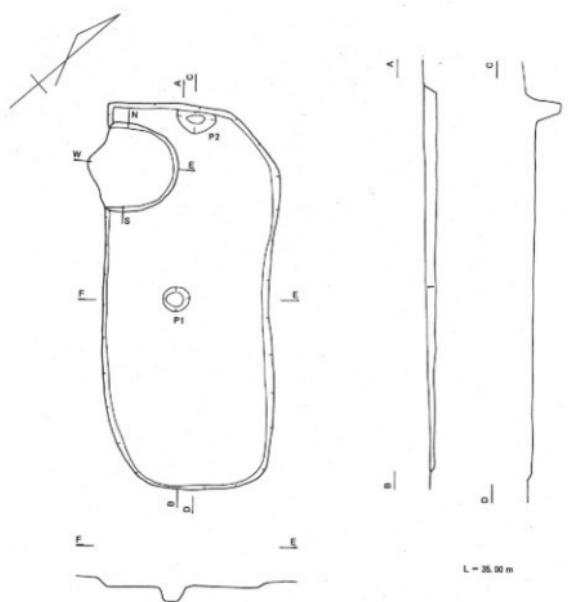
出土遺物は、土師器壺小破片が3点出土したのみであり、図示は出来なかった。なお、本址の覆土は1層で粘土質の明褐色土が堆積している。

第15号住居址（第61・62図、第20表、図版17、18、21）

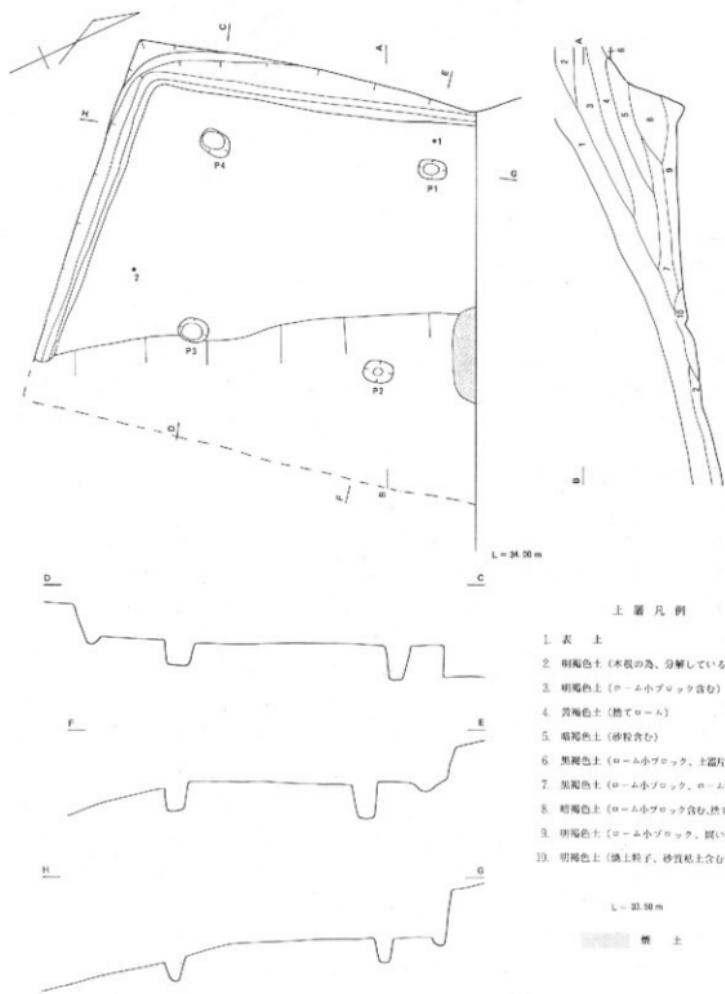
本住居址は、主郭部の東側で第13号住居址の南側に位置し、保存状況は第13号住居址と同様である。規模は、東西径4.00m、南北径4.50m、深さ0.50mを計測するが、東西と南北径は推定徑である。方位は、N-34°-Eで長方形形状を呈する住居址である。床面は、P1、2の部分まで比較的しっかりした貼床であるが、壁溝付近は柔弱な貼床となっている。壁溝は、幅0.36～0.20m、深さ0.08～0.07mで全局していたようであるが、東側にかけて次第に狭くなっている。壁は、垂直に掘り込まれている。柱穴は、対角線上に4本（P1～4）掘り込まれており、4柱穴とともにほぼ横円形をなしている。深さは、P1が40cmの深さを有する外は20～30cm代の深さである。カマドは、北壁中央部に所在したようであるが、大部分を破壊されており燃焼部以下を残すのみである。この部分には、焼土が堆積している。

出土遺物としては、土師器壺、甕、弥生式土器片などの破片が、総数で45点出土したが図示出来たのは第64図に示した2点のみである。 $\#1$ は、床面より出土した土師器壺で低い腹と半球状の体部をなしている。胎土と整型は、荒くなっている。 $\#2$ は、床面上20cmの所より出土した弥生式土器底部片である。底面には、木葉痕を有している。

本址の土層は、明褐色土と暗褐色土が堆積し、住居址上面には明褐色土、黄褐色土、暗褐色土が堆積している。土層の堆積状況は、西方より流入した状況を示しているが、黄褐色土以上は中世時に埋められた可能性を有している。



第60図 第14号住居址実測図（平面 $1/50$ カマド $1/25$ ）



第61図 第15号住居址実測図（平面 $1/50$ ）



第62図 第15号住居址出土遺物 (1/4)

第20表 第15号住居址出土遺物一覧表

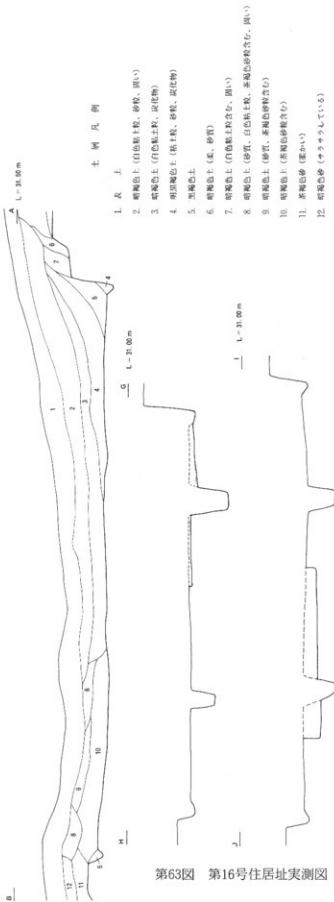
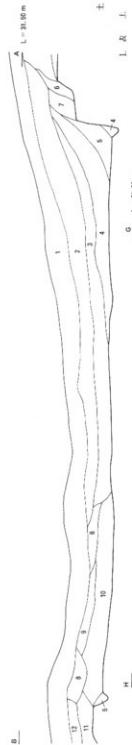
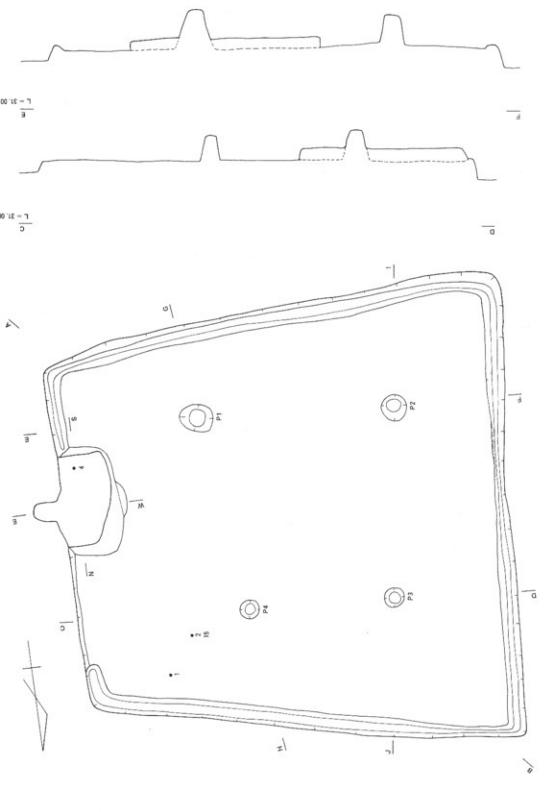
No.	名 称	出 土 レベ ル (cm)	法 量 (cm)					胎 土	焼 成	色 調	器型、整型の特徴	備 考
			口 径	底 径	現 高	陵 保	高 台 径					
1	土師器 壺	床 直	13.0		5.1	10.3		長石、石 英、荒い	良好	暗茶褐色	体部上半はヘラナデ、 下半はヘラ削りヘラ ナデ、荒い整型、口 縁部土残	
2	甕	+20		8.2	2.7			雲母、長 石、石英、 緻密	良好	暗 褐 色	上半に圖文を施し、 下半は手持ちヘラ削 り、弔式土器	

第16号住居址 (第63・64図、第21表、図版18・21・27)

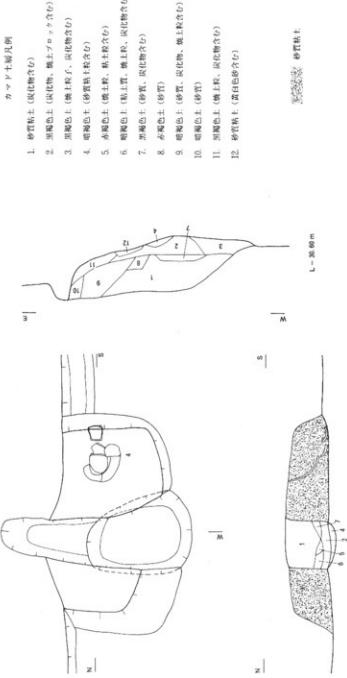
本住居址は、主郭部より一段下がり北西方面に細長く突出した部分（Vノ郭）で、東側平坦部に位置している。規模は、東西径5.90m、南北径5.58m（中央）、深さ0.50mを計測し、N-90°Eに方位を有し隅丸長方形状（台形状）をなしている。壁は、西壁が東壁より北側で1.20m、南側で0.46mの合計1.66mだけ広くなっている。本址は、砂層中に掘り込まれた住居址である。本址の床面は、しっかりした直床であり壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は、幅0.15～0.25m、深さ0.04～0.07mでカマドと東壁西側を除き全周している。柱穴は、対角線上に4本（P 1～4）が掘り込まれているものの、P 4がやや内側に入り込んでいる。カマドは、東壁中央やや東側に位置している。

カマドは、東壁のやや東側に位置し長さ1.26m、幅1.45m、高さ0.28mを計測する。燃焼部は、カマドの手前に位置し床面より0.05m程度下がっており、焼土の堆積はなく黒褐色土（第3層）が焼土を含んで堆積している。煙道部は、燃焼部より緩やかに立ち上がり先端部分では垂直に立ち上がっている。煙道部中央付近には、暗褐色土（第4層）と砂質粘土（第12層）を高さ4cm、長さ40cmで貼り付けている。煙道部には、黒褐色土（第2・11層）と暗褐色土（第10層）が堆積している。

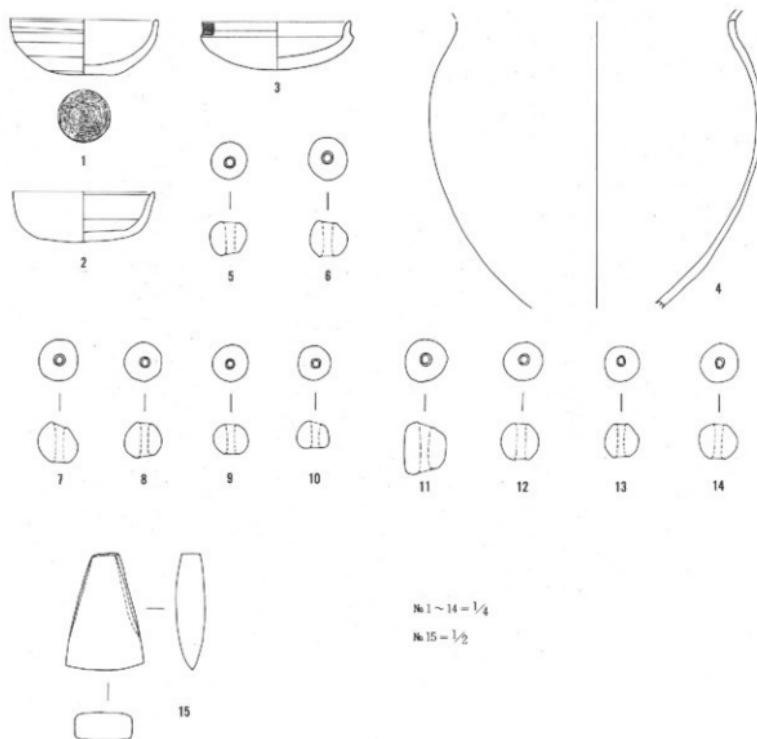
出土遺物としては、土師器壺、甕、須恵器壺、土玉、石斧などが出土している。総数としては、比較的多く75点を数えるが、図示出来たのは第64図に示した15点である。No 1は、床面上5cmの所より出土した須恵器壺で碗に近い器型で、 $\frac{1}{3}$ 程度を欠損し荒い整型である。No 2は、床面上7cmの所より出土した須恵器壺で $\frac{1}{4}$ 程度を欠損している。内外面とも、磨滅しており荒い整型である。No 3は、カマド内より出土した土師器壺で、口縁～陵までが一部残存している程度である。全体的に、著しく磨滅している。No 4は、カマド右袖内に埋設された土師器甕で $\frac{1}{3}$ 程度の破片である。No 5～14は、住居址内中位層より出土した土玉である。No 15は、床面上7cmの所より出土した小型磨製石斧で、全面良く研磨され光沢を有している。



カマド実測図



第63図 第16号住居址実測図 (平面 1/50 カマド 1/25)



第64図 第16号住居址出土遺物

本址の土層は、全て砂質の土層で暗褐色土、明黒褐色土、茶褐色砂、黒褐色土、暗褐色砂が堆積しており、暗褐色土が5層に細分される。これらの土層は、南方よりレンズ状に順次堆積した状況を示している。

2) 土 壤

第1号土壤 (第65・70図、第22表、図版14・21・27)

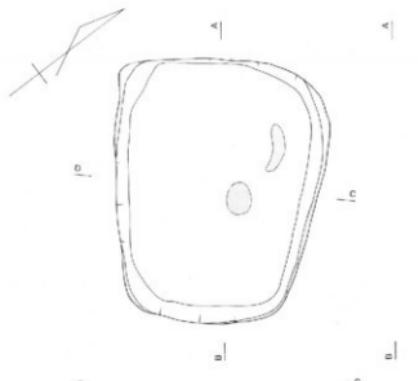
本土壤は、主郭部の中央北側で第1号掘立柱建物址の東側に位置している。規模は、東西径0.82m（中央部）、南北径1.08m、深さ0.29mで、N-53°Wに方位を有し隅丸長方形状を呈している。東西径は、北壁と南壁では長さが異なり南壁が短くなっている。北壁は、0.85mであるのに対し南壁は、0.64mと0.21mも短くなっている。

第21表 第16号住居址出土遺物一覧表

No.	名 称	出 土 レベル (cm)	法 量 (cm)					胎 土	焼 成	色 調	器型、整型の特徴	備 考
			口 径	底 径	現 高	陵 径	高台径					
1	須恵器 环	+ 5	12.1	3.8	4.5			長石、荒 い 灰 褐 色	良好	灰 褐 色	口唇部は回転ヘラナ デ、体部は回転ヘラ ナデ、下端は回転ヘ ラ削り、底面回転ヘ ラ切り、ヘラナデ	
2	須恵器 环	+ 7	11.5	8.5	4.1			長石、荒 い 灰 褐 色	良好	灰 褐 色	体部は回転ヘラナ デ、底面はヘラ削り、荒 い整型、内外磨滅し ている	口～底部 土欠損
3	土師器 环		12.0		3.9	12.4		長石、石 英 音 通	普通	黑 色	口縁部横輪ヘラナ デ、体部荒いヘラ削り、 ヘラナデ、全体に磨 滅	カマド 一括資料
4	土師器 甕				23.3			雲母、長 石、小石 瓦	良好	暗 褐 色	体部は荒いヘラナ デ、内面ヘラナデ、 体部土程度残	カマド内 出 土
5	土 玉	径3.1 × 3.0		2.7		重 20 g	荒 い	良好	茶 褐 色	孔径 0.9 × 0.9 cm		一括資料
6	土 玉	径3.4 × 3.1		2.9		重 28 g	荒 い	良好	暗 褐 色	孔径 0.9 × 0.9 cm		一括資料
7	土 玉	径3.3 × 3.2		3.2		重 32 g	荒 い	良好	暗 褐 色	孔径 0.9 × 0.9 cm		一括資料
8	土 玉	径3.1 × 3.0		2.8		重 29 g	荒 い	良好	茶 褐 色	孔径 0.8 × 0.8 cm		一括資料
9	土 玉	径3.0 × 2.9		2.4		重 22 g	荒 い	良好	茶 褐 色	孔径 0.8 × 0.8 cm		一括資料
10	土 玉	径2.9 × 2.6		2.2		重 20 g	緻 密	良好	茶 褐 色	孔径 0.7 × 0.7 cm		一括資料
11	土 玉	径3.4 × 3.4		4.2		重 48 g	荒 い	良好	暗 褐 色	孔径 1.0 × 0.9 cm		一括資料
12	土 玉	径2.9 × 2.8		2.7		重 25 g	砂 荒 い	良好	暗 褐 色	孔径 0.8 × 0.7 cm		一括資料
13	土 玉	径3.0 × 3.1		2.9		重 25 g	荒 い	良好	暗茶褐色	孔径 0.9 × 0.9 cm		一括資料
14	土 玉	径3.2 × 2.9		2.8		重 21 g	砂 荒 い	良好	暗 褐 色	孔径 0.8 × 0.7 cm		一括資料
15	小型磨 製石斧	+ 7	長 4.7	巾 2.6	厚 1.1		重 30 g	石質 鉈 紋 岩			全面ともよく砥磨さ れており、端整な造 り、光沢を有す、上 面一部剥離	

土壤の底面は、南西部分（南東コーナー、南側、西側、北西コーナー）が高く、他の壁部分が低くなっているため皿状に下降している。壁は、四壁ともほぼ垂直に掘り込まれている。壁には、北東壁、東壁、南東壁、南西壁、北西壁の各上面（壁上面より 5 ~ 10cm 下位）に炭が付着し、底面の中央部と北東部の 2ヶ所に焼土が堆積している。焼土下位面は、粘土層であり何ら焼けた痕跡は見られない。

出土遺物としては、土壤の東壁付近で底面より砥石が 1点と、試焼き資料 3点の合計 4点が出土し

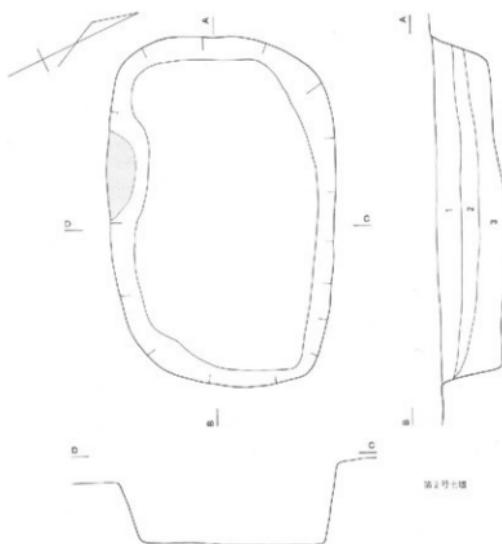


土層凡例

1. 咸褐色土 (粘土質、炭化物を含む)
2. 黑褐色土 (粘土質、炭化物と白色粘土ブロックを含む)
3. 咸褐色土 (粘土質、白色粘土粒、茶褐色土、炭化物含む)
4. 咸褐色土 (粘性に富、粘土粒子含む)
5. 白色粘土 (くすんでいる)
6. 炭化物
7. 黑褐色土 (粘性に富み、白色粘土、炭化物含む)
8. 咸褐色土 (粘性に富み、白色粘土粒子含む)
9. 咸褐色土 (白色粘土粒、炭化物粒)

第1号土壤

塊 土



土層凡例

1. 咸褐色土 (粘土質、○～△粒子含む)
2. 黑褐色土 (粘土質、白色粘土ブロック含む)
3. 咸褐色土 (粘土質、白色粘土粒子、白色粘土ブロック)

第2号土壤

塊 土

第65図 土壤実測図 2 ($1/20$ L = 34.90 m)

たのみである。底面は、底面から出土しており黒くすんでいる。

土層は、暗褐色土、白色粘土、炭化物、黒褐色土が堆積しており、暗褐色土が6層に細分される。これらの土層は、焼土や焼土粒子の混入は見られないが炭化物を各土層が含んでいる。炭化物は、第6層で底面付近に堆積している。堆積状況は、他の土壌と明らかに異なっている。

第2号土壌（第65図、図版14）

本土壌は、主郭部の中央西側で第1号掘立柱建物址の南西部に位置している。規模は、東西径0.92m、南北径1.42m、深さ0.92mで、N-55°-Wに方位を有し隅丸長方形状をなしているが、南西壁が他のコーナーよりも丸味を有している。底面は、中央（南北軸）部分に凹凸がやや認められ、西壁部分がやや高くなっている以外、ほぼ平坦な底面である。壁は、北壁が斜めに掘り込まれている以外ほぼ垂直に掘り込まれている。西壁の中央北側で、壁上面から20cmの所まで厚1cm程度の焼土が堆積しているが、焼土下の粘土面（壁と底面をなす）は何ら火力を受けた痕跡は認められなかった。

出土遺物は、皆無であり土層は、暗褐色土と黒褐色土が堆積しており、暗褐色土が2層に細分される。これらの土層は、全て粘土質の土層で黒褐色土（第2層）と暗褐色土（第3層）が粘土粒子や粘土ブロックを含んでいる。堆積状況は、自然堆積である。

第3号土壌（第66図、図版14）

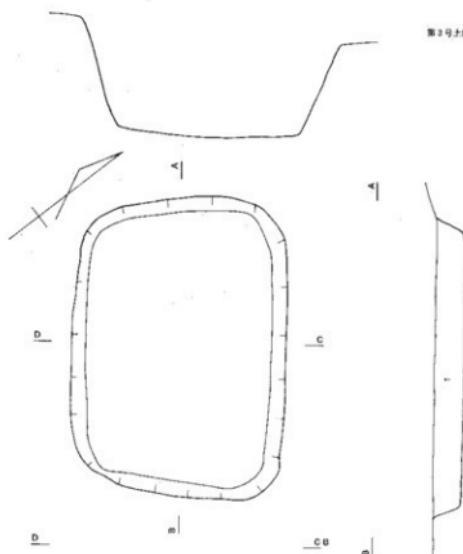
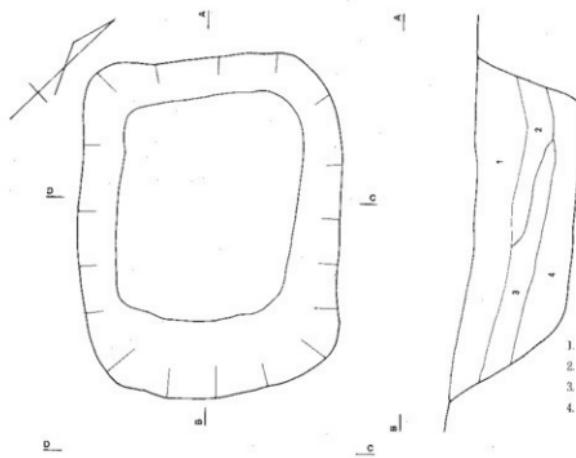
本土壌は、主郭部の北西部で第3号住居址の南東部に位置している。規模は、東西径1.06m、南北径1.39m、深さ0.49mで、N-44°-Wに方位を有し隅丸長方形状を呈している。底面は、皿状をなししており壁は、南壁が斜めに掘り込まれている以外ほぼ垂直に掘り込まれている。

出土遺物は、皆無で土層は明褐色土、粘土、黒褐色土が堆積しており、黒褐色土が2層に細分される。これらの土層は、粘土質の土層で第4層の黒褐色土は固くしまっている。堆積状況は、自然堆積である。

第4号土壌（第66図、図版19）

本土壌は、主郭部の北西部で第1号掘立柱建物址の北西部に位置している。規模は、東西径0.88m、南北径1.22m、深さ0.11mで、N-43°-Wに方位を有し隅丸長方形状をなしている。北西壁と、南西壁がやや内側に入り込んでいるため西壁が、東壁より約0.20m程度短くなっている。底面は、ほぼ平坦面をなしており壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。

出土遺物は、皆無で土層は粘土質の明褐色土が堆積しているのみで、焼土や炭化物等は確認されなかった。



第66図 土壤実測図3 ($1/20$ L = 34.90 m)

第5号土壙（第67図）

本土壙は、主郭部の北西部で第3号土壙の南西部に位置し、西側中央部を柱穴により掘り切られている。土壙の規模は、東西径1.26m、南北径0.86m、深さ0.08mで、N-55°-Eに方位を有し不整長方形をなしている。東側は、長方形状で西側は梢円形状を呈している。土壙の底面は、ほぼ平坦で壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。

土壙内の上層は、粘土質の明褐色土が1層堆積しており土質はやや柔質である。出土遺物は、何ら出土しなかった。

西側の柱穴は、長径0.40m、短径0.40m、深さ0.18mで、不整円形状を呈している。土壙の底面から0.10mの深さを有している。柱穴の底面は、平坦で壁はほぼ垂直に掘り込まれている。土層は、暗褐色土が1層堆積しているのみである。出土遺物は、皆無である。

第6号土壙（第67図）

本土壙は、主郭部の北端で第4号土壙の北西部に位置している。規模は、東西径0.68m、南北径は0.66m、深さ0.91mで、N-36°-Wに方位を有し梢円形状を呈している。底面は、皿状をなし壁は、垂直に掘り込まれている。土層は、暗褐色土、黒色土、黒褐色土が堆積しており、暗褐色土が5層に細分される。第10層の暗褐色土は、固くしまっている。遺物の出土はなく、第5号住居址の貯蔵穴や柱穴（中世）の痕跡も認められないことから、土壙として記述した。

第7号土壙（第68図）

本土壙は、主郭部の北端で第4号住居址の南東コーナーを掘り切った状況で確認された。土壙の規模は、東西径0.98m、南北径0.77m、深さ0.32mで、N-80°-Wに方位を有し梢円形を呈している。住居址の床面からは、0.20mの深さを有している。底面は、平坦面をなし壁は、北壁と東壁が斜めに掘り込まれている以外、ほぼ垂直に掘り込まれている。土層は、暗褐色土と茶褐色土が堆積している。暗褐色土の上面には、粘土質の明褐色土が堆積している。

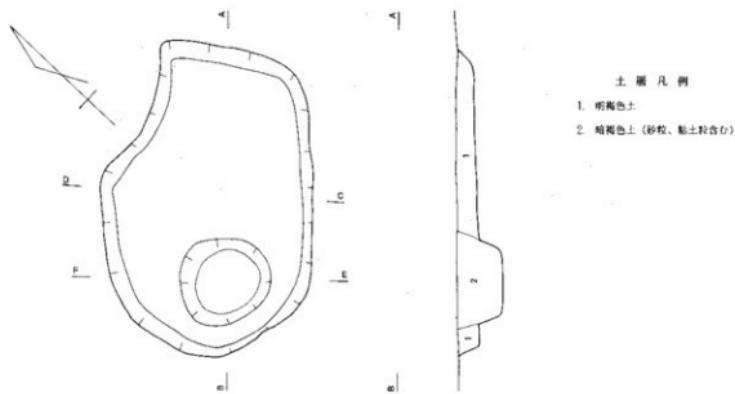
出土遺物は、皆無である。

第8号土壙（第70図、第22表、図版16）

本土壙は、主郭部の北端で第4号住居址に位置している。規模は、東西径0.47m、南北径0.55m、深さ0.19mで、N-83°-Eに方位を有し梢円形をなしている。土壙の底面は、平坦で壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。土層は、暗褐色土と黒褐色土が堆積しており、暗褐色土上面は粘土質の明褐色土が堆積している。

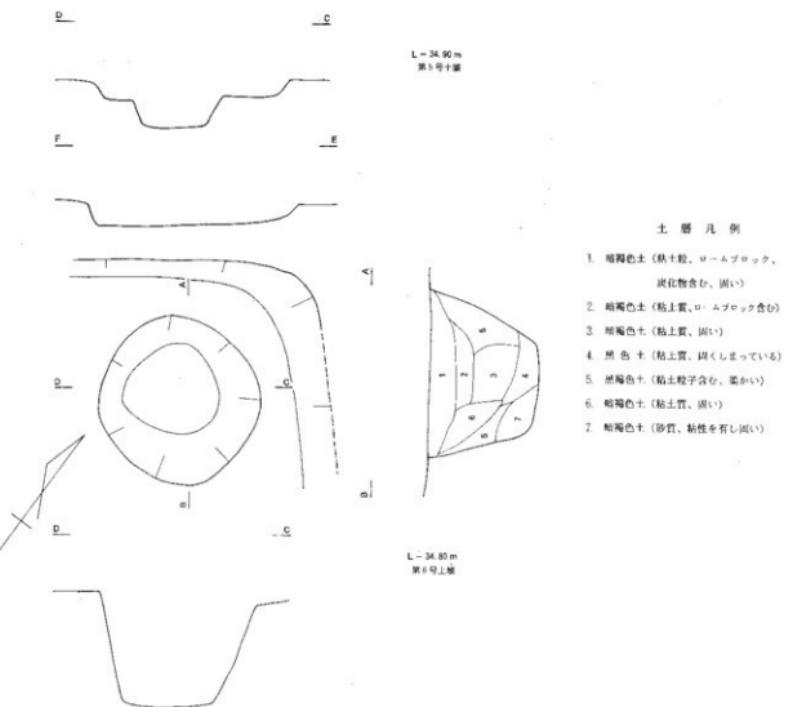
出土遺物は、底面より土師器坏（第72図No.1）が1点と、土師器片が2点の合計3点出土したのみである。出土遺物については、後述する。

なお本址は、第4、5号住居址を掘り切っており、柱穴でもないことから土壙として記述した。



土層凡例

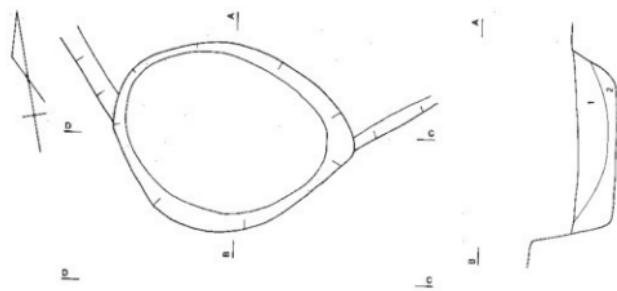
1. 明褐色土
2. 暗褐色土 (砂粒、粘土粒子含む)



土層凡例

1. 暗褐色土 (粘土質、ロームブロック、炭化物含む、固い)
2. 暗褐色土 (粘土質、ロームブロック含む)
3. 暗褐色土 (粘土質、固い)
4. 黑色土 (粘土質、固くしまっていいる)
5. 暗褐色土 (粘土粒子含む、柔かい)
6. 暗褐色土 (粘土質、固い)
7. 暗褐色土 (砂質、粘性を有し固い)

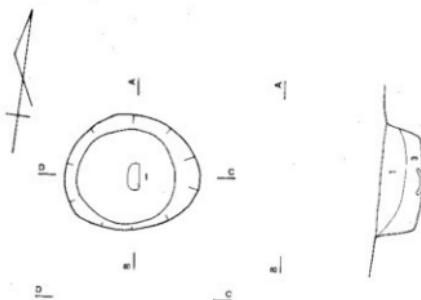
第67図 土壤実測図 4 ($1/20$)



第7号土壤

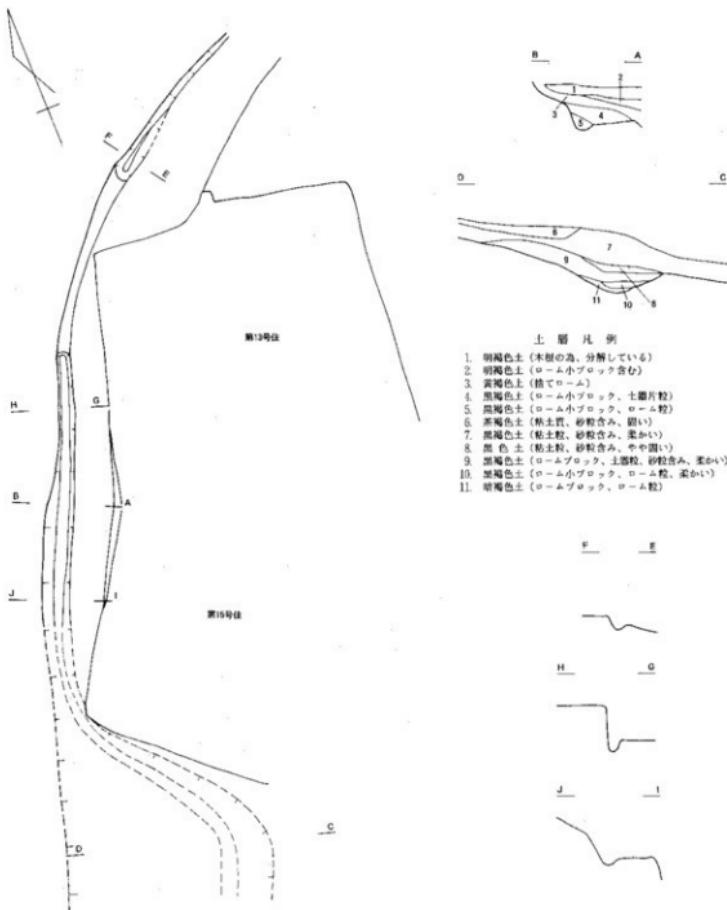
土 层 凡 例

1. 褐褐色土 (粘土質、粘土粒子含む)
2. 茶褐色土 (粘土ブロック)
3. 黑褐色土 (礫上粒子含む、粘土質)



第8号土壤

第68図 土壤実測図 5 ($1/20$ L = 35.00 m)



第69図 第2号溝実測図 (平面 $1/80$ L = 34.50 m)

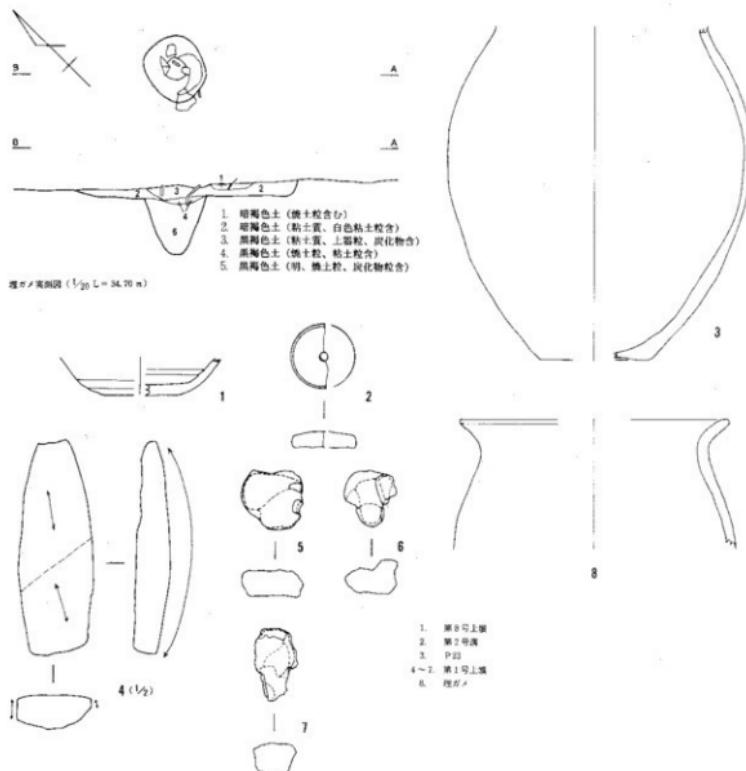
3) 第2号溝 (第69・72図、第22表、図版20・21)

本溝は、主郭部中央東側で、第13、15号住居址の西側に位置している。全長は、16.0 m、幅0.44 m、深さ0.75 mを計測する。溝は、主郭部東側で第13号住居址の北側から第13、15号住居址の西側に掘り込まれてから、第15号住居址南壁付近で南東へ曲りながら掘り込まれている。

第13号住居址付近では、第10、11号住居址を掘り切っている状況を呈している。南側では、第15号住居址の南壁上面を掘り切っているようであるが、中世城跡との重複から確定出来ない。溝の位置から、第13、15号住居址の雨除け溝のような位置関係を示している。

溝内出土遺物としては、土師器壺、甕などの小破片と、有孔円板（第72図N_o2）などが出土しており、図示出来たのは有孔円板1点のみである。

土層は、黒褐色土、黄褐色土、明褐色土が堆積している。堆積状況は、西方より流入した状況を示すと同時に第15号住居址覆土とも供有する土層である。



第70図 土壌・溝・その他出土遺物 (1/4)

4) 土壙、溝、その他の出土遺物 (第70図、第22表、図版 27)

本項では、主郭部（Iノ郭）で確認された土壙（第1～8号土壙）、第2号溝、p23内出土甕、埋甕等に關し記述する。No 1は、第8号土壙の底面中央部より出土した土師器杯で、 $\frac{1}{3}$ 程度の破片で体部上半を欠損している。体部上半は、磨滅しており内面は灯明皿等に使用したためであろうか、くすんでいる。No 2は、第2号溝より出土した有孔円板で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。端部は、やや下降している。No 3は、p23内より出土した土師器甕で $\frac{1}{3}$ 程度の破片である。器面は、磨滅しており内面は著しく剥離している。No 4は、第1号土壙底面より出土した砥石で上面と両側面は、良く使用されているが下面は自然面である。4面とも、やや黒くすんでいる。No 5～7は、第1号土壙より出土した試焼きの試料である。3点とも、比較的荒い胎土であるが焼成は良好である。第1号土壙の、中位層からの出土であり焼土が見られないため、本土壙に結び付くかは確定出来ない。No 8は埋甕である。 $\frac{1}{4}$ 程度の破片であり、北西部上塗下面に所在したためであろうか小さく割れ、器面も著しく磨滅している。

第22表 土壙、溝等出土遺物一覧表

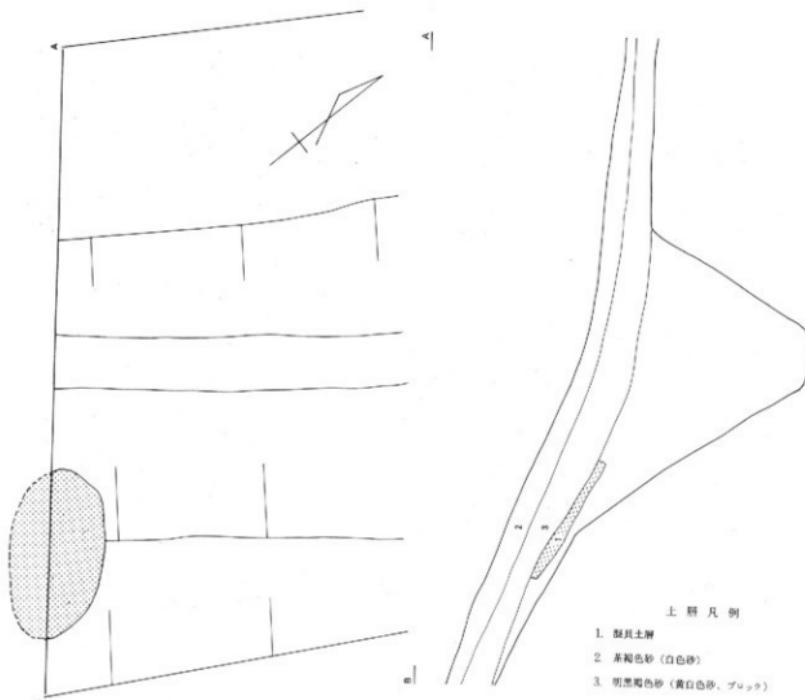
No.	名 称	出 土 レベ ル (cm)	法 量 (cm)					胎 土	焼 成	色 調	器型、整型の特徴	備 考
			口 径	底 径	現 高	陵 隆	高 台 径					
1	土師器 杯	底 面 接 着		6.0	3.1			長石、雲 母、石英 荒い	良好	暗 褐 色	体部は回転ヘラ削り、 ヘラナデ、底明ヘラ 削り、ヘラナデ $\frac{1}{2}$ 程度残	第 8 号 土 壙
2	有 孔 円 板	7	径 5.2	厚 1.3×0.9	孔 0.6			緻 密	良好	暗茶褐色	上下面是ヘラナデ、 側面はヘラ削り、ヘ ラナデ $\frac{1}{2}$ 程度残	第 2 号 溝 製
3	土師器 甕	10		8.0	27.0			雲母、長 石、砂 荒い	良好	暗茶褐色	表面マツ、内面剥 離著しい	p 23
4	砥 石	底 面 接 着	長 8.7	巾 3.0	厚 1.3		重 45g	石質 硬質泥岩			上面両側面を使用、 3面とも良く使用	第 1 号 土 壙
5	試 焼	一括 資 料						雲母、長 石、石英、 小石	良好	暗 褐 色 一部黒色		第 1 号 土 壙
6	試 焼	一括 資 料						長 石 雲 母	良好	暗 褐 色		第 1 号 土 壙
7	試 焼	一括 資 料						雲母、長 石、石英	良好	暗 褐 色		第 1 号 土 壙
8	土師器 甕		推口径 22.0		10.5			雲母、長 石、石英 荒い	良好	暗 褐 色 一部黒色	口～体部上まで $\frac{1}{2}$ 程 度の残 表面マツで整型不 明	埋 ガ メ

3. 古代、中世以外の遺構と遺物

今までには、中世城跡の遺構と遺物及び古代の堅穴住居址や、古代の遺構等に関して記述したが、本項ではこれ以外の遺構について記述する。本項で述べる遺構は、古代又は中世の時期に含まれるかどうかは、疑問を有するものもあり、一般的には近世以降といえよう。記述としては、各郭ごとに記述する。

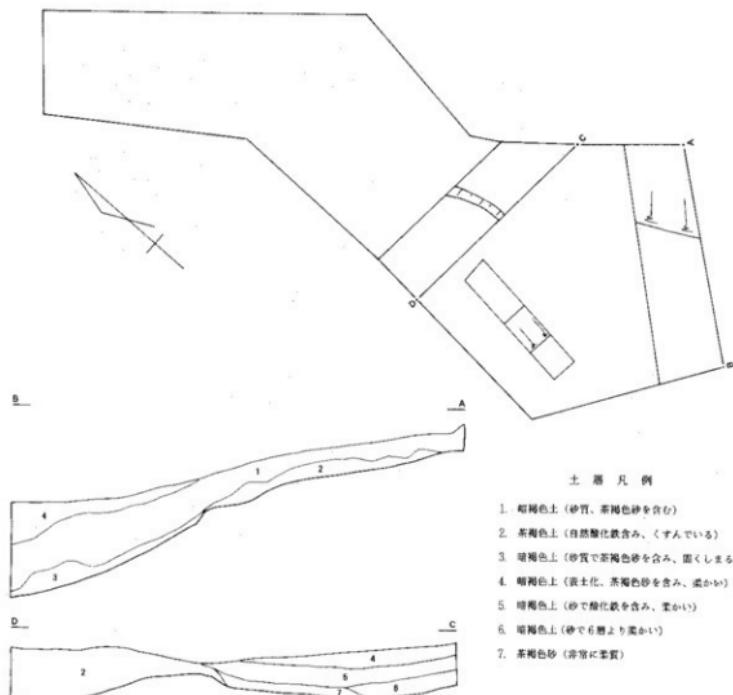
貝層（第70図、図版20）

貝層としては、IIノ郭西側の9T南端で、第9号土壙上面で1ヶ所確認されている。東側から、西側にかけて捨てられた状況で堆積しており、規模は長さ1.38m、幅0.78m、厚0.10mで、アサリの貝層である。純貝層ではなく、混土貝層である。遺物は、貝以外何ら出土しなかった。層状から、本城址廃城後のものである。



第71図 IIノ郭西側貝層実測図 (1/40)

Nノ郭の造構（第72図、図版19）



第72図 第IV郭実測図 (平面 $1/100$ S = $1/50$)

本Nノ郭は、主郭部（Iノ郭）北側斜面下で、IIの郭北側斜面下に位置している。地形では、IIノ郭北側斜面下（Nノ郭南側）から北側にかけて緩斜面を形成している。東側は、IIIノ郭西側からIIノ郭北尾根部まで帯郭状になっている。全長49.0mで、幅5~6mを計測する。また、西側の尾根部分には堀状の部分がある。調査は、IIIノ郭北側から設定した20Tと、東側に設定した21Tと、2Tの延長と、堀状の部分に22~24Tの合計6Tを設定して調査を行なった。調査の結果は、20T、21T、2T延長部の3Tから造構は確認されておらず、23Tと24Tで落ち込みが確認されている。22Tは、自然地形である。

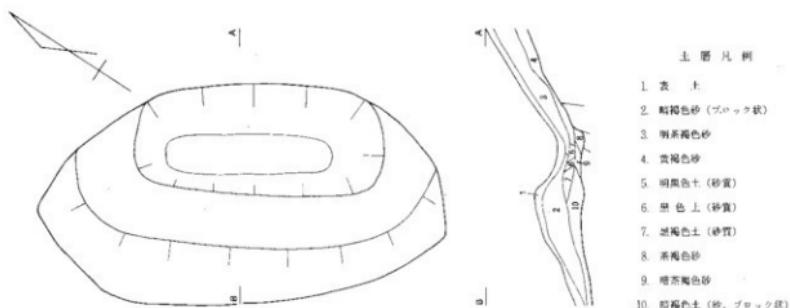
23Tは、堀状部分の中央南端部に幅0.60m、長さ2.70mで設定した。この結果、南側から0.70m北側の部分に深さ0.30mの落ち込みが確認された。壁は、緩やかな斜面で底面は北側に向い緩やかに下降している。

24Tは、長さ4.00m程度、幅1.10mで中央部に設定したTである。調査の結果は、中央部で深さが

0.50m程度の落ち込みが確認されている。壁は、23T同様斜めになっている。掘状部分の幅は、上面で2.50m程度である。

この2Tの土層は、23Tには暗褐色土と茶褐色砂が堆積しており、24Tも同様の土層である。これらの土層は、砂質で柔軟な土層で上側、東と西側より自然堆積したようである。出土遺物も皆無で、烟とする痕跡を欠いている。

井戸2（第73図、図版20）

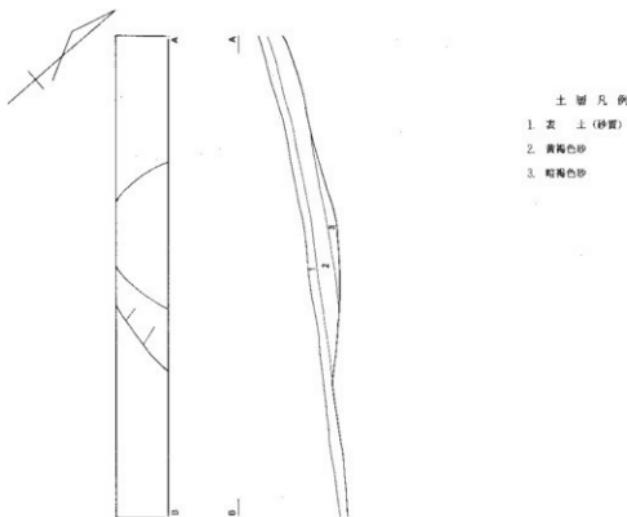


第73図 井戸2実測図 ($1/100$ L = 24.00 m)

井戸2は、Ⅱノ郭西側斜面下2段目のテラス北側で発見された遺構で、発見当初は井戸と判断されたが、調査の結果井戸の痕跡は見られず、土師器坏小片が5点出土したもの、その性格を明確することは出来なかった。また土層も、砂質の土層がほとんどで東側斜面より流れ込んだ状況を示している。中央部には、黒色土(砂質)が堆積しているものの水底にあった土層とは判断される土層ではない。性格等は、不明である。

Ⅹノ郭の遺構（第74図）

Ⅹノ郭は、主郭部（Iノ郭）の南東部で、Ⅱノ郭南東部（17、18T）より細長く突出した部分で、先端にかけて緩やかに下降している。T（27T）は、中央北東側の平坦な部分に長さ10.0mで設定し調査を行なった。この結果、Tのはば中央部で北東方向に向う落ち込みが確認された。この落ち込みは、Ⅹノ郭西端（Ⅱノ郭南東端）より始まっている。壁は、緩やかな斜面状をなし底面も壠鉢状をなしている。土層を見ると、黄褐色砂と暗褐色砂がⅡノ郭方向より堆積した自然堆積の状況を呈している。このため、本遺構が中世城跡の遺構とは判断出来なかった。落ち込みは、北東方向で一段下がるⅧノ郭（開墾）に向っている。出土遺物は、皆無であることからその時期、性格等は確定出来ない。

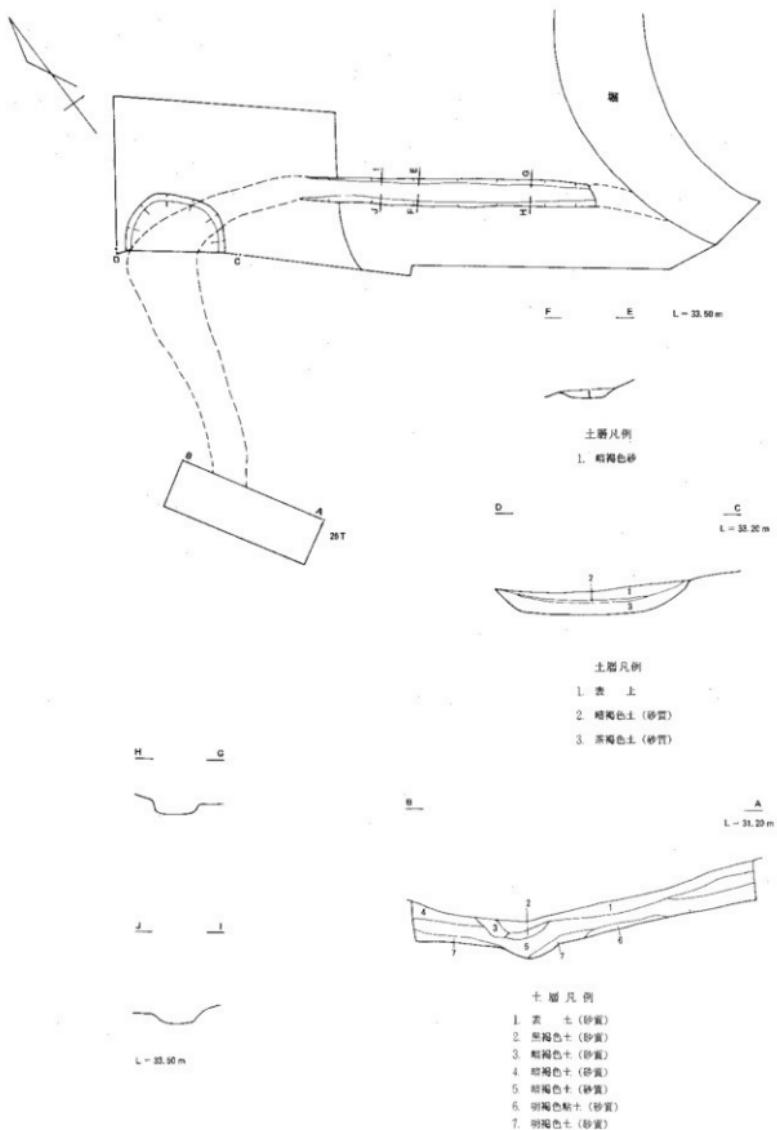


第74図 第IX郭（トレンチ実測図） $1/100$

道路状遺構（第75図、図版19）

道路状遺構としては、Ⅱノ郭北西部南側からVノ郭東側をへて西側斜面へ通じるように現存している。Ⅱノ郭北西部では、土塁が道路状の部分だけ切れているため、一見虎口のような状況を呈している。調査結果、現表土下からVノ郭部分で0.25m～0.22m程度掘り下げられており、西側斜面に下る部分では0.20m程度下がっている。西側斜面では、0.35m程度下がった所が底面である（26T）。このように、0.20mから0.35mまで地山を掘り下げて道路としているが、Ⅱノ郭北西部塁の上面を掘り切っていることから、近世以降の所産と考えられる。

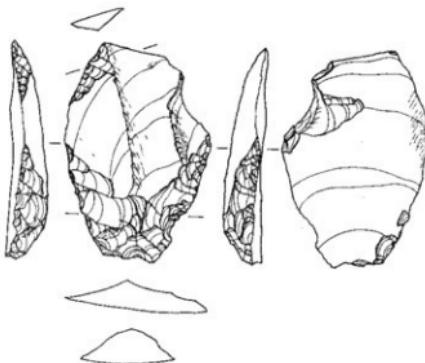
土層は、全て砂質の土層であり、遺物は皆無であった。



第75図 道路状遺構実測図 ($1/50$)

4. その他の遺物

旧石器時代石器（第76図、図版 28）

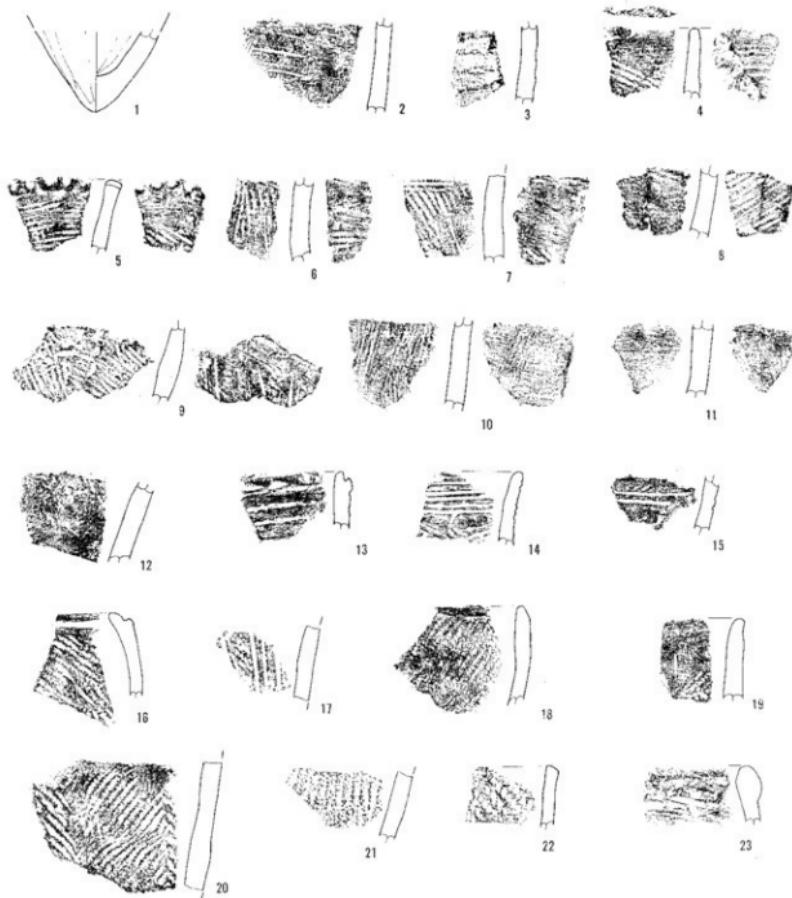


第76図 ナイフ実測図（1/1）

第76図の石器は、縦長剥片を素材として剥片の表面の両側線を調整して作られたナイフ形石器である。素材剥片は石器の基部側に打点がくる少し幅広の縦長剥片で、表面の素材剥離面も基部側から剥離してあって、単設打面石核から剥離されたものである。石器の調整は、主に表面を対照に施され、基部側両側線を中心部まで、また先端部左側にも施されている。この調整はプランティングではなく、尖頭器の調整に使われる平坦剥離によって行われ、初期の粗調整の剥離は中央部にまで達する。粗調整の順序は基部側から先端へ、また左が先にその後右側基部へと進み、この平坦剥離による粗調整をしたあと、細かい仕上げ調整してある。これによって素材剥片の打点は取ってしまっている。さらに調整剥離面を観察すると、基部端、右側中下部、裏面刃部の剥離面が、石器製作時の剥離面より新しく、基部側では新たな調整し直し、刃部は使用中欠損によるものと思われる。刃部は素材剥片の縁辺をそのまま利用、使用による少しの刃こぼれが認められる。刃部は中軸線に対して 79° という鈍角で石器の形態が幅広であるところから、東北系の東山型ナイフ形石器と形態的に似たところを有するが、調整が平坦剥離であることが異なる。いずれにしてもこのような形態のナイフ形石器は関東地方では類例が見当らず、東北地方にその形態的系統が求められると思われる。長さ4.4cm、幅3.0cm、厚さ0.8cm、石材は桃色のメノウで、不純物、気泡のない良質なものである。

（道沢）

縄文土器（第77図、図版 28）



第77図 縄文式土器拓影図（1/3）

本遺跡から出土した縄文土器には、早・前・後期に亘る土器群があるが、総体的に少なく総数でわずか34片が検出されたに過ぎない。そのうち時期不明・細片を除いた23片を図示した。なお時期別の内訳は、早期中葉3片、早期後葉8片、前期後葉3片、後期初頭7片、後期後葉1片である。

早期中葉の土器（1～3）

沈線文系土器を一括する。1は尖底で無文であるが、縦位の比較的粗いナデが施したもので、器厚が厚く、胎土に多量の砂粒と微量の石英・長石粒を含む。2は細沈線文を横位に施した胴部破片。

器面の粗れは著しく、胎土に多量に細砂と微細な石英粒を含有する。3は横位の太沈線を重層的に施しており、器厚は薄く、胎土に微量の雲母片を含む。以上3点は田戸下層式土器に比定することができる。

早期後葉の土器（4～12）

条痕文系土器群のうち初期の土器群を一括する。本群は条痕・無文・擦痕を基本に装飾的な意匠を施したものもある。4は比較的丁寧なヘラナデを行った後に外面は斜行する条痕、内面は横位の条痕を施し、口唇部には絶条体圧痕文を規則正しく施す。燃紐原体は0段Rで、円軸に撚ったものを使用している。原体径は5mmである。胎土は纖維を多量に含み、微細な雲母片を含有している。5は器面を丁寧なナデを施した後、外面は横位の条痕、内面は横位と斜位の条痕が看取される。また口唇部に半截竹管様工具による刻目が規則正しく綴位に認められ、胎土に微量の纖維と細砂が含まれる。6～9はいずれも胴部破片で、貝殻条痕文のみ看取できる土器片である。6・7は同一個体で外面は丁寧なナデの後に横位と斜位の条痕文が、内面は横位に施され、胎土に多量の纖維を含有する。8は外面の器面が粗く施文の觀察は困難であるが、内面は斜行する条痕文で、胎土に微量の纖維を含む。なお内外面とも灰白色を呈する。9は内外面とも条痕文が認められるが、施文方向は一定ではない。また胎土に多量の纖維と共に、微細な雲母片を含む。10は外面に横位の細かい条痕が施されているものの、施文工具が浅いため工具の判明は断定できない。しかし通常の貝殻復縫ではなく刷毛状の工具と考えられる。内面は綴位、横位のヘラナデが比較的粗く施され、胎土に多量の纖維と雲母片を含有。11は擦痕の土器で、外面が横位の丁寧なナデ、内面は比較的粗いナデが施され、胎土に微量の纖維と石英、長石粗粒を含み緻密である。焼成良好。12も擦痕の土器で、内外面ともナデが認められ、とくに内面にはミガキが加わる。胎土に微量の纖維と雲母片、石英・長石粗粒を多く含有する。以上これらはいずれも子母口式土器に比定される。

前期後半の土器（13～15）

13は口縁部破片で幅広の半截竹管による爪形文を施し、口唇部に割るような刺突文が付加される。胎土に微細な雲母片、石英粒を含む。14は櫛歯状工具による条痕文を施す口縁部破片で、胎土に微細な石英、長石粗粒を含有する。15は地文に単節Jを施し、半截竹管による平行沈線文を加える。13・15は浮島式土器、14は興津式土器である。

後期初頭の土器（16～22）

16は口縁下に一条の沈線を巡らし、LR繩文を施文する。胎土に長石粒を微量に含有する。17は、RL繩文を地文に、沈線で文様区画する胴部破片。胎土に多量の微細雲母片を含む。18はLR繩文が施された深鉢形土器。胎土に細砂を多く含む。19も同様、LR繩文を地文とするが、口縁部は幅3cmを無文帶として残す。胎土は細砂を多量に含有する。20～21は繩文施文の胴部破片。20は綴位の羽状繩文、21はLR繩文を施文する。以上は堀之内1式に比定される。

後期後葉の土器（22・23）

22は口唇部が外そぎ状を呈し、RL繩文を施す。胎土に石英粗粒を多く含む。23は口縁部は肥厚し、連続した爪形文を施す紐線が貼付され、斜行条線文が施される。22が加曾利B1式、23が安行1式の粗製土器である。

（小川）

弥生式土器（第78図、図版28）

弥生式土器は、ほとんどが破片で出土总数 点である。このうち、28点を選び第80図に図示した。№1～7は、口縁部である。№1は、無文帶の口縁部であり、№2は口唇部に繩文を施文後に刻みを入れ、口縁部には繩文を施文している。№3～5は、口唇部に刻みと繩文が施文されており、口縁部には2～3本1単位の波状沈線が施文されている。№3は、口唇部に刻みを有しており、№4と5は繩文が施文されている。沈線は、№3は2本で№4と5は3本で左から右に施文されている。胎土は、№4が緻密である以外長石、石英、雲母を含み、焼成は良好である。色調は、№2が淡明褐色で№3は暗茶褐色である。№4・5は、暗褐色を呈している。出土地点は、№2が第6号住居址より、№3は第13号住居址より、№4は主郭部北側より、№5は第15号住居址より、各々出土している。№6は、口唇部と口縁部に繩文が施文されており、井戸1よりの出土である。器型としては、深鉢型土器と壺型土器と推定される。

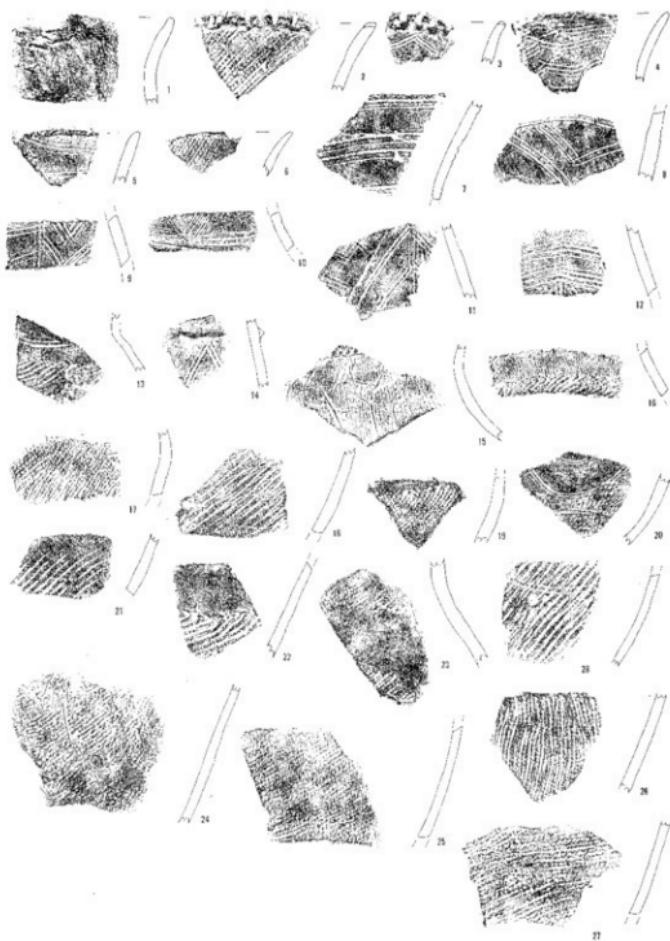
№7～15までは、頸部片で半截竹管による文様が主体である。№7は、4本1単位の沈線による区画であり、№8は沈線で上下区画と、2本1単位の沈線を右から左に施文している。№9・11は、半截竹管による縦位区画と矢羽根文が施文されている。№10は、半截竹管による横位上下区画と4本1単位の半截竹管による文様が縦位に施文されている。№12は、半截竹管により縦位区画から横位区画を行なっている。№13は、半截竹管による上下区画と体部上半に繩文が施文されている。№14は、低い降帯と半截竹管による文様帶である。№15は、ヘラナデと繩文が施文されている。胎土は、№15が緻密である以外雲母、長石、石英を含み、焼成は良好である。色調は、暗褐色を呈している。出土地点は、№7と12が第10号住居址より、№9と11が第12号住居址より、№10が14Tより、№14が井戸1より、№8・13・15は主郭部北側より各々出土している。器型としては壺型土器のようである。

№16～28は、体部片で繩文を主体とした文様帶である。№16は、ヘラナデと繩文が施文され、№20は半截竹管による円弧状の文様と繩文が施文されている。№22は、上半は無文帶で№23は中央に無文帶を有し、繩文で上下区画を行なっている。他は、繩文が施文されている。胎土は、雲母、長石、石英、小石等を含み、あまり精製されていない。焼成は良好で、色調は暗褐色（№16・20・22～25）、黒褐色（№17・26・27）、茶褐色（№18）、明褐色（№19・28）を呈している。出土地点は、№24と27が主郭部東側より、№28が第9号住居址より、№23・26は第13号住居址より、№16・21は第12号住居址より、№25は井戸1より、№19・22は第15号住居址より、№18・20はⅡノ郭9Tより各々出土している。

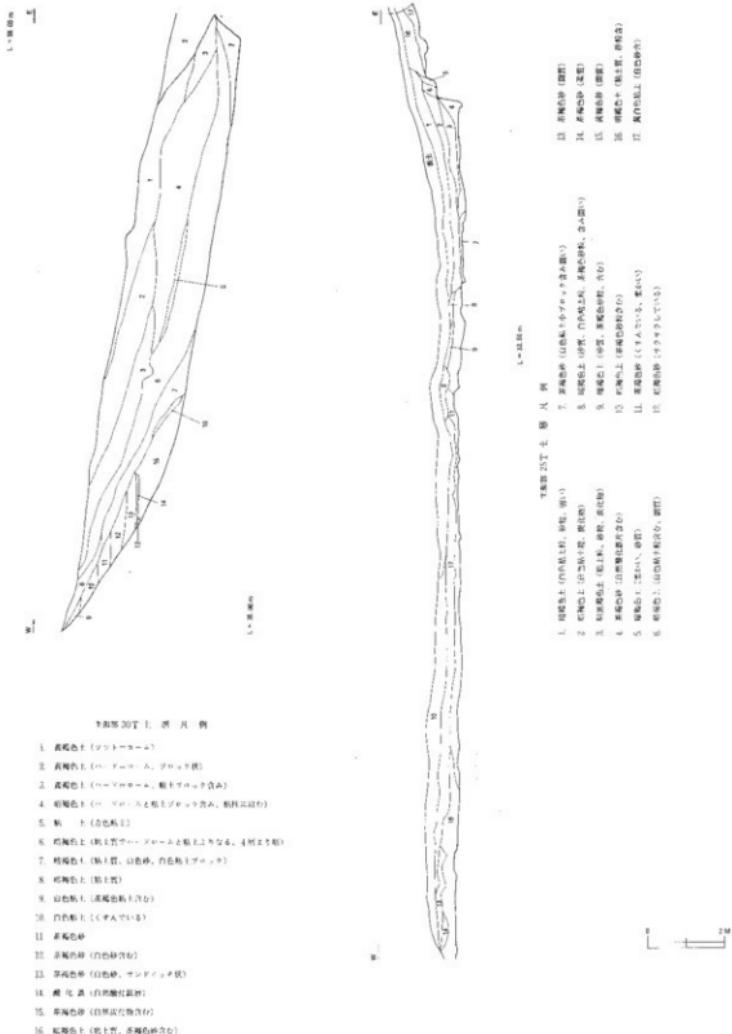
Vノ郭及主郭部東側土層について（第79図、図版19）

本項は、調査結果の概要で一度述べているが、子略な記述は中世及び中世以前の遺構と遺物の項でも述べなかったので、ここで一項を作り記述することとした。本来は、遺構の有無を問わず各節で述べるべき点であるが、行方郡北浦村古墳敷遺跡の例もあるため、一項を作った次第である。

Vノ郭は、主郭部の北西部で本城跡が所在する台地から北西方向に細長く突出した台地で、先端は一部土砂崩れか削平され急斜面となっている。主郭部からは、約3.00m下位に位置している。現況では、Ⅱノ郭北西部から緩やかに下降し中央部はほぼ平坦であるが、馬背状となっている。遺構として



第78図 弱生式土器拓影図 (1/3)



第79図 主郭部30T Vノ郭土層図

は、台地の東側に第16号住居址が1棟確認されている。

Vの郭の土層は、現表土層から砂質の土層で、黒色土や褐色土層は遺構内以外では見られない。住居址の東側は、自然層であり住居址（第16号住居址）は、砂層中に掘り込まれた住居址である。第79図25T（Vノ郭T）土層図に示したように、住居址の覆土以外茶褐色砂、暗褐色砂、黄褐色砂のみである。本城跡と、北浦村の例も同様で上から1段か2段下がった部分で、やや広く平坦な所に遺構が所在している。このような所からの遺構検出は、当麻生町では最初の発見例となろうし、当町のみならず広く今後注意すべき点といえよう。大系的な研究は、資料の増加を待たねばならない。

主郭部東側土層は、主郭部の地質を知る上で重要な土層である。主郭部は、土壘を除くと現表土、粘土質の明褐色土が主郭部覆土をなしており、ローム層は東側の緩斜面部で認められている。この部分以外は、粘土層が主郭部の地山となっている。ローム層は、主郭部の東側で第6号住居址南側から第10・11・12号住居址西側をへて、第15号住居址南側まで所在している。このように、主郭部東側にのみ所在している。

30Tは、主郭部東側で遺構の所在しない部分に長さ 16.50 mで設定したTである。第79図の30T土層図が示すように、T西側で第9～15層までの7層は整然と堆積している自然層で、粘土と砂の層である。ここの中側で、第1～8層は土層図が示すように西方より流入した状況を示している。第1層は、ソフトロームで第2層はハードロームである。第3・4・6層は、ハードローム（粘土質でブロック状）と粘土ブロックとの混在層で、やや暗褐色化しており固質となっている。

こういった堆積状況の相異は、地滑り、断層、削平等が考えられる。これは、第9～15層の中側が直線に切れているためである。断層ならば、Tの下層にその一部が見られるし他の部分にもその痕跡は残るのが自然であるが、他の箇所では見られない。削平ならば、かなり古く古墳時代には終了していなければならない。これは、第2層上面に住居址が掘り込まれているため、不自然である。地滑りが、かなり古い時期にあり、この後にロームが堆積したと考えるのが自然ではなかろうか。T内の土層は、人為的に捨てられたものではなく自然層であることからも、地滑り→自然堆積が考えられる点ではなかろうか。主郭部内では、ローム層は井戸1の埋土として認められたのみで、土壘内にも認められない事は前に述べている。したがって、ロームの大部分は流出し主郭部の平坦部には薄く堆積していたものと推察される。今後調査例の増加を待ち、何らかの検討が加えられることを希望する次第である。

ま　と　め

以上が、本二本木城跡の調査結果である。本文中の「中世の遺構と遺物」の項で述べたように、きわめて少量の遺構と遺物である。特に、遺物が少量であることは本城跡の性格を示しているものと判断される。また、堀の埋没状況と出土遺物は、時期的な問題点を明らかにする所である。本城跡の性格は、その立地条件から領域支配強化及び戦闘を目的としての築城ではなく、谷津（又は谷地）の開発を主目的とした築城と考えられる。つまり、領域支配等を行なうには現在地より北東部の広い台地上に占地した方がより効果的であり、北方に対する備えにも好都合である。しかし、現在地の占地では戦闘となった時孤立する可能性がきわめて高い。このことから、領域支配等を目的とした占地とは

考えにくい。また本城跡は、東側と西側に広く深い谷津（又は谷地）に面している。東側の谷津に対しては、その奥で水源を抑える位置に相当し西側では、谷津の中流域を抑える位置に相当する。この両谷津は、麻生城下の城下川による開折谷であることから、両谷津を抑え開発することをその主たる目的として臨時築城的性格を有する砦と考えられる。したがって、開発が終了すれば廃城となる。このため、その実効使用期間は比較的短期間であったと考えられる。

時期では、堀内出土の内耳土器、五輪塔空風輪とおろし皿が、本城の年代を示している。内耳土器は、堀が埋められると同時に埋められており、しかも固くしまった土層内からの出土であることから2期目の埋没である。このため、本城跡の築城時期は15世紀後半代が相定される。第2期目が、五輪塔から16世紀中葉後半代に相当する。第3期目が、16世紀後半以降となるが、第2～3期目にかけてが本城跡の再利用期であり、天正12年（1584）に麻生氏が島崎氏により滅亡する時期に相当する。しかし、本城跡と麻生氏との関係は不明な部分が多いものの、麻生氏領域内で麻生氏滅亡以前の築城であることから、麻生氏関係の砦と推定される。

城跡以外では、主郭部に古墳時代から平安時代にかけての住居址が、15棟狭い範囲に集中していることと、Vノ郭に奈良時代の住居址が1棟掘り込まれていることは、北浦村の例と合せ今後の課題といえよう。遺構は不明であるが、旧石器時代のナイフや、縄文式土器片（早期～後期）と弥生式土器片（印彫、手賀沼系）が出土している。特に、弥生式土器片の発見は、麻生町の弥生文化を知る上で好資料になるものと考えられる。

今後の課題としては、本城跡のような城館が麻生町でどのような立地条件にあるか、遺構と遺物はどうか等々について、調査例を加えた上で充分なる論究が必要である。もちろん、本城跡の調査例は麻生町の中世史を知る上での一資料になるであろうし、中世城郭のみならず古代も今後の資料増加を待って、論究されることを希望したい。

なお、現地調査から報告書執筆に到るまで、御協力下された関係各位に対し誌上であるが謝意を表する次第である。

（藤原）

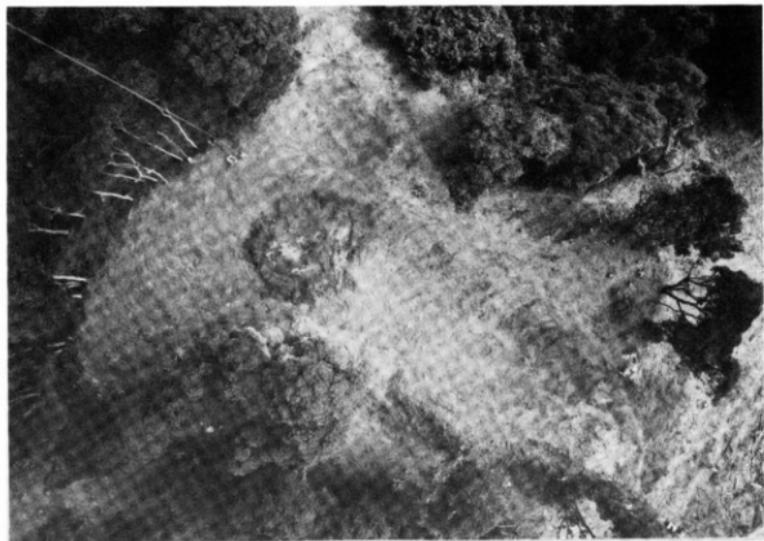
参考文献

- 古館遺跡調査報告書
北浦村山田地区遺跡発掘調査会
1990年3月
- 常陸公事塚古墳群
1989年6月 麻生町教育委員会
- 房総弥生式土器の研究（資料編）
日本考古学研究所集報VI 昭和59年3月
- 房総弥生式土器の研究（研究編）
日本考古学研究所集報VII 昭和60年3月
- 大麻貝塚発掘調査報告書
大麻貝塚発掘調査会 1990年2月
- 房総における弥生文化の攝取とその波及について
研究紀要3 千葉県文化財センター
昭和53年3月
- 麻生の城館
麻生の文化 第20・21号所収 汀 安衛
- あそうの遺跡
麻生町教育委員会 昭和57年10月

図版1 現 態



二本木城跡全景



二本木城跡主郭部近景

図版2 遺構全景



遺構全景



遺構近景

図版3 遺跡近景



主郭部
北側中央部



主郭部
中央東側



主郭部
中央西側

図版 4 遺跡現況 1



1 遺跡遠景



5 主郭部北西部



2 遺跡近景



6 主郭部中央土塁



3 主郭部中央部



7 遺跡北東部 (IIノ郭)



4 主郭部北東部



8 遺跡北西部 (Vノ郭)

図版5 遺跡現況2



1 遺跡北東部（主郭とIIIノ郭間）



5 遺跡北西部（IIノ郭）



2 遺跡北側（IIノ郭）



6 遺跡北西部（IIノ郭）



3 遺跡北側（II・IVノ郭）



7 遺跡西側（IIノ郭）



4 遺跡北西部（IIノ郭）



8 遺跡南側（IIノ郭）

図版6 遺跡現況 3



1



5



2



6



3



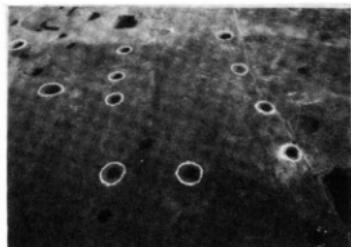
7



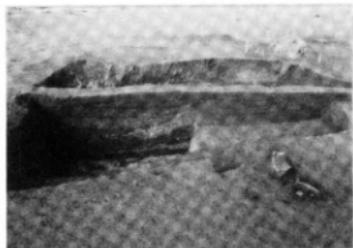
4

1 遺跡南東部 (IIノ郭)	5 遺跡西側 (北側)
2 遺跡東部 (VI~VIIノ郭)	6 遺跡西側 (中央部)
3 南側土壙	7 遺跡西側 (南側)
4 遺跡北西部	

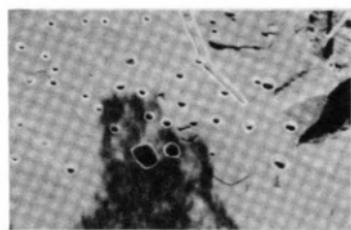
図版7 主郭部（Iノ郭）遺構



1 第1・2号掘立柱建物址全景



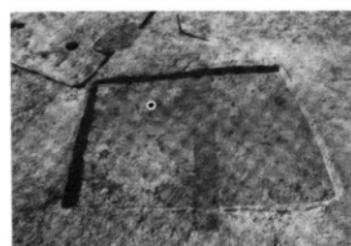
5 第1・2号地下式倉庫土層



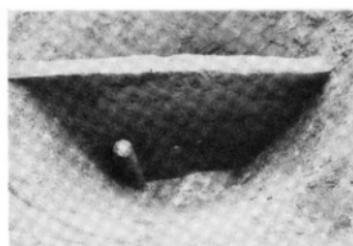
2 第3号掘立柱建物址、柵列全景



6 第1号地下式倉庫全景



3 第1号窯穴全景



7 井戸1 土層



4 第1号溝全景



8 井戸1 全景

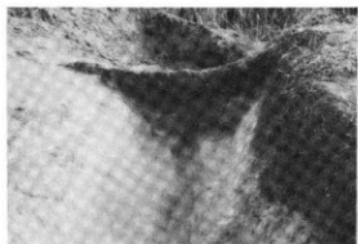
図版8 IIノ郭遺構1



1 1 T 全景（西方より）



5 2 T 堀



2 1 T 土層



6 3 T 全景



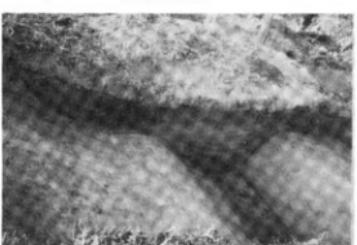
3 1 T 全景（東方より）



7 3 T 堀全景

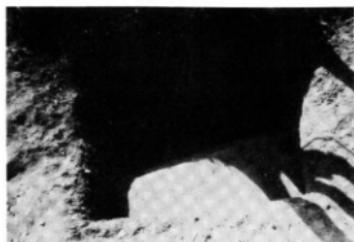


4 2 T 全景



8 3 T 堀土層

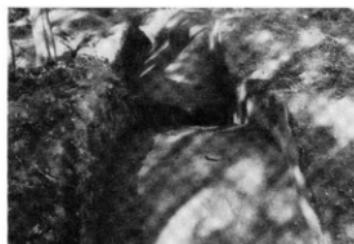
図版9 IIノ郭遺構 2



1 4 T 全景



5 6 T 堀



2 5 T 全景



6 7 T 全景



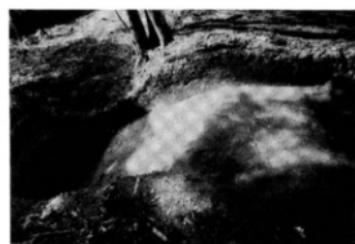
3 5 T 堀、五輪塔



7 8 T 全景



4 6 T 全景



8 9 T 全景

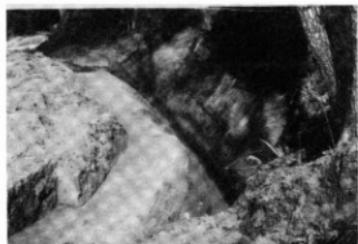
図版10 IIノ郭遺構 3



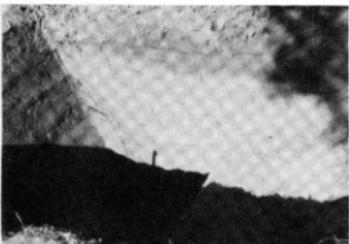
1 9 T-kuru



5 11 T 全景



2 9 T 拡張区堀全景



6 11 T-kuru



3 9 T 拡張区堀上層



7 12 T 全景



4 10 T-kuru



8 12 T-kuru

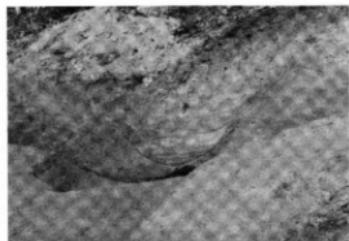
図版11 IIノ郭遺構 4



1 13T 北側全景



5 14T 全景



2 13T 中央部堀



6 14T 堀



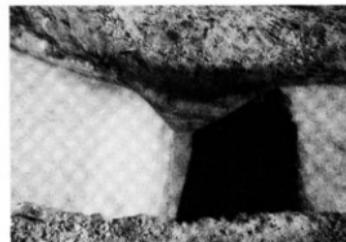
3 13T 東側全景



7 15T 全景



4 13T 東側堀土層



8 15T 堀

図版12 IIノ郭遺構 5



1 16T全景



5 虎口1全景



2 17T全景



6 虎口1階段全景



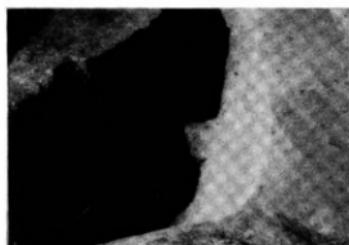
3 17T堀



7 虎口2全景(土橋)



4 28T全景

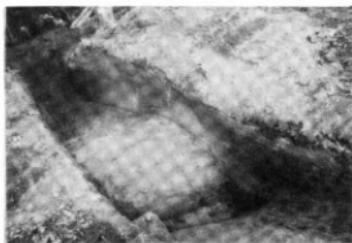


8 虎口2近景(土橋)

図版13 土壘、西側斜面盛土



1 主郭部中央土壘土層



5 北側斜面盛土 (2 T)



2 T 土壘土層



6 8 T



3 T 土壘土層



7 9 T

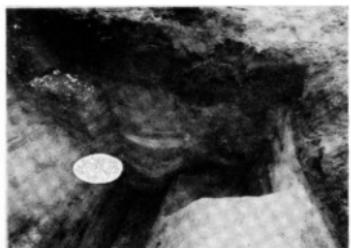


4 14 T 土壘土層

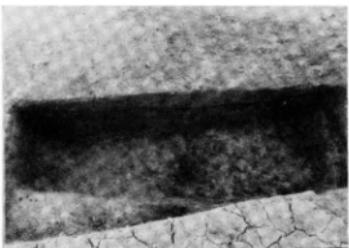


8 12 T

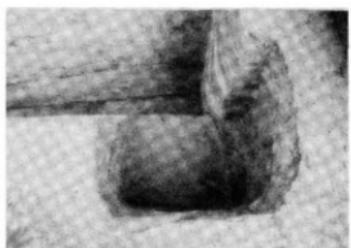
图版14 土 壤



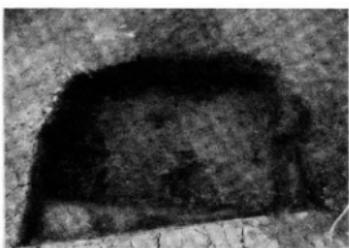
1 第9号土壤土层（中世）



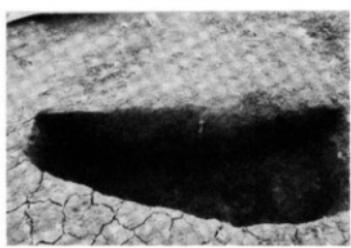
5 第2号土壤土层



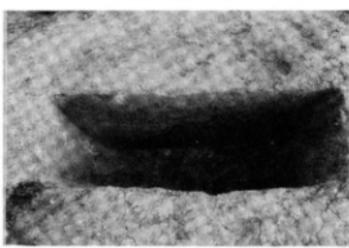
2 第9号土壤全景（中世）



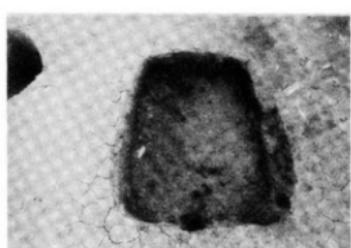
6 第2号土壤全景



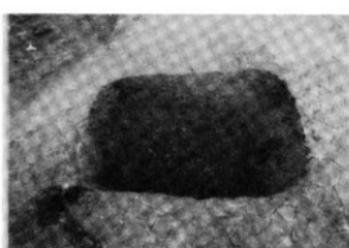
3 第1号土壤土层



7 第3号土壤土层



4 第1号土壤全景

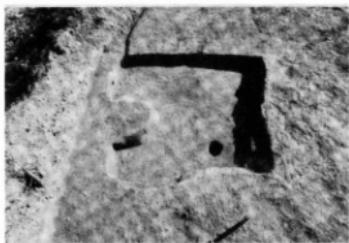


8 第3号土壤全景

図版15 住居址 1



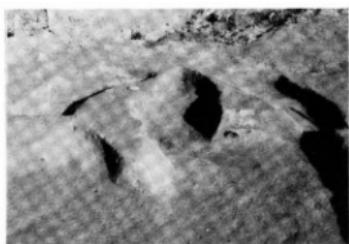
1 第1号住居址全景



5 第3号住居址全景



2 第1号住居址カマド



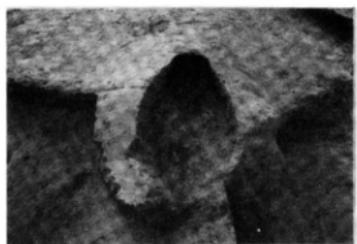
6 第3号住居址カマド(新)



3 第2号住居址全景



7 第3号住居址カマド(旧)



4 第2号住居址カマド



8 第4号住居址遺物出土状況

図版16 住居址 2



1 第4・5号住居址全景



5 第6号住居址カマド



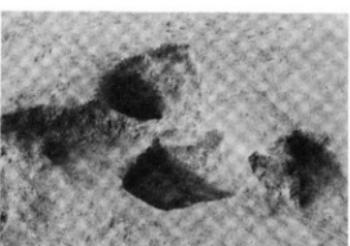
2 第4号住居址カマド



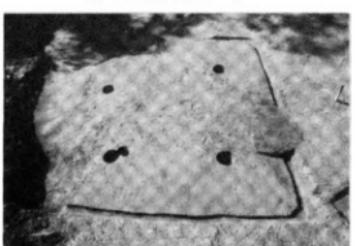
6 第7・8・9号住居址全景



3 第5号住居址カマド



7 第9号住居址カマド



4 第6号住居址全景

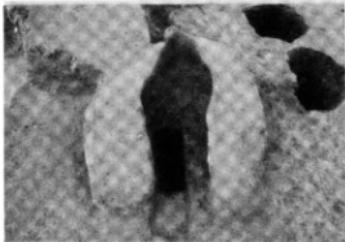


8 第9号住居址貯蔵穴

图版17 住居址 3



1 第10・11・12号住居址全景



5 第11号住居址カマド



2 第10号住居址全景



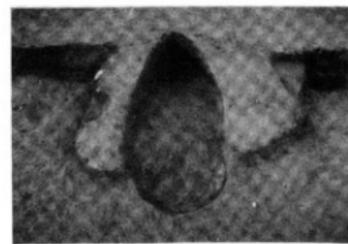
6 第13・15号住居址遺物出土状況



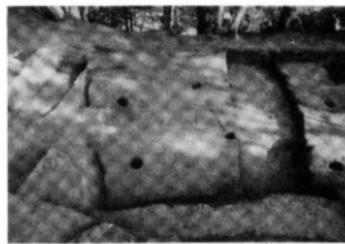
3 第11号住居址全景



7 第13号住居址遺物出土状況



4 第10号住居址カマド



8 第13号住居址全景

図版18 住居址 4



1



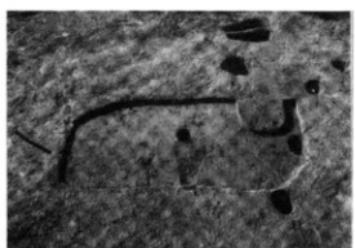
5



2



6



3



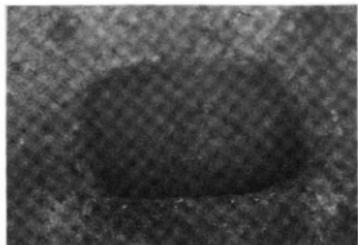
7



4

1 第15号住居址全景	5 第16号住居址土層
2 第13号住居址カマド	6 第16号住居址全景
3 第14号住居址全景	7 第16号住居址カマド
4 第14号住居址カマド	

図版19 土壌、其の他の遺構



1 第4号土壤全景



5 IVノ郭 T全景



2 主郭部 T全景



6 IIノ郭 西部全景



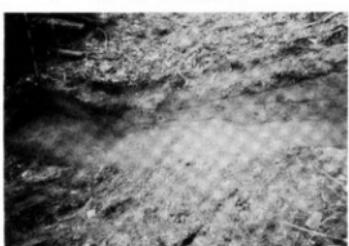
3 Vノ郭 T全景



7 IIノ郭 道路状遺構



4 IIノ郭31 T全景



8 IIノ郭 道路状遺構

図版20 井戸、溝及遺物出土状況 1



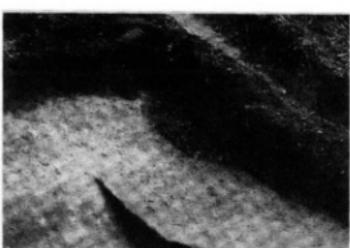
1 井戸 2 全景



5 5 T 五輪塔出土状況



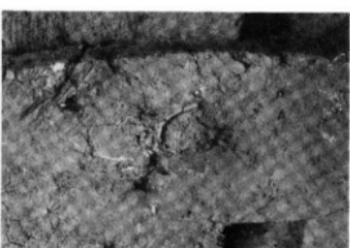
2 井戸 2 土層



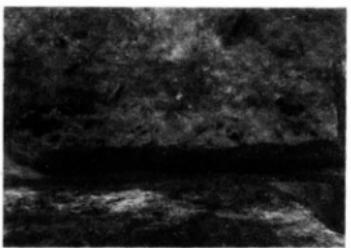
6 10 T 貝層



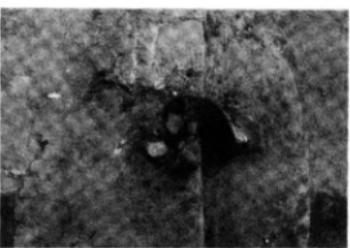
3 第 2 号溝上層



7 埋甕出土状況



4 1 T 内耳出土状況

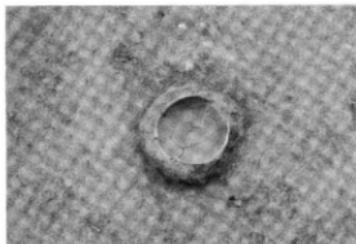


8 埋甕

图版21 遗物出土状况



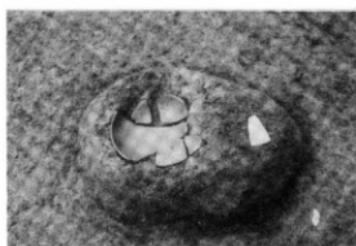
1 第3号住居址No.1



5 第15号住居址No.1



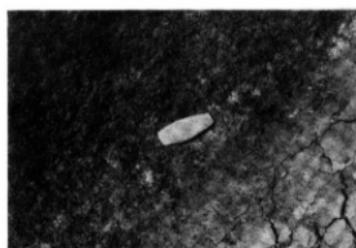
2 第4号住居址No.1



6 第16号住居址No.1、15



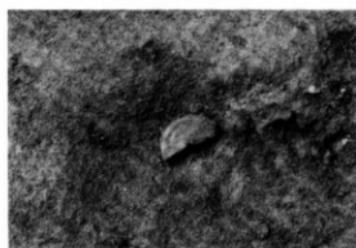
3 第11号住居址No.1～3



7 第1号土壤砾石

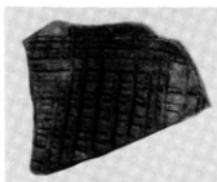


4 第12号住居址No.1

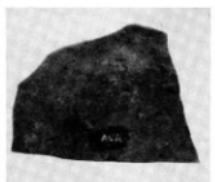


8 第2号溝土製図版

図版22 出土遺物1（中世）



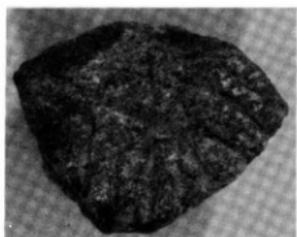
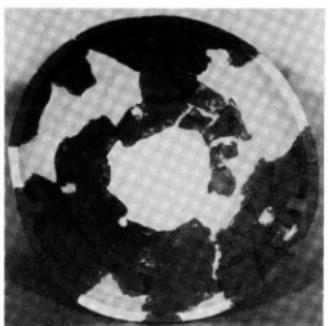
おろし皿（主郭部）



おろし皿（主郭部）



内耳土器（1T）



石臼
(2T)

カワラケ



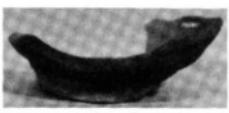
(28T)



(9T)



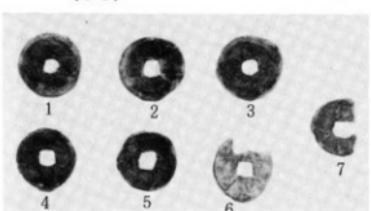
五輪塔空風輪（5T）



(9T)

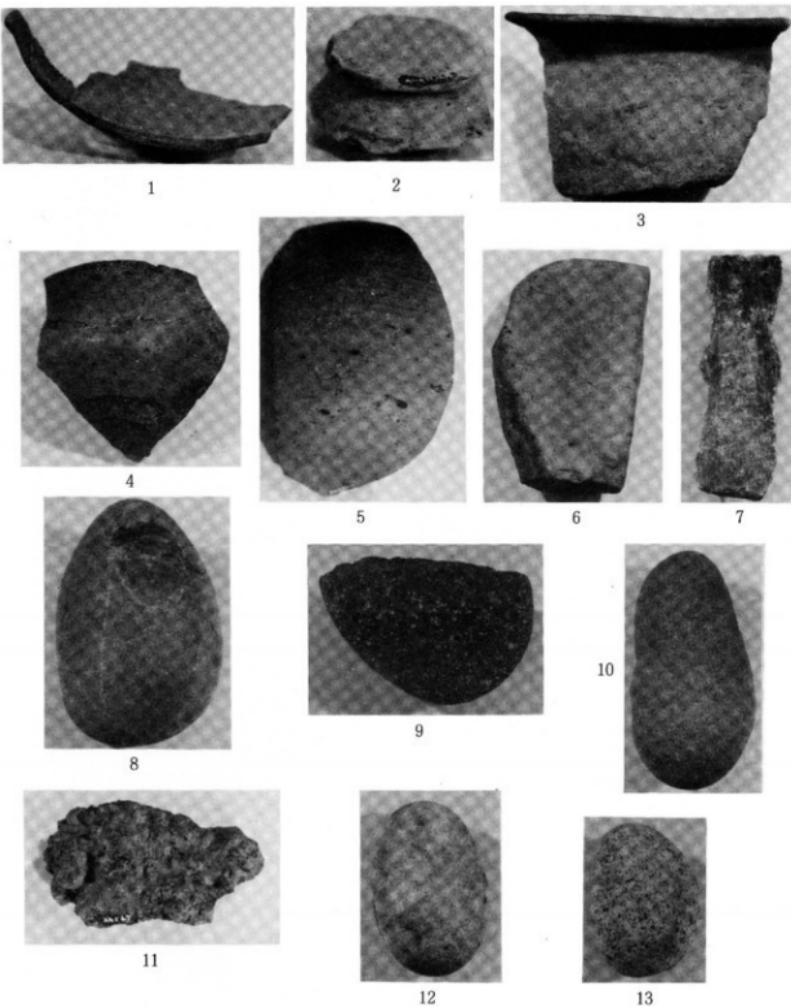


(13T)



古銭（1～6=第9号土壤、7=主郭部）

図版23 出土遺物2（井戸、T）



井戸1 (No.1~7)

2 T No.8 (敲石)

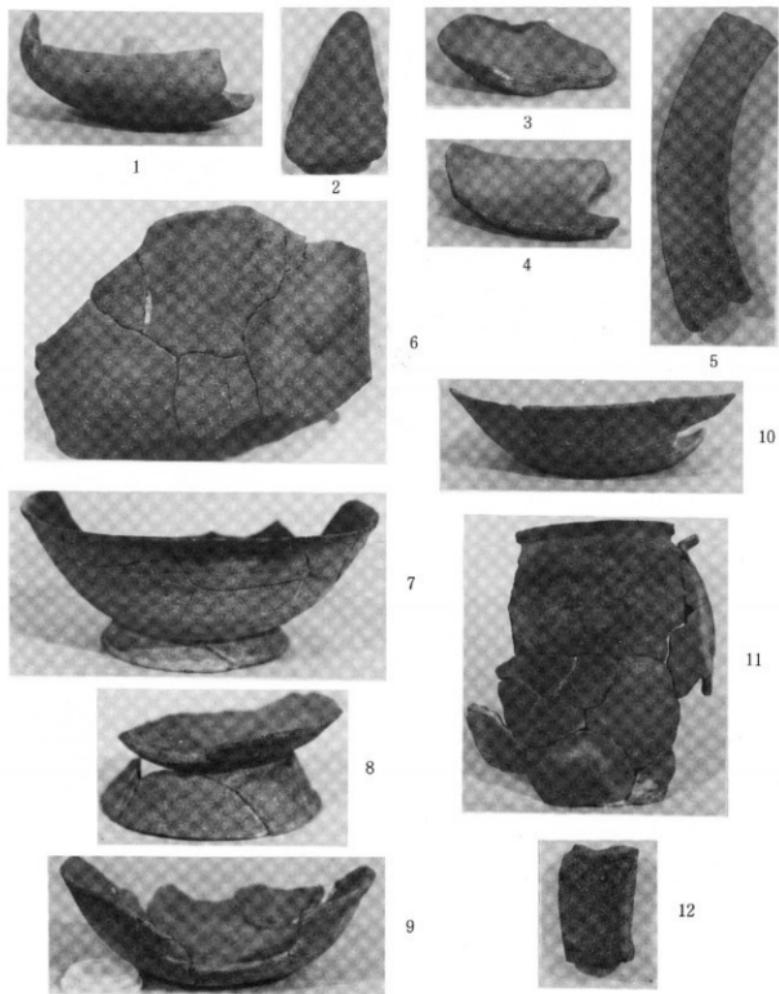
7 T No.9 (敲石)

9 T No.10 (敲石)

9 T No.11 (スラグ)

主郭部 No.12・13 (敲石)

図版24 出土遺物3（住居址）

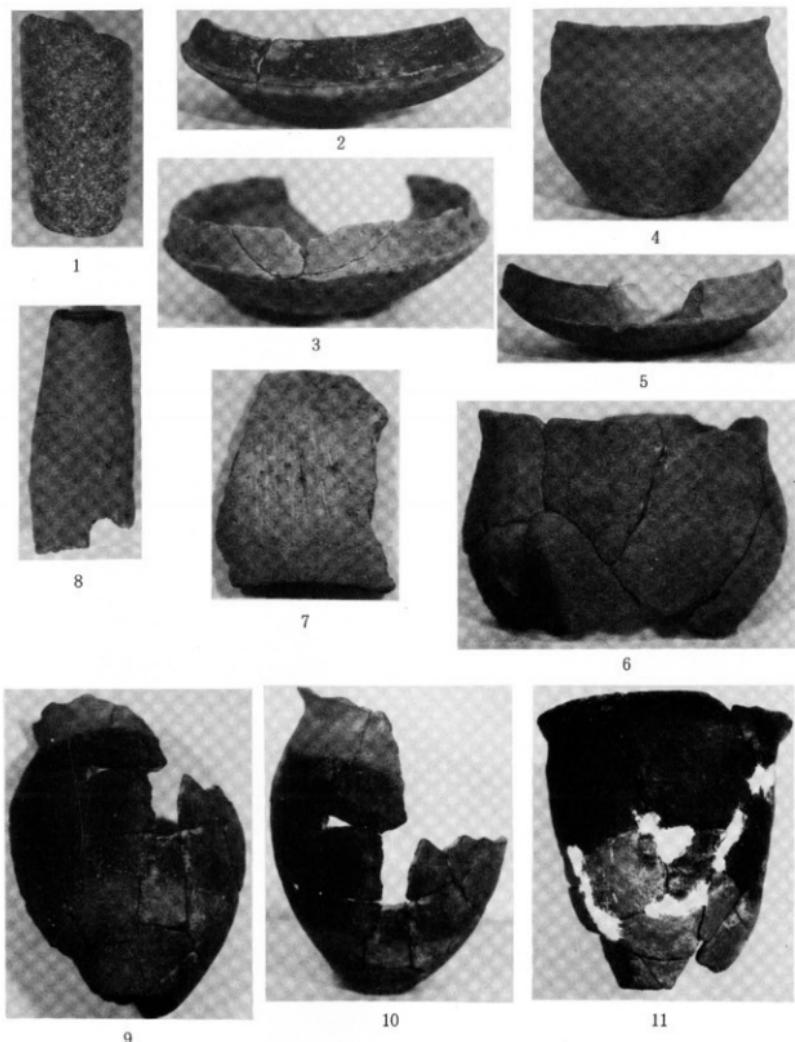


第1号住 1・2

第3号住 3~6

第5号住 7~12

図版25 出土遺物 4 (住居址)



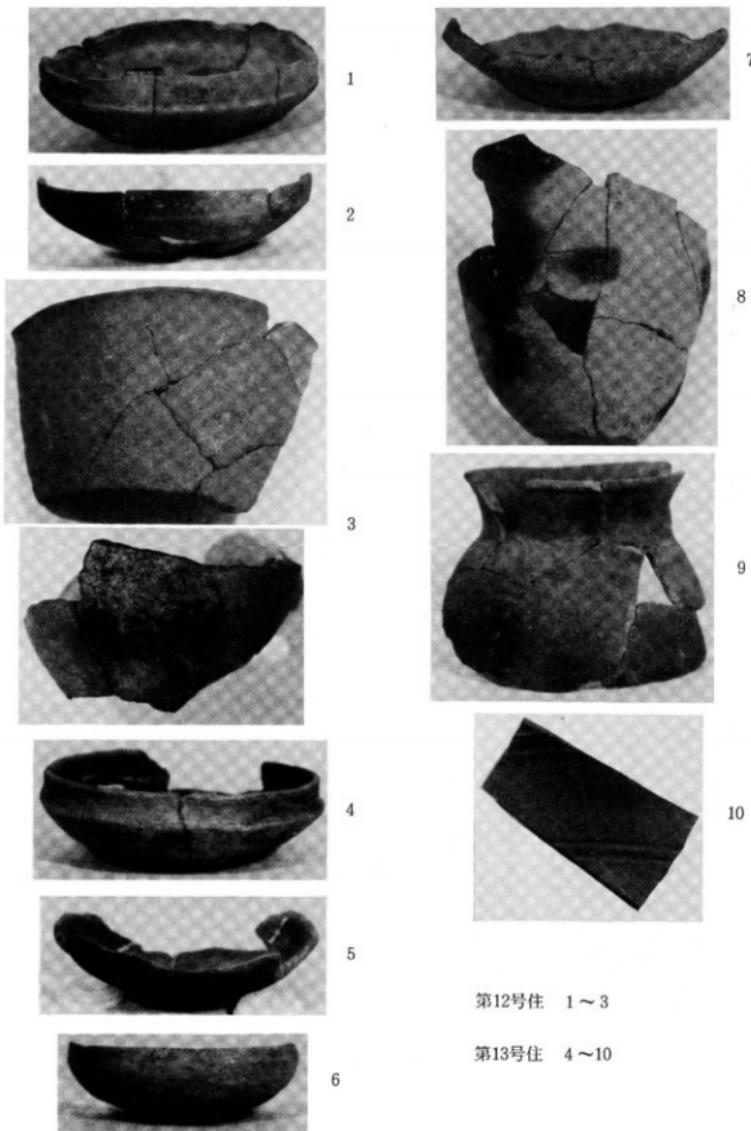
第8号住 1

第9号住 2

第10号住 4~8

第11号住 9~11

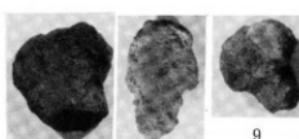
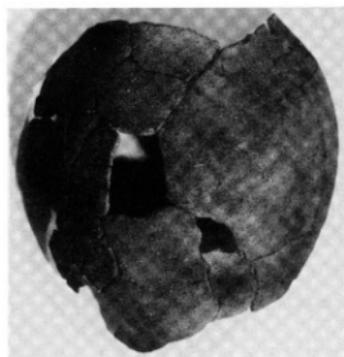
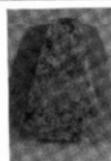
図版26 出土遺物 5 (住居址)



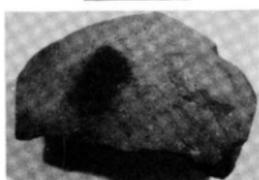
第12号住 1 ~ 3

第13号住 4 ~ 10

図版27 出土遺物 6 (住居址、土壤)



第1号土壤



第2号溝



14



P 2

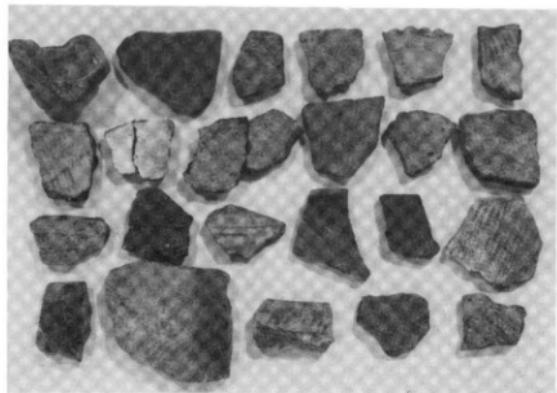
図版28 出土遺物7（旧石器、縄文、弥生）



旧石器時代

ナイフ

縄文式土器



弥生式土器



弥生式土器

茨城県行方郡麻生町
二本木城跡調査報告書

編集 二本木城跡調査会
発行 麻生町教育委員会

平成3年3月31日

印刷 コイシ印刷
☎(0476) 98-1836